神様のお使い

花香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様のお使い

【Ｎコード】
Ｎ３７７７Ｋ

【作者名】
花香

【あらすじ】
天使に神子に聖人・聖女。そんなご大層なのと知り合いになれなくても、世の中に魔道師、魔術師、魔法師っていう異能を持つ奴らはごろごろいる。別に珍しくもなんともないが、一つ言っておく。俺はそんなご大層な人物でも、異能を持っているわけでもなんでもない。ちょっと目がいいだけの「普通」の人間だ。それだけのはずなんだが……どうしてこんな！！
※これは、神々の「（あくまで神々からしたら）ほんの小さなお願い」に「（あくまで一般人だと主張する）俺」がそれを叶えるべく、

奔走する物語？

いつものはじまり

「お前、どこの？」

人でごった返す室内で、何を思ったか唐突に振り返って尋ねた男に、俺はあっさりと返した。

「神霊課一種」

「どこだそれ。」

「魔法省の１つだよ。」

怪訝そうな顔に答えたのに、男の顔は更に輪をかけて怪訝になった。モゴモゴと「そんなのあったかな…」との疑問には聞こえなかったことにして、俺はさっさとその場を去ることにした。

一々応える謂れはないし…

≪早く来なさいな≫

性別不明な美声音が脳裏を揺すぶったからだ。

『はいはい』

と脳裏でこれから直ぐにという意思を送る。

そうでもしないと、＜彼ら＞はとっても不機嫌になるのだ。

不機嫌になった＜彼ら＞ほど手に負えないモノはない。

我が侭とか、理不尽なんて何のその。

＜彼ら＞の『些細な願いごと』に幾ら胃が痛い思いをしようと、＜彼ら＞のようなモノ達を相手に何を言っても無駄だ。
俺が出来るのは精々胃を痛めない程度にするために、日々＜彼ら＞の『お願いごと』に諦めて付き合うしかない。

嗚呼、いやだ

空は、俺の心を反映しているかのように、どんよりと曇っていた。

壱、神様の願いごと

――神様に仕えるモノ、これを天使という。

これは誰でも知っていることだが、天使は神様の側使えみたいなもので、神様には劣るが人間なんか目じゃないくらいの『力』を持っている。

けれど、これも常識だが、彼らは＜特別な人＞、即ち天使と契約を結んだ眷属にしか見ることができない。

つまり、普通のそこらにいるおっさん、おばさんは元より、あの辺にいるチビたちにも見えない。

純粋な心を持っているという、あそこですやすや寝ている赤子にも見えないだろう。

神秘性は十二分にあるが、日常的な存在じゃないのは当然。

きっと、世間の人間は天使との契約なんかも忘れ去っているだろう。

ここ何百年かは、眷属が誕生していないらしいから、今や天使は想像上の生物並みの扱いになっている。

――神様の『声』を届けるモノ、これを神子（みこ）という。

彼らは、天使とは違って見ることも触ることも出来る。

会いたいと思えば会えるし、神様の『預言』を教えてくれる。

ただし、教会やら聖地やらにいて、滅多に人目に触れることはないし、本当に神子なのかはわからない。

神聖さを売りにしている聖地らしきところで、“騙り者”をしている輩もいるし、自分がそうだと信じきっている“ニセモノ”もいる。

本物の神子が果たして今、どれくらいなのかは・・・・・さては

て、さっぱり分からない。
そう言えば、この前見た神子さんは単なるお飾りだと思ったら、何故か悪魔の『声』を届けていた。
……きっと、悪魔信仰の神子さんだったんだろう。うん、きっと……そうなんだろう。
たとえ、純白の法衣を着て、由緒正しき聖地の神子さんであったとしても。

――神様の奇跡を手に入れたモノ、これを聖人・聖女という。

彼らは、一時的に神様の『力』を揮うことができる。
その『力』は、神の御業と敬われ、畏れられる。
人は彼らを讃えるが、彼らは神様に一方的に恩寵を得ているだけで、神様の意思を受けているわけじゃない。
当然だが、神子じゃないから『声』も聴こえない。
だから、せっかく何らかの『力』があっても、生涯気付かずに終わるのもいるし、うっかり神様の逆鱗に触れて『力』を失くしたり、天罰を受けてあっさりと死んだりするやつもいたりする。
聖人とか聖女なんて言われて担がれるのと、気付かずに生涯を終えるのと、はたまた逆鱗に触れてあっさりさよならするのと、どれがいいかと言われてもちょっと判断が難し……くもないか。
俺なら生涯気付かずに終えたいと切に思う。
担がれた結果、国やら何やらに酷使されるのも嫌だし、天罰を食らいたいとも思わないし。

そんな『天使』『神子』『聖人・聖女』。
彼らは特異な存在で、滅多やたらに目にできるモノじゃない。

けれど、それよりも下に特異な人はわりといたりする。
即ち、

――魔道師、魔術師、魔法師だ。

魔具を使って異能を発揮する、魔道師。
術式を使って異能を発揮する、魔術師。
独自の理論で異能を発揮する、魔法師。

彼らは『天使』や『神子』、『聖人・聖女』よりも身近にいる、近くて遠い隣人だ。
珍しくもあり、珍しくもない。
ありふれた存在ではないが、確かにいることを疑われない。

普通と異能。
それは、世間と世間からの逸脱者。
その決して交わらない境界線も、あまりにも日常的過ぎて忘れられる。
すぐ隣りで酒を酌み交わし、友となり肩を組むことを許された関係。
それが、普通と異能の正しくもなく、間違ってもいない関係なんだ……

＜こりゃ、話しを聞かんか＞

つらつらと世界の常識を頭の中で最もらしく、哲学人っぽく考えている俺に、この世のものとは思えない稀なる美声が脳裏に刺さる。

＜全く、この子は何を考えているのかしら。＞

＜本当に。我らの前にいるのに豪胆なことよ。＞

＜面白い輩ですこと＞

ほほほ、あはは、ふふふ。
とかなんとか方々で上がる美声に、俺は頭を抱えたくなる。
俺は魔道師でも、魔術師でも、魔法師でもない。
かと言って神子や聖人でも、ここ何百年かいない天使に連なる眷属とかでも、ない！！
ここは、全力で叫ぼう！

俺は、至って普通なんだ！！
俺は、世間から弾かれちゃない！！！

＜諦めが悪いわね＞

＜そちは十分外れておる＞

＜あなたはとっても貴重よね。ええっと、あら？　あれをなんて言ったかしら……＞

＜うん？　“ヒト”が言う神子とか聖人のことかえ？＞

＜そうそう。私、最近いらなくなったわ。＞

＜我もだ。＞

＜わらわもじゃな。まだ見てはいるがの～＞

和やかに、世間一般で重宝されている『神子』や『聖人』を、“いらない”なんてぶっちゃけている御仁方に、俺ははぁ～と肩を沈ませた。
こんなぶっちゃけ話、俺は全く聴きたくはない！
ということで、俺は今まで続けていた現実逃避を諦めた。
……いつものように。

白、それも幻想的に輝く白い空間に浮かんでいる俺は、頭上を見上げる。
そこには、ああこれこそが究極の美であり、描くこともできない“美”そのものであると思わずにはいられない、麗しき御仁が優美にして荘厳、言い表すこともできない畏怖を身に纏ってそこに“いる”。
俺のような矮小な取るに足らない人間なんか目じゃない巨大さは、単に体躯の大きさからではなく圧倒的な存在感の違いに他ならない。
いつ見ても、いい加減首が痛くなるから、存在感はどうでもいいから身体だけでも矮小な俺に合わせてくれてもいいのにと思う。
ああ、首痛て～とか思いながら、俺は取りあえず、何かやたら期待に目を輝かせている方へと目を向けた。

「それで、今回は何用ですか？」

＜あのね。頼みたいことがあるのよ。＞

そうして、かの御仁が語ったのは、

＜この子が逃げちゃって。探してきてくれる？＞

頭の中に一つの情報が叩きこまれる。
キンッッと耳鳴りがした後に、叩きこまれた情報が脳に意味を成した。
その情報に……えっ、ま　じ　　で、、、、、
一瞬、俺は彼岸に意識を飛ばした。
これ、ほんとですか？　という意思を御仁に飛ばしたら、

＜お願いね＞

とにっこり笑顔で“お願い事”を押し付けられた。

＜これ使って、連れてきてね＞

そう言ってふわふわとこっちに降りてきたのは、掌に納まる首輪だった。
明らかに情報とは、全く、これっぽちも大きさがそぐわない、赤い首輪だった。
それを手に、俺は呆然。

そして、

＜権限を少し貸してあげるから、お願いね＞

＜今回は、我の眷属も使ってよいぞ＞

ほほほ、あははっと上品な笑い声と豪快な笑い声と共に、白い幻想空間は意識の彼方へと遠ざかっていった。
俺がいるのは見慣れた一室。

用件だけを告げて、今日も今日とて、かの御仁らは去っていった。

ああ、いやだ。

俺は、赤い首輪を凝視したまま、しばらくの間悲嘆にくれた。
逃げられるのなら逃げ出したい。
そして、一方的な“お願い事”を放棄したい。
そう心から思うが、そうは問屋が卸さない。
なんせ、かの御仁方は

「神様のばかやろ〜〜〜〜〜〜！！！！！！！」

この世界の神々なのだから。
矮小な俺なんかは、神々に逆らえるわけがないのだ。

ああ、なんと悲しくも哀れな俺。

理不尽な願い事に命を駆けざる負えない俺は、きっと世界一不幸な“一般人”だ！
魔道師でもなく、魔術師でもなく、魔法師でもなく、聖人でもなく、神子でもない。
これは事実。
つまり、俺は世に言う“異能”を持たない“普通”の人。
そんな俺が、あれを……
脳裏を占める情報にぶるっと身体が震えた。

ああ、いやだ。
ああ、行きたくない。
でもな〜〜〜〜

「行くしかないか」

一人の部屋に、俺の独り言が空しく響いた。

弐、俺と大草原

空が、とっても青いね。
まったく、清々しいじゃないか。

ははははははっと乾いた笑い声を、俺は、いま、草原の、ど真ん中で、あげて……

アッ、もう　だ　め。

ぱたんっと今、力尽きて倒れた。

ことの起こりは大したことじゃない。
かの御仁の“お願いごと”を叶える為に、俺はまずマージナルへと足を向けた。
ここは、戦士や傭兵はもとより、魔道師、魔術師、魔法師といった“異能”たち全般を管理しているところだ。
いわゆる『ギルド』というものなのだが、国家が運営しているため民間経営のギルドよりも上で、よりお固い印象がある。
どっちかというとお役所に近い。

ここに正式に採用されれば半国家公務員的な扱いになるから、住居の手配とかもあるし、一定額の給料ももらえる。
しかも、これがいい収入で国からの待遇もいいもんだから、採用されたがる奴は多い。
ただ、まぁ当たり前といえば当たり前かもしれないが、正式に採用される人数、つまりは組員数には限りがある。

けど、組員じゃなくて、アルバイトっていえばいのかな？
マージナルに所属しているというだけでもブランド価値があるってことで、非採用で単に所属している輩が大半なのが現状。
正式採用されて組員になってるのは、やはり腕が立つ優秀な人物たちなのは当たり前。
ということで、“普通”である俺は非採用者、単なる所属組……と言いたいところだが、なぜか正式に“組員採用”されている。

もちろん実力ではない。

どっかの神子さんが、「神のお告げが～～～」と言って、指名手配犯並みの捜査網を敷かれて、あれよあれよという間にしょっ引かれたと思ったら、いつの間にか採用状態だったりする。
そうして入ってきた俺だが、特に何ができるわけでもない、ということが初日に発覚して、だけど神様のお告げだから云々……と訳の分からない状態のまま今に至る。
そんなもんだから、ここの組員さんたちからの視線は微妙だったりする。

とまぁ、そんなことはどうでもいいことなのだが、俺はとりあえず“情報”の場所まで行くため、その辺の仕事がないかをチェックしている。
やんごとなき事情のため、結構な頻度で休暇届けを出していたら、上の連中に文句を言われたのだ。
なので、“情報”近くの仕事をしつつ“お願い事”を叶える必要がある。
そうこうして探していると、

「薬草採取」

という、何か俺でも何とかなりそうな仕事を見つけたので、それを持って申請書を提出して、俺は遠い地へと出発したのだった。

と、ここまでは良かったのだと思う。
問題は、

「あれ？　こんなとこ、地図に載ってないけど……まぁ、大丈夫か？」

地図にない場所に着いた俺が、引き返すことも情報を収集することもなく突き進んでしまったという、実に馬鹿らしいことをしてしまったせいだったりする。
そして、冒頭に戻るわけだ。

見渡す限り草、草、草。
大草原と呼ぶに相応しい、延々と地平の彼方まで続くのではと思わせる草原。

気づけばここにいたとか、どんな冗談だ？

そわそわと風に揺れる草の絨毯に、ぱたりと倒れ込んだ俺の意識は、だんだんと遠ざかっていき――――――――――――

気づいたら知らない天井が……じゃなく、知らない奴に覗き込まれてた。
そいつはパチパチと瞬きして、俺を凝視している。

俺も負けじと凝視した。

ってか、顔近いよ！

近すぎてビックリだよ！

顔が近すぎてそいつの目しか見えない、ってこれは！！

接吻５秒前。

いや、もしくは既に！！！

と俺の頭は訳わからない現状に空転しまくり、身体はカチコチに固まっているわけだが、ほんとにどうしたらいいっていうんだ？

そう悩む俺に、

「キャーーーーーーーー」

甲高い悲鳴とガツンっとイイ音が脳を揺さぶった。

俺の耳はキーンと痛み、目の前にはいくつもの星が飛ぶ。

俺が一体何をした……

折角目覚めた俺は、起きてものの数秒もせずに再び真っ暗闇へと舞い戻ったのだった。

「ごめんなさい。」

殊勝に頭を下げるそいつを俺は見ている。

あの星が散った衝撃は、俺の額に大きなたんこぶを作っている。

これを作った凶器は、どうやら目の前の奴の頭突きだったらしい。

らしいという曖昧な言い方になるのは、致しかない。

なんせ、こっちが大きなたんこぶを作っているというのに、目の前の奴は全く、これっぽちも、でこが脹れてはいないのだから。
ただ、なんとな〜く、ちょっとだけ赤くなっているところがあるから、そうなのかと思ったのだ。

「悪気はなかったんだよ。ちょっとびっくりしちゃって。」

うるうると目を潤ませ、俺を上目づかいに見るそいつを俺はただ見ている。
顔を上げたからわかったが、かなり整った顔立ちだ。
後2〜3年もしたら、この上目づかいは一種の凶器になるだろう。

「急に目を覚ますから、ほんとにびっくりよ。
そう考えると、私は悪くないのかしら。」

あら?と首を傾げたそいつは、うるうるしていた目を一瞬で通常バージョンに戻した。
それにちょっと感心しながら、なんだやっぱ嘘泣きかと確信してがっかりした。
さっきの潤んだ瞳にころっと騙されたかったような、騙されなくてよかったような……演技派が上手に世渡りしていく世の中って、世知辛いな〜と遠いところに俺は視線を飛ばす。

「それに、あんたを見つけてここまで連れてきてあげたんだから、私って謝り損?」

俺は痛む額に氷をあて、周囲を視線だけで確かめる。
視線だけでって言うのは、目の前の奴を警戒しているからというわけではない。
単に頭を動かすとズキズキと痛むからだ。たんこぶが。

「むしろ私の方が被害者なんじゃない？」

ここはやはり、知らない場所みたいだ。
しかも、動物の皮を何十枚も繋いで拵えた三角屋根のテントだった。
外からの風を完全に遮断できる分厚い皮を使い、広さも十分にある。
足元に敷いている絨毯もしっかりとしているところを見ると、どこかの部族の家。それも、部族の中でも高い地位の家のようだ。

「そうよ！　私が“風の導き”で見つけなかったら、今頃野垂れ死にしているところを助けてやったのに！　なんで、私が謝ってんのよ！　ってか、いい加減、無視しないでよ！！！！」

バンッッと勢いよく絨毯越しの地面を叩いた反動で痛かったのか、そいつの顔が歪む。
今度の涙は本物のようだ。
痛みから溢れた生理的な涙、と見せかけた演技をしていたら、それこそ惚れ惚れするところではあるが……

「ちゃんと、聞いてよ。」

そして、本物の涙目で睨まれたら、“普通”の人である俺は、

「勘弁してください。」

ぺこりと頭を下げた。
あまりに場違いな返答にそいつはキョトンとしているが、俺は“普通”の人なんだ。
テントの入り口に見えるその、ギラッと光る凶器は何だ！
しかも、何人控えてるんだ！

耳を澄ますまでもなく、「何だあいつは！」とか「姫様に無礼を働けばただじゃおかない！」とか、「ひとおもいに……」とかなんとか、物騒な相談ごとをこっちに聴こえるように話している。
はっきり言って、目の前で話しているこいつなんかより、外に控えている奴らが気になってしょうがない。
お前の話を聞いてるどころじゃね～んだよ！　と言ってやりたいが、言った瞬間あれに串刺し決定だ。

早く、ここから出ていきたい。

俺の心は、生きた心地がしないこの現状から、一刻も早く逃れることを欲していた。
そんな俺の切なる願いは、

「何言ってんの？」

変なモノを見たとでも言いたげな顔で、キョトンとしている目の前のそいつには通じなかった。

参、俺と蒼の精霊姫

風の民。
草原の覇者。
永遠の遊牧民。

彼らを称する言葉は数あるが、

「蒼の民にして、風神アユラの子、アユリオースの民よ。」

彼らからすれば、部族ごとに部族の名を持っているのに、他と一緒くたにされてはたまらないということらしい。

「そして、私はアユリオースの“精霊姫”よ。」

ふふんっと鼻をならし、ついでに胸もそらして自己紹介された。
精霊姫？　なんじゃそら？　と思ったが顔には出さないようにした。
疑問を顔に出せば厄介なことになりそうだと本能的に悟ったからだ。
だからその自信満々な主張に俺は、

「そうですか。」

ズズズッと茶をすすりながら応えた。
うん、これなら知ってる風だし、問題ないな。
と思ったら、ちょっと離れたとこに立っていた筋骨隆々の男に、バコンッと頭を叩かれた。
その拍子に啜っていた茶が鼻に入って、痛いのなんの。
頭と鼻のダブルパンチにまたしても沈没するところだった。

姫さんによると、瞑想中に“風の導き”を聴き、守護精霊のお告げ通りに出掛だそうだ。
そのお告げの場所にきたら、旅人、つまり俺が倒れていたから部族の人を使ってここ、アユリオースの集落まで運んでくれたのだそうだ。
それについては、感謝を述べておいた。
ぺこりと頭を下げて、「どうも」と。
その対応が気に食わなかったのか、俺はまた筋骨隆々男に叩かれた。
今度は茶から顔を放しておいたのが功を奏して、ダブルパンチにはならなかった。
だが、さっきと寸分違わぬところを叩かれたせいか、かなりの痛みに呻くことになった。
そんな俺の様子に、男はちょっと満足げだ。

人が痛がっているのに何がいいんだか。趣味悪〜

内心の呟きに、ギロッと男の目が光った。

何て男だ！

俺は素直に感心するだけしておいた。
なんか、余計なことを考えてたらまた一発くらいそうだ。
それは、いやだな〜と思って、俺はとりあえず他に意識を向けることにした。

「私のおかげなのよ、さぁ、もっと感謝しなさい」

意識を向けた途端、自慢げにほほほほほっと似合わない笑い方をし

ているそいつに、ちょっとげんなりしながら、

「それで、ここはどの辺何だ？」

「蒼の草原よ」

俺が茶を置いて尋ねると、無い胸を張って言われた。
そう言われても、当然ながら俺には分からない。
アユリオースの民という彼ら部族が治めている、と豪語している草原一帯を「蒼の草原」と自称しているのだ。
地図にも載っていない名前を言われて、わかったと頷けるわけがない。

俺はごそごそと懐を探る。
それを怪しいとでも思ったのか、筋骨隆々男がズンズンと近寄ってきたので、俺は素早くそれを引っぱりだし、パッと絨毯の上に広げた。
広げたのは大陸中央部の地図だ。
今回のマージナルの仕事と、“お願い事”のために突っ込んできたものだった。

「あ～っと、この地図の中のどこよ。」

「蒼の草原って書いてないの？」

「書いてないな……だから、どの辺か示してくれ。」

「そんなこと言われても……」

「分かんないのか？」

「……」

「どこなんだ？」

「……わかんない？」

いや、疑問形で返されても。分かんないから聞いてるんですが。
という意志を視線に込めて目を向けると、なぜか目を潤ませていた。

何故に？

びっくり仰天！
ギョッとしてちょっと身を反らしたら、何泣かせてんだこの野郎という険しい眼差しが刺さった。
そして、

「載ってないよ～～～～ぅぅぅ、書いてないよ～～～～～
なんでなんで～～～～～、ぅぅうえぇぇ～～～～～ん」

何故か本気で姫さんが泣き始めた。しかも幼児泣きで。
俺がその泣きっぷりに呆然としていると、あらびっくり。
突如として「大丈夫ですよ～」「安心してください～」と、おばさんと言ったら確実にキレそうなお姉さん方が寄り添って姫さんを部屋から退場させていった。

何だったんだあれ？

俺は、姫さんの後ろ姿を呆気に取られて見ることしかできなかった。
いや、ほんとにマジであれは何なんだ？

結局俺はその日、訳の分からないまま客人用のテントという、家畜を囲っている柵に一番近いテントに押し込まれ、

「おやすみなさいませ」

慇懃無礼な言い方と、強烈な眼光に睨みつけられて就寝する羽目になった。

場所を聞いただけで、何でこんなことになってんだろ？

耳を澄ませば家畜の動く音が。

そして、動けばガチャガチャと鎖の音が……

何故に？

俺は今、テントの中にあった鉄柵に囲まれ、右手首には冷たい手枷が付けられ、手枷から伸びる鎖が鉄柵に繋がれていて……

「どうなってんだ、これ？　俺は罪人か？」

姫さんを泣かせただけで、どうやら俺は罪人決定の裁可を待つ虜囚にでもなったようだった。

そして、朝が来た。

テントの隙間から、朝日が差し込み、冷たい風が肌を刺す。
いや、風についていえば、寧ろ優しくなったのか？

「はっくしょん」

ペラペラの薄布の上から身体を擦る。
昨日、草原の真っ只中で野垂れ死ぬのは免れた俺だが、危うく夜間の寒さで凍え死ぬとこだった。
夜の冷え込みは、半端なかった。

「はっっっくしょい」

盛大なくしゃみをして、ズズズッと鼻を啜る。
ブルブルと震えながら、あの夜をよくぞ薄布一枚で耐えた、よくがんばった！と自分を誉めてやりたい。
いや、誉めよう！

偉いぞ俺！
よくがんばったぞ、俺！

そうでもしないとやってられない。

「はっっっくしょ～ん！！」

特大のくしゃみが出た。
鼻水が出て辛いし、くしゃみ止まんないし、寒いし、腹減ったし……

誰か何とかしてくれないだろうか？

とかなんとか思ってた俺だが、こんな展開は望んじゃなかった。
もっと、こうなんというか……

平和的展開を望んでたんだが。
どうしてこうも期待を裏切ることばかりが起こるのか。
誰か説明してくれないだろうか？

今、俺は腹が満たされ、日の温かさでぬくまっている。
相変わらず鼻水は垂れそうになるが、朝ほどはひどくはない。
手枷も外され、少ない荷物も返却された。
このままどこへ行こうと構わないのではと思いたくもなるが、そうは問屋が卸さない。

「さぁ、行くわよ！！」

目の前でガッツポーズをしながら振り向いたのは、“精霊姫”とアユリオースの民が呼んでいる人物だった。
ぶっちゃけ、昨日地図に名前が載ってないことに多大なショックを受けて、涙ながらに退場したあいつだ。
こいつのおかげで飯は食えたが、俺は感謝なんか一つもしてはいない。
なぜなら、

「おい、返事はどうした。」

俺の後ろに槍を構えて、姫さんに聞こえない低い声で脅しをかけている男。
そして、その睨みつけてくる男と同じ視線を俺に向けている１０人

の男女。
彼ら彼女らの、俺への対応はかなりきつい。
飯を食うときもこの視線にさらされていたため、料理の味なんかしなかった。
腹はふくれたが、味がしない食事なんてつまらないことこの上ない。
必然、そんな状況へと追いやっている相手に、感謝する気が起きるわけがない。

槍で背中をつんつんとされ、冷え汗を流す俺のことなぞ気にした風もなく、姫さんはズンズンと進み始めた。
どこに向かっているのか分からぬまま、俺はそれについて行く。
歩くスピードも、立ち止まるタイミングも姫さんに完璧に合わせて。
じゃないと、早くなっても遅くなっても背中の奴らにブスリっとやられそうだ。

勘弁してくれよ。

嘆く俺の心情なんか知ったことかと、姫さんはふんふんっと鼻歌交じりに歩を進める。
時折立ち止まっては宙空をぼんやりと見上げ、こくこくと頷いたかと思ったら足の向きを変えて歩いていく。
その姿に、俺は何だこいつは？　と思う――――――――べきなのだろうが……
俺は妙な納得と、これから先の展開を予測できて青褪め、そして諦めた。

四、俺と神様のペット

俺の視界がちょっと人とは違うことを知ったのは、実はそんなに昔のことではない。
片田舎で育った俺が、些細な好奇心と多大な意地のために外に出たのが数年前のこと。
そのとき俺は自分の視界が変なことを知り、その結果、神様に目をつけられるはめになったのだ。

思い返す度に思う。

俺は片田舎で満足して、一生を過ごすべきだったのだ。
そして、そんな田舎から外の世界に思いを馳せるだけにしておけばよかったのだ……。

と、何百度目かの過去への恨み節を利かせているわけだが、これには深い理由がある。
姫さんの後ろを歩かされるとか、背後からツンツンと槍で刺されそうになるとかよりも、もっと深刻な事態へと俺が突き進んでいる、というより突き進まされているという悲しい現実を見たくないからだ。
ぶっちゃけ、現実逃避。

俺の目には姫さんの横で、こっちこっちと手招きしている奴が見えている。
ひらひらとした衣装を身に纏う彼女は、大層きれいだが、俺は顔を顰めた。

そんな俺に気づいたのか、彼女は拗ねたような顔をするが、俺は一向に気にしなかった。
なぜなら、彼女は宙空にふよふよと浮かび、半透明の体で……つまり、精霊だったからだ。

精霊姫とはそういうことか。

この時になって俺は姫さんの正体を知った。
姫さんは精霊が見え、精霊の思念を多少掴むことができる。
つまり、精霊使い一歩手前の人だったのだ。
しかも訓練すればそれなりの、マージナルに正式採用されるかも？
と予想がつく精霊使いの卵だった。

しかし、姫さんが訓練をすることはないと思う。
アユリオースの民にとって、風の精霊の姿を目にでき、断片的にでも思念をも掴むことができるのなら、姫さんを“精霊姫”と崇められるのだから、それだけで十分だろう。
寧ろ、強くなられては困るということも在り得る。
今の姫さんを見ていれば、ちやほやと甘やかされていることがよくわかるし、勉強ができない子なんだろうとも思う。
なんせ、地図さえ碌にわからず泣きだすような子なのだから。
つまり甘ったれのお馬鹿さんだ。
そうなるように仕向けているのが部族長たちなら、姫さんがこの先も強くなることはないだろう。
原石は原石のまま。
磨かれることも無いままに、終わっていくに違いない。

しかし、

「きゃーーーーーーーーー」

ふんふんっと鼻歌を歌いながら進んでいた姫さんが、不意に絶叫を上げた。
俺の後ろでも息を呑む音と、悲鳴が聞こえる。
姫さんも後ろの連中も、恐怖に身を竦ませ、身体を動かすこともできないようだ。

「才能が磨かれるのなんて、些細なきっかけだったりするんだよな。」

そんな悲鳴の只中での俺の独り言を、精霊がにっこりと笑って聞いていた。
その笑顔に俺は心底げんなりした。

風の精霊は明らかに“アレ”を見せることで、お気に入りの人間を成長させようとしている。
確かに“アレ”は些細なきっかけにはなるかもしれないが、平和的とはほど遠い。
こういうのを有難迷惑というのではないだろうか。

可哀そうに……

哀れみを込めて姫さんへと目を向けると、計ったように姫さんがこっちを向いた。
そして、

「なんなのあれ～～～～～」

姫さんの上げた絶叫が耳に痛い。
ついでに、突進の勢いで食らった腹への一発と、ぎゅ～～～っと掴

まれている腕が、かなり痛い。

なんで、後ろにいる護衛役兼監視役連中に行かずに、俺のところに来て、あまつさえしがみ付くのか？

さっぱりわからない。

そして、大事な姫さんが俺にしがみついているというのに、後ろの奴らは姫さんを引き取ってくれないのが何故だ？

普通はさっさと姫さんを中心に円陣でも組むんじゃなかろうか？

と思って後ろを振り向くと

ああ、そういうこと。

何と後ろにいた連中は我先にと走り出していた。

ぎゃいぎゃいと騒ぎながら、自分より前にいる奴を張った押し、どけどけとばかりに荒々しい足音を立てて走っていた。

見事な走りだ。

あまりの素晴らしさに感動すら覚えた。

遥か遠くに向かう先頭集団は、天晴れとしかいいようがない。

さながら豹のようだ。

野生の獣のようにしなやかで、無駄のない走り方。

本当に見事としかいえない。

しかし、

「お前、置いてかれてるぞ。」

「えっ！！」

またまた哀れみを込めた眼差しで言ってやったら、姫さんは愕然と

して

「うそ!!!　なんで置いてくの??」

呆然と呟いた。
それに俺は、内心で呟く。
自分の命が一番可愛いからな、と。

そりゃそうだろう?
“アレ”を見ろよ。
ライオンの肢体に、なぜか肢体を覆うほどの翼が生えているだけでも足が震えてくるってのに、その肢体はあり得ないぐらい巨大だ。
しかもその獣は、炎を吹き出しながら威嚇してるとくりゃ〜、なぁ?
逃げ出したくもなるってもんだと思うよ。
俺も正直逃げ出したい。
だけど、

「なんで、あっさり見つかるかな?」

その見たことも無い巨大な珍獣は、神様からの“お願いごと”の張本人。
彼の御仁の大切なペットで、彼の御仁曰く、目に入れても痛くないほどの大層可愛らしい“にゃんこ”なのだそうだ。
情報を叩きこまれた俺としては、全くもってそんな風には思えなかったし、今目の前にしてもカワイイ“にゃんこ”とは、絶っっ対に視えない!!

けれど、俺がどうこう言おうが関係ないのだ。
だって、神様のカワイイ“にゃんこ”であって、俺のペットではないのだから。

「しかし、どうすりゃいいんですか？」

数百メートル先からこっちを睨んで、ぐわ～～っと大口を開けては炎を吹き上げる“にゃんこ”に、俺が打てる手立てはない。

神様なんとかしてくださいよ。と言ったところで、神様方の御声を拝聴できるということはなかった。

ただ、

＜がんばってね～＞

にっこり笑顔でほほ笑む風の精霊が、他人事のように俺に声援を向け、

「なんとかしてよ～～～～」

えぐえぐっと涙を流しながら、俺の腕にますますしがみつく姫さんの声が耳に入ってくる。

そんなこと言われても……

「俺は、一般人だから何もできんぞ。

むしろ、精霊姫なんだからお前がなんとかしろよ。そいつと一緒に。」

空いている方の手で風の精霊を指差し、そう返すしかないじゃないか。

なんたって俺は“普通”の人間なんだから。

そして、斯く言う姫さんは“精霊使いになれるかもしれない”人間で、曲がりなりにも“精霊姫”と崇められている存在でもあるんだから、ここは一つ、姫さんにがんばってもらうしかないと思う。

俺はそんな思いを込めて見つめること、しばし……

――――――姫さんは完全に停止した。

どうやら、空の彼方へ意識を完全に飛ばしているらしい。
俺の腕がもげそうなほどの手の力は、気絶しても俺の腕から外れることはなく、痛いまま。
どうせ気絶するなら、力が抜けてくれてもいいと思うのだが……

痛みで顔が歪む。
肉体的にもだか、主に精神的な痛みで。

本当に嫌になってくる。

そんな人間たちの態度が気に入らなかったのか、がお～～っと“にゃんこ”が一吠え。
草原の一部が『ぼおおっ』っと瞬時になくなった。

気絶している人間と、青ざめている人間。
それに威嚇する“にゃんこ”

＜どうするの？＞

くすくすと意地悪く笑う風の精霊だけが、楽しそうにしていた。

伍、俺と“にゃんこ”

「冗談じゃない！！」

ぐおおぉぉ～～～がるるぅぅぅ～～～～。

と吠えまくる“にゃんこ”……いや、もう怪物とか、怪獣とか猛獣とかケダモノとか……もう、何でもいいけど、本当に冗談じゃない！！

俺は、

「えいっ！」

今、

「ていっ！！」

草原を、

「とりゃっっっ！！」

あっちに行ったり、

「どわせっっい～～！！」

こっちに行ったり、

「って、こっちに、来んじゃねぇ～～～～～」

“にゃんこ”のほのおを、

「おぅちっっ！！」

……あっぶね～、もう少しで、尻に、火が、付くとこだった。

必死こいて、避けている。

「はぁはぁはぁ……あ～冗談じゃね～よ」

おそらくってか、十中八九“にゃんこ”は神獣なんだろうけどさ。
あの巨体も反則だっていうのに、炎までボンボン吐きだすなんて、詐欺だろ詐欺。
ガンガンこっちにくる炎弾を避けまくって、ひとまず俺は“にゃんこ”から距離を置いてみたものの。

『ぐるるるる！！！』

“にゃんこ”は標的である俺に、中々攻撃が当たらずにイライラしているようだ。

恐ろしい。
本当に、恐ろしい。

ヤツの尻尾がゆらりと揺れ、前傾姿勢になる。
その動作がひどく緩慢なことに、油断してはならない。

ヤツは狙っている。
標的である俺への距離と、跳躍の瞬間を！！

尻尾が、ゆらり。
前肢が、ぐぐっっ！！　と地面にめり込む。

そして、

＜よく避けられたわね～＞

髪の毛が数本持っていかれたが、紙一重で避けることになんとか成功した。
“にゃんこ”は俺の数百メートル後ろに、スタンっと軽やかに着地。
すぐに、くるんっとこちらを向いた。

＜その子を背負ってるのに、それってすごいわよね。＞

風の精霊が、俺が背負っている姫さんの頬をツンツンと触っている。
“にゃんこ”がガンガンと炎を吐きだしてきたとき、渾身の力で腕から引きはがし、そのまま放るわけにもいかず俺は姫さんを背負っているのだ。
精霊に言われるまで忘れていたことだったが……

何か、重くなってきた。。。

急にずっしりと背中が重くなってきて、正直しんどい。
そんな俺のことなど気にも留めない精霊は、楽しそうに＜この子起きないわね＞とまだ、ツンツンと頬をつついていた。

実態のない精霊がすることだから、微小な震動さえも伝わってはこないが、気が散るから止めて欲しい。
それか、姫さんを風で浮かせてくれればいいのに……とジト目で訴えかけたが、精霊は俺の視線を無視しやがった。

そして、“にゃんこ”は再び跳躍体制をとり始めていた。
次こそはっという闘志が揺らいでいるように見えるのは、錯覚だと思いたい。

＜って、これからどうするの？＞

俺が“にゃんこ”の次の一撃、そしてもう一撃、またまた一撃、さらに……と次々とくる必殺の攻撃を冷汗かきながら必至こいて避けていると、焦れたように風の精霊が眼前に来た。
俺は鬱陶しそうに見たのだが、精霊は全く気にしない。
それよりも、さっきから相手にせずに、ずっっっと無視していたことを怒っているようで、構ってオーラで抗議してくる始末。

生き死にがかかっている局面なんだよ。こっちは！！
お前に付きあってたら、死んじまうだろうが！！

と叫びたいのは山々だったが、そう言ってやる機会は見つけられず仕舞いだ。
なんせ、“にゃんこ”の攻撃は段々と鋭さを増し、最初は炎をぼっぼっと吐きだしていただけだったのに、今では、ぼぉぉぉっっっっっ！！　っと不吉な音を立てて炎の弾丸を打ちだしてくるのだ。ちなみに弾丸の大きさは俺の頭より大きかった……

誰かに文句を言うような、そんな精神的余裕なんか、ない！！
余裕を買えるんなら、今なら借金してでも買いたいよ。

『ぐおぉぉ～～～』

“にゃんこ”の叫び、

『ぼっぼっぼっぼぼぼっっっ！！！』

その叫びから弾丸が幾つも、幾つも吐き出され、

『がおぉぉ～～～』

耳をつんざく咆哮を上げ、一斉に弾丸が放たれた。
間違いなく、俺に向かって。

その圧倒的な力の前に、

「終わった。」

俺は確信した。
右を見ても、左を見ても、前を見ても、後ろを見ても、俺が弾丸の餌食にならずに済む安全地帯はなかった。
背中に背負っている姫さんを放り投げて盾にしても、一緒に消し済みになること決定だ。

俺の人生、終わったのか……

短い人生だった。

きっと、ていうか絶対に、あの日あの時あの場所で選択を間違ったせいで、こんなことになるんだ。
そもそも、俺がこれで死んだら、死亡原因は神様のせいだよな。
神様、死後の世界で会った時は、覚悟していてくださいよ。

とか、なんとか考えていた俺は、

＜あなた、何者？＞

精霊の驚いている声に、ハッとして現実に戻ってきた。
見れば俺は無傷。
ついでに背中に担いでいる姫さんも無傷。
あんなにあった弾丸は、何故か俺の半径1メートルぐらいの場所でピタッと止まっていた。

どういうこと？

と首を傾げた俺に、にこっと笑顔を向けたのは炎の精霊だった。

「……どうして？」

どうして、助けてくれたのか？
精霊の気まぐれと考えるには、あまりにも楽観的すぎる。
精霊たちは偶に気まぐれを起して手助けをしてくれるが、基本的に平和な状況でしかそんなことをしてくれない。
こんな、神獣クラスの“にゃんこ”相手に、しかも半端ない火力の攻撃を防ぐような気まぐれを起こすわけがない。
なぜ？　と眉を寄せた俺は、そこでふと思い出した。

＜我の眷属も使ってよいぞ＞

そう言ったのは炎の神様だった。
面白そうに笑って言ったそれは、帰る間際だったこともあって今の今まで忘れていた。
忘れていたが、

そういうことか……

納得できた。
そして、納得すると急に力が抜けた。
そんな脱力しきった俺に、めっと厳しい目を炎の精霊は向けてきたが、強い存在が助けてくれると確信したら、気も抜けようというものだ。
そして、多少の余裕が生まれたおかげで、もう一つの御言葉を思い出した。

＜権限を少し貸してあげるから、お願いね＞

今回の“お願い事”をした、神様。
彼の御仁は、天を司る女神様。
っということは……

『抑えよ』

炎の精霊への呼びかけで、俺の周囲でピタッと止まっていた弾丸が、尽く消えていく。
おかげ様で視界は良好。
“にゃんこ”は無傷で現れた俺に、目を見開き、次いでザッと毛を

逆立てた。
これは、本気になった証拠なんだろうか？

『封ぜよ』

けれど、俺は気にしない。
なんせ、神様から借り受けた御力があるのだ。
まして、女神様のペットが、飼い主の力に叶うはずがない。

『ぐぅぅぅっっ』

ということで、“にゃんこ”は苦しげな声をあげて、その場で伏せをしている。
悠々と歩み寄る俺に、強烈な眼光で睨みを利かせるが、俺は恐くはな……い、わけではなかった。
けど、さっきよりはましだ。

さっきまでは、圧倒的な力に完全に屈伏し、絶望のままに死の恐怖を味わっていたのだから。
それよりはマシに決まっている。
ちょっと、“にゃんこ”の眼光に足が震えるのは、“普通”に“一般人”の俺には仕方がないんだ。
情けないかもしれないが、しょうがないから、いいんだ、別に。。。

「さて、お家に帰る時間だよ」

俺は懐から、彼の御仁から賜った例のモノを取り出す。
そう、あの赤い首輪だ。
これをつければいい、ということは“情報”にもあったが、さて？

「どうするんだ、これ？」

やっぱりサイズが違いすぎる。

最初っから明らかにサイズが合ってないと思っていたが、実物を前にすればそれがますます顕著だ。

手に持つ首輪と、“にゃんこ”の首。

絶対、ムリ！！

１００パーセント無理。

唸る“にゃんこ”の前で、俺はしばし固まるしかなかった。

六、俺と任務完了

ぴかっ！！！！！！！！！

ひゅ～～～ん、

っっっポンっ！

なんだ、この擬音は！！
その憤りもわからなくはない。
けど、これだけは言いたい！

俺は、決してフザケてるわけじゃないんだ！！

これはもう一度、言っておこう！

「俺は、ふざけて何かいない！！」

＜あなた、何言ってんの？＞

俺が全力で主張をしていると、横で風の精霊が呆れていた。
そして、もう帰ったと思っていた炎の精霊にすら、大丈夫？と心配された。
それに、俺は……

「何でもない。」

力なくうなだれた。
そして、足もとにいるそいつの首根っこをひょいっとつまんだ。
にゃごぉぉ～～
にゃごぉぉ～～

と鳴くそいつを目の高さまであげ、首元をこしょこしょと擦ってみる。

にゃぐ
にゃぐ

そいつは金色の目を細めて尻尾をパタンと振り、気持ちよさげに鳴いていた。

＜これが、“アレ”なのよね？＞

小さなそれを怖々と覗きこんだ風の精霊に、俺は「そうだろうな…」と溜息を吐き出すように答えた。

あの時。
神様権限で“にゃんこ”の動きを封じた俺は、赤い首輪を手に固まっていたのだが、突如、冒頭のようなことが起こったのだ。
つまり……こういうことだ。。。

ぴかっ！！！！！！！！

「うわっっ」

首輪と“にゃんこ”の首を見比べていたその時、強烈な光が俺の網膜を焼いた。
ちょっとの間視界が利かなかった俺だが、その光がすぐに収まったためか、光の残像が目に残ったがそれだけで済んだようだ。
今ではその残像さえない。
けれど、俺はそれにほっと一息を入れられるような状態ではなかった。

「何だこりゃ！！」

さっきまで普通の首輪だったものが、今は樹齢何千年の木とかをがっちりと囲めるぐらい大きくなっていた。
重さもかなりある。
首輪の半分以上が地面についているというのに、気を抜いたら膝が地に付きそうなほどだ。

「……」

俺は首輪を見て、“にゃんこ”を見た。
確かにこの大きさなら、あの“にゃんこ”の首に付けられる。
だが、

「……持ち上げられないんだけど」

そう、問題はこの重さだ。
こんなに重いモノを持って、歩けるかって！
しかも、首輪をかけるには“にゃんこ”の首元まで持ってかなきゃならないんだろ？
ムリムリ。

だって、今これを持って立ってるのもきついんだから。
どうやったって、無理だろう？

その俺の心の裡を分かってもらえたのだろうか？

ひゅ～～～ん

首輪が勝手に動きだし、風を切って“にゃんこ”の頭上へと舞い上がった。
俺は、おおおぉ！と小さく歓声を上げて見ていた。
“にゃんこ”は伏せの姿勢のままなのに、上目づかいで輪っかの様子を窺っていた。
唸り声もあげずに、上目づかいをする“にゃんこ”。
巨体の上にさっきまでの兇暴さからは考えられないぐらい、その顔は可愛かった。
そうチラッと思った俺は、女神様の親馬鹿ぶりを思い出して慌てて首を振った。

可愛いなんて、あってたまるか！

俺は思い直した自分に、うんうんと頷いていた。
その時、

っっっポンっ！

気の抜ける音が鳴った。
音の方を見れば、

「あれ？」

さっきまであった“にゃんこ”の巨体は姿を消し、

「にょごぉぉぉおお～～～」

何か叫んでいるっぽいかんじの子猫サイズの“何か”がそこにいた。

……そして、今に続くわけなのだが、

「翼もあるし、しっぽもそれっぽいから“にゃんこ”だろうよ。」

と投げやりになるのもしょうがないと思うんだ！俺は。

＜何、いらついてんの？＞

そう言われても、気づいてしまったことがある手前、素直に口は開けられない。

だから、気にするなと手を振った。

それに、あっそっと俺への興味を失ったように“にゃんこ”を見る風の精霊。

それを横目に、俺は額に手を当てた。

最初っから出してりゃよかったんだ。

ほんとに今さらだが、今になって俺は首輪の構造がわかった。

さっきまでの一連の出来事を見れば、誰でも判ることではあるが……

つまりだ。。。

首輪は首輪だったってことね。

大きさとかは関係なく。

俺は大きく肩を落とした。ついでに深く深くため息をついた。
神様がくれたんだから、疑いようもなく“にゃんこ”用の首輪だったのだ。
だから、さっさと出せばよかったのだ。
“にゃんこ”を見た、その瞬間にでも。

そしたら、髪が焦げることも、ぷつぷつと切られることも、必死こいて逃げる必要もなかったんだ。

俺は所どころ焦げてたり、持っていかれている髪の毛を見た。
ほんとうに、馬鹿だろ！俺！！
ずーんっと自己嫌悪に陥りたくもなるってもんだ。

にゃご？

さわさわと首を掻いてやっていると、沈んでいる俺を見上げて、“にゃんこ”がどうした？という目で見てきた。
その上目づかいは反則的にかわいい。
ぅうっ、やられた～～と身もだえている風の精霊が気持ち悪いが、その気持ち事態はわからなくはない。
神様にぐりぐりと可愛がられそうな可愛さがあるのは確かだった、が

お前のせいで、こっちは落ち込んでんだよ！
そもそも、お前が逃げ出したりしなけりゃ、こっちはこんな面倒事しなくて済んだんだからな！

と俺が叫ぼうとした瞬間、

＜御苦労、御苦労＞

頭の中に声が突き刺さった。

＜わたしのにゃんこが見つかってよかった。その子を“このこ”に預けてね＞

その声がしたかと思ったら、一瞬前まで何もなかった草原に、一人の女性が立っていた。

背に翼、頭に輪っか。

どう見ても天使だと思うが……まぁ、俺には関係ないない。

彼女の手に、「はいよ」と“にゃんこ”を押し付けると、彼女はぺこりと軽く頷き空に飛び上がった。

そして、すっと空に溶け込むように消えた。

こうして俺は、今回のペット脱走事件を無事に解決したのだった。

報酬無し、強制労働。

「はぁ～～～～」

ほんと、俺ってかわいそうな“一般人”だ。

～後日談～

「薬草、採ってきてくれました？」

「えっ？」

「薬草採ってくるっていってたじゃないですか！」

「あっ！」

一仕事終えて戻ってきた俺に、マージナルの同僚が目を怒らせた。
“にゃんこ”のことが解決した俺は、緩みまくっていてすっかり忘れていた。
やっべ～～と俺の顔に書いてあるのを見てとった同僚は、ますます目を怒らせ、っと不意に視線を俺の後ろへ向けた。

「それに、あなたの後ろにいる子、何なんです？」
「はぁ？」

何のことだ？と思い後ろを向けば、「やっほ～」と至近距離で手を振る姫さんがいた。
何故、いる？
あの後、部族のもとに戻ったんじゃないのか？
視線で問えば、

「追いかけてきちゃった」

てへっとどこで覚えてきたのか、可愛らしい仕草で何でもないことのように言いきった。
姫さんの斜め後ろには、姫さんと同じ仕草をしているいつぞやの風の精霊。

ほんと、何で追いかけてきてんだよ。

俺の嘆きは姫さんにも、精霊にも、同僚にも届くことはなかった。

裏話、わたしは見ちゃった！（前書き）

評価、お気に入り、ありがとうございます♪
壱ノ章のおまけ的の話です。
一般人の“俺”視点ではない人が、“俺”と“にゃんこ”を見ているとこうなりますという話です。

裏話、わたしは見ちゃった！

わたしは今、何を見てるのかしら？

口から飛び出した悲鳴が、自分のものだとも思えなかったけど、そんな小さなことに気を回す余裕なんてなかった。
近くにあった腕にすがり付くのに精一杯！

あれは、なに！！！！

圧倒的な威圧感に足が震える。
恐ろしい咆哮に心が凍りついて、痛い。
自分が目にしているのが、現実だと思えない。
目を閉じて……

こんなの見たくない。。。

そう思うのに、わたしの目は言うことを聞いてくれなかった。
目を離すこともできなくて、わたしは“それ”をずっと見つめることしかできなかった。
瞬きもできずに。
そんなわたしに、

「お前、置いてかれてるぞ。」

「えっ！！」

知らない声がかかった。
それに驚いて、やっと“あれ”から目をそらすことができた。

そして、そのきっかけをくれた人を見上げたら、妙に落ちついた視線にかち合った。
その目線がつーっとわずかに後ろを見ていたから、わたしもそれに合わせて……

「うそ!!!　なんで置いてくの??」

愕然とした。
それは、生まれて初めての経験。
部族の中にいて、わたしの周りにはいつもたくさんの人がいた。
わたしを一人にしてくれないって文句を言ったこともあったけど、そのたびに

「大事な姫様を一人になんてしませんよ。」
「そうです。あなたは大切な人なんですから。」
「姫様が一人になったとき、何かがあったらどうするんですか?」
「まぁ、貴方様を一人にすることもないですけどね。」
「もし、“何か”があったら命に代えてお守りしますけれど…」

とか、なんとか言っていたのは誰?
遥か遠くに見える背中。
その背をこんなに遠くに見ているわたしは、何?
わたしは、大事な精霊姫で、命がけで守られている姫なんじゃなかったの?

頭の中がぐるぐるする。
みんなの顔が、やさしい顔がぐるぐるの頭の中で、誰の顔かわからないぐらいぐちゃぐちゃになっていった。

何も、わからない。

わかりたくない。

わたしは何もかもが分からなくなって、だけど、そんなわたしの背中に強烈なプレッシャーがどっと押し寄せてきた。

“あれ”の発する、強大で凶悪な威圧感。

殺される！！

何にも、わかんないけど！

これだけはわかって、だけど……わたしには何もできない。

だから、

「なんとかしてよ～～～～」

えぐえぐっと涙を流しながら、わたしは掴んでる腕にぎゅ～～っと縋りついた。

もう、この人しか頼れないんだから、しょうがない。

けど、頼りのこの人はこう言った。

「俺は、一般人だから何もできんぞ。

むしろ、精霊姫なんだからお前がなんとかしろよ。そいつと一緒に。」

空いている方の手で、わたしはその人が“そいつ”と指差した方を向いた。

そこにはわたしの部族の守護精霊様がいた。

守護精霊様はわたし以外には誰にも見えないと思っていたから、それにちょっと驚いたけど、それよりも“お前がなんとかしろ”って部分がすっごく気になる！

わたしが！
何でよ！！

だって、わたしは何にもできないのよ。
守護精霊様の姿は見えるけど、それだけだし。
何とかするならむしろ、わたしじゃなくて守護精霊様とかあなたじゃないの！！

そんな意志を込めてこの人を見てみた。
そしたら、“お前がするに決まってんだろ”とでも言いだけな目で見られた。

……なんで。。。。

そう思ったのを境に、わたしの目の前は真っ暗になった。

ゆらゆらっと体が揺れてる。
その振動と、「うおりゃっ」とか「せいやっ」とか言う奇声で目が覚めた。

なに??

目を開けたら、視界に大きな炎が飛び込んできた。
赤い炎の巨大さに、わたしの目が点になった。
あんなに大きな火の塊を見たのは初めてで、いったい何なのか、さ

っぽりわからなかったけど、その火はわたしを焼くことはなく、横を通っていった。

焼かれなかった。

それが分かってほっとしながら、そのあまりの恐ろしさに身がすくんだ。

あまりにも大きな四肢がこっちに来たのには、心臓が凍りつくかと思った。

でも、それが何度も続けば慣れちゃうものなのね……とか、思える自分にびっくりした。

それというのも、

＜よく避けられたわね～。

その子を背負ってるのに、それってすごいわよね。＞

そう、どうしてわたしがこの人に背負われているのかわからないけど、この人が奇声を発しながら避けているからだ。

しかも、結構余裕で避けている。

声だけ聞いてると、必死に避けてるみたいだけど、何だか雰囲気が余裕そう。

部族のみんなは我先に逃げていったのに、残った人。

わたしもだけど、みんなが驚いていたときも、この人だけは何だか落ち着いていた。

この人って、何なんだろう？

昨日、草原で倒れていたこの人は、正直力強いかんじでもないし、所謂“できるヒト”ってかんじでもない。

目立つような人でもないし、印象にも残らない。
だから、守護精霊様から朝＜連れてきなさい＞って言われても、見るまで顔を思い出すこともできなかった。
そんな人が、あの恐ろしい化け物の火の玉をよけたり、一撃を余裕でかわしている。

何者？

わたしの唇がそれを言う前に、守護精霊様にツンツンっと頬を突かれた。
見ると、守護精霊様がシッと唇に人差し指を当てていた。
そして、

＜この子起きないわね＞

といって、笑顔でこのままでいなさいとアイコンタクトをしてくれた。
それに、わたしもアイコンタクトで「わかった」と返すと、いい子ねと瞳に乗せてまた、ツンツンと頬をつついてくれた。
だから、わたしは無言で、見ていることにした。
背負われているわたしが起きているとは、この人はわからないはずだから。
口から飛び出そうな悲鳴が出ないように、黙って見ていることにした。

それから、何なの？
って思うことばっかり起こった。

ほんと、何なの？

この人？

四方八方、視界全部が真っ赤に染まったときは、もう駄目だって思った。
もう、終わりなんだって……

でも、そんなこと、ぜんぜんなかった。
だって、炎がぴたって止まったのよ！
信じられない！
ぴたって止まったのよ、ピタって。

びっくりしてたら、笑って佇んでいる女の人が炎の中で立ってて。
それにも驚いたけど、それに平然と、しかも納得してるみたいにこの人が頷いてるのにもびっくり！！
しかもしかも、この人が何か言ったら、周りにあった炎が一瞬でポンってなくなっちゃたのよ！
何それ？って言いたくもなったけど、あんまり驚きすぎて声にならなかったみたい。
そして、炎がなくなって驚いたのは“アレ”もみたい。
ギョッとしたように眼を向いて、ざっと毛を逆立てたのをみて、そうよねって頷いちゃった。
更にビックリしたのは……

っていうか、もうびっくりしっ放しだったってことだけ言っておくわ。

あんなに怖かった“アレ”が急に伏せをして大人しくなったり、おっきな首輪が突如現れたと思ったら、“アレ”がいなくなってかわいいけど、ちょっと変わったかんじの子猫がいたり、それとななっっなんと、これって夢？それとも、幻なの？

背に広がる翼に、輪っか。淡い燐光を纏った天使様が！！！！！

わたし、もう死んでるのかもしれない。。。。

天使様と思しき方を視界に入れた後の記憶はあいまい。
気づいたら部族の家が見える草原にいた。
そして、そんなわたしを見て顔を蒼くするみんな。
なんだか亡霊でも見ているような、そしてバツが悪そうに、祟られたくないとでも手を合わせているみんなを見て……

わたしは、草原に、何もない草原の中を走っていた。

もう、あそこはわたしの場所じゃないって、そう思った。
わたしを捨てたみんな。
戻って助けようともしていない。
ただ、わたしを置いてけぼりにして……
そして、当然のように死んだと思っているみんな。

もう、あそこはわたしの場所じゃない。

ぽろぽろと涙がこぼれた。

もう、帰る場所がない。

草原をひた走って転んで、わたしは泣いた。
泣いて、泣いて、泣きはらして。

＜わたしがいるわ＞

頭をなでてくれている守護精霊様に気づいたのは、ずいぶん泣いた後だった。
誰もいない。
もう、一人なんだって思っていたわたしに、守護精霊様は優しかった。
その優しさに、わたしは救われ、

＜あの人を追いかけてみない？＞

その言葉に心が揺さぶられた。
わたしのそばにいてくれた人。
背に背負ってまで助けてくれた人。
そして、未知の力で救ってくれた人。

あの人を追いかける。
それは、とっても心が踊った。

だから、わたしは

「あの人、どこに行ったかわかる？」

＜ええ、こっちよ＞

立ち上がって、あの人を追うことにした。

壱、突撃！弟子志願者？

「何でここにいる？」

朝、いつものようにのっそりと起きた俺は、いつものように顔を洗って、いつものように身支度を整え、いつものように紅茶だけ飲んで扉を開けた。
そしたら、いた。

「あなたが弟子にしてくれないからよ。」

当然でしょと腰に手を当て、無い胸を張ってこうのたまったのは、どこぞの部族の姫さんだった。
昨日再開した姫さん。
二度と会うことはないと思っていた姫さん。
俺はそんな姫さんに唖然とし、ぽかんと口を開けるしかない。

なぜにそんなことを俺が？
“普通”で“一般人”の俺に、弟子？
冗談じゃない。

俺は扉をパタンと閉めて、鍵をかけ、いつものように歩き出した。
姫さんのことなんて、無視無視。
俺は、姫さんを見なかったことにした。
ついでに言うと、姫さんと同じ格好で仁王立ちしていた風の精霊も見なかったことにした。
完全に二人を見なかったことにしたら、

「弟子にしてくれるまで、ずっと付きまとってやるんだから！！！」

鼻息荒く、そして足音も荒く姫さんが後ろでギャーギャー言い始めた。
ついでに精霊も、＜けーち、けーち＞とか＜ちょっとぐらい相手してよ＞とか姫さん以上にギャーギャー言って、俺の視界に入ろうとしてくる。
精霊はふよふよしているから、見ないように見ないようにしていると、道行く人にぶつかりそうになるから困る。

でも、俺は見えない！
視えないし、聴こえないぞ！

姫さんと風の精霊だけを完全にシャットアウトして、俺はいつもより少しだけ早足でマージナルへと向かった。

そんなこんなで、今

「ここは、マージナルなんですよ！」

俺は同僚にお叱りを受けていた。
何で俺に？とびくびくしながら視線で問うと、「アレを見よ！」とズビシッと一直線に指を差された。
そこにいるのは姫さんとついでに精霊。
仁王立ちしてじーっとこっちを向いて、その場から全く動かない姫さんと精霊。
その姫さんと精霊がいる場所というのは、

「内部に無関係の者を連れてくるとは、どういうことですか！」

そう、マージナルの機密文書も置いてある、職員しか入ってはならない区画だったのだ。
俺の仕事場ではあるが、姫さんが入っていい場所ではない。ちなみに、精霊は別に問題ない。
精霊使い以外には見えないし、ここには今、精霊使いがいないし、契約もしてない精霊がそこら辺にふよふよしていても、何ら問題にならないからだ。
でも、姫さんは多いに問題がある。

無視しまくってたけど、ここには入ってこないだろうって高をくくっていたっていうのはある。
だが、だ。まさか入ってくるとは予想外もいいとこだった。
だって、ここは天下に名だたるマージナルだよ？
マージナル内部に勝手に入ってどうなるかなんて、みんな知ってるはずだろ？
袋叩きにされても文句は言えないとこだぜ？

なのに、この姫さんは入ってきた。
しかも、わたし悪くないもんみたいな、わたしこそが正しいのよって感じが全身から漂ってる。
伊達に部族を支える精霊姫をやっていたわけじゃないみたいだが、だから何だという気が正直する。

「お前は馬鹿か？」

散々無視してきて、何だが。
姫さんに言えることはこれしかない。
そして、

「バカはお前だ！！」

姫さんに文句を言ってる俺に、同僚の拳骨が振り下ろされた。
ゴツンっと鈍い音が脳内に木魂し、涙目で見たら

「その嬢ちゃんをさっさと外に連れて行け！」

シッシッと厳めしい顔で追い立てられた。
渋々俺は姫さんの腕を掴んで、外へと向かった。

麗らかな日差しが零れてくる木の下。
こうして、俺は姫さんをやっと視界に入れたわけだが、だからどうとかいうことはない。
姫さんと俺。
弟子と師匠？
そんなこと、あるわけないない。
ってことで、

「じゃあ、そういうことで」

俺は姫さんに手を振って踵を返そうとして、ぐいっと手を引かれた。

「弟子にしてよ！」

その一点張りに、俺は今朝方から抱いていた疑問を吐いた。

「なんで？」

「だって、あの炎の人に命令したり」

「へっ？」

「化け物を手懐けたり、ちっちゃくしたり」

「はぁ？」

「天使様と仲良くしてたりしたじゃない。」

「……」

キラキラした目で見つめられ、俺は開いた口が塞がらない。
ちょっと待て！
言いたいことはいろいろあるが、つまりは

「おい。」

＜なあに？＞

「おまえ、気づいてたろ？　その上で隠してたな？」

＜何か、問題でもある？＞

風の精霊がふふんっと鼻を鳴らした。
その勝ち誇った顔を、がしっと掴んで、地面に叩きつけたいところだが、それを察したのかひゅい～っと俺から精霊は距離を取った。
それに益々むかっときたが、空を飛ぶことができない俺じゃどうしようもない。
今度近くに来たときには、ふふふ……と心に誓っておくに留めるし

かない。
目下の問題は、

「ね？いいでしょ？」

わたしもあんな風になりたいのっと、どこかいっちゃってる目をした姫さんだ。
俺はもう、

「いいわけあるか」

がっくりと肩を落とすしかなかった。

天使の眷属、神子、聖人・聖女の存在は稀だが、世の中には異能が確かにいる。
彼らは大別して3種。
即ち、魔道師、魔術師、魔法師だ。

「それで、姫さんはその中では魔法師に分類される。」

ここまではわかったか？と目で問えば、こてんっと首を傾げられた。
その眼、その顔を見れば明らかにわかってないっぽいなと思ったが、姫さんはそれ以前の問題だった。

「それ、今必要なこと？」

って真面目に聞いてきましたよ。この子！

だから、大事なことだって言ってやったら、

「じゃぁ、わかったてことにしとくわ。」

偉そうに上から目線で言われた。
その言い様にむかっとしたが、わかったならまぁいいことにした。
これから言う一言の為の、いわば確認作業だったわけだし、姫さんの口から「わかった」って言わせることが大事だったんだから。

でも、このままだとちょっとやばいかもしれない……。
具体的に言えば、このおつむが軽い姫さんにはこれから言いたいことが、少っっっしもわかっちゃくれないような気がそこはかとなくする。
それだと、言ったところで姫さんに後からごちゃごちゃ言われそうだ。
そうならないようにするために、状況説明をしてやることにした。
後から何癖つけられるより、いま多少の労力を払ってしまった方が楽なことは目に見えてるからしょうがない。

「そんで、姫さんは魔法師の中でも“精霊使い”って言われる魔法師だってのはわかるか?」

「そうなの?」

「そうなの。そこに精霊がいるだろ?」

「守護精霊様のこと?」

「そう。その“守護精霊様”が見えるのは、精霊使いの素養があるってことなんだよ。」

俺が風の精霊を指差しながら言うと、「へ～そうなんだ～」と全く緊張感の欠片もない、ひどく間の抜けた返答が返ってきた。
今話したことにあまり興味がなさそうな、理解できていないような様子に俺は、この子本当に大丈夫？と少し心配になったが、そこは見なかったことにした。

ウン、キットソンナコトハナイサ。
理解シテクレテルヨ。

と心の端っこから聴こえてくる、黒い囁きを俺は信じることにした。

「それで、だ。精霊使いに教えられるのは、精霊使いだけってのは知ってる？」

「う～うん。知らない」

「それじゃ、覚えといて。これ、わりと常識だから。」

俺の常識だろ発言に、姫さんはコクンと頷く。
それに俺は口元がにやっと緩んだ。
これで、ＯＫ！
姫さんも判ってきたってことで、やっと言える。

「それで、俺は“精霊使い”じゃない。」

「えっ？」

「だから、姫さんを弟子にとかは、無理だよ。
精霊使いは精霊使いに弟子入りしないと、意味無いから。

そもそも、俺“普通”の人だから、異能関係は全般的に教えられないから」

俺の発言にポカンとする姫さん。
その姫さんの顔を見て、俺は今度こそ

「ってことで、他をあたってね～」

と踵を返してマージナルの建物内へと帰ってくることに成功した。

ああ、よかった。
これで、もう姫さんに会うこともないだろうし～

この日、ひょんなことから変な一日の始まりになってしまった俺だが、それからはいつもと同じ時間を過ごすことができた。
そして、それはこれから先も……

な～んて思ってたけど、

「なんでいる？」

翌日、いつものように扉を開けたら

「あなたが弟子にしてくれないからよ。」

昨日と同じことを言う姫さんがいた。

「昨日言ったこと、もう忘れたか？」

「忘れてないわよ。」

「じゃあ、何でいる？　何で弟子にしてくれなんて言うんだ？」

「だって、あんな説明じゃ納得できないもん。あなたが炎の人に何かしてるのは見たもん。」

「あのね～、見たもんなんて言われても、こっちは何にもしてやれないよ。
　昨日も言ったけど、俺は普通の人なの。一般人なの。姫さんとは違うんだよ。」

「あなたみたいな一般人いるわけないじゃない。あなたこそ、何言ってるのよ。」

「マージナルにいる奴に、聞いたらわかる。俺がなんの力も持ってないってみんな知ってるから。」

「じゃあ、あの時のことはなんだったの？」

「あれは～～……」

とここまで来て俺は声に詰まった。
そんな俺に、姫さんはニッと笑みを浮かべた。

「やっぱり。昨日言ったことも、今言ったのもウソなんじゃない。
　あなたはすっごい力を持ってるんでしょ～。」

そう言った後に続けられた、「だから、弟子にして！」という言葉

に、俺は朝から頭が痛くなってきた。

ああ、今日休んじゃお～かな。

もう。

朝の爽やかな風も、真っ青な空も、今の俺の気持ちを和ませる力はなく、俺の心はどんよりと沈んでいく。

そんな俺とは対照的に、昨日よりも姫さんは元気だ。キラキラしている目が痛い。

ついでに、風の精霊も昨日よりもうざいくらいに絡んでくる。

誰かなんとかしてくれよ。

俺の心からの切なる願いを、誰か叶えてくれますように。

俺は遠くを見ながら、切実に思わずにはいられなかった。

壱、突撃！弟子志願者？（後書き）

お気に入り、評価、ありがとうございます。
ご意見、ご感想ありましたらよろしくお願いします。

次話は近日中に～～

弐、わたしと見知らぬ人（前書き）

今回は俺視点ではなく、わたし視点です。

弐、わたしと見知らぬ人

「ねぇ、何やってんの？」

知らない男の声がして、わたしは横を向いた。
いつの間にかわたしの隣にいたのは、赤茶髪に茶色の目をしたひょろっとした人だった。
背はわたしよりは高いけど普通なのかな？
ただ、手足が長いせいなのか、それとも単に痩せているからひょろっとしてちょっと背が高く見えるのかな？と思ったけど、別にそれだけ。

「関係ないでしょ」

「おいおい。何だよそれ。」

「だって、あなたには関係ないじゃない。」

ほんとに、なんで声なんかかけてくるのかな？
こっちから声をかけない限り、勝手に話しかけてこないでよ。って思ってるのに、

「別に、何してるかぐらい言えばいいじゃないか」

「なんで？」

「朝っぱらからそこにいて、じっとしてるなんて気になるだろ？」

うっとおしい。

なに？こいつ。

「何かを見てんの？それとも、誰かを待ってんの？」

無視よ無視。
何なのよこいつ！
早くどっか行って欲しいんだけど。

「うう～ん……見てもいるけど、お相手が来るのも待ってるってとこか？」

「……」

その言葉にドキッとしたけど、黙ってればいいのよ！
黙ってればわかるわけ……

「図星かな？」

「わたし、何も言ってないじゃない！！」

「そんで、お相手は……あいつかい？」

焦って言ったわたしに、ニヤッと笑いながらその男は一点を指差した。
そこにいるのは、あの人。
わたしがここにいる原因。
そして、わたしのあこがれの人。
その人を指差されて、わたしはびっくりして目を見開いた。

「正解だね。」

そんなわたしに、今度は目元を細めて男は笑った。

わたしは今、マージナルのカウンターが見える真正面の場所から、カウンターが左横に見える布張りの長椅子に移動して座っている。
隣には赤茶髪の男が座ってるけど、人ひとり分のスペースが開いているから、さっきよりも距離がある。
それに、内心わたしはほっとした。
知らない人なんて、いやだし。

「そんで、なんでアイツを見てんの？」

「別にわたしの勝手じゃない」

「まぁ、勝手っちゃ～勝手だろうけどね～。
朝からあそこにずっと立ってられたら正直邪魔だよ。」

「どうして？別に誰が立ってようと関係ないじゃない。
こんなに広いんだから。」

なに言ってんの、この人？って思ってたら、横で大きくため息をつかれた。
しかも、なんか独り言言ってるみたい。
わたしには小さくて聞こえなかったけど、守護精霊様がその声を届けてくれた。
（あいつも大変だな）って声を。
それに、何？って思ってたら

「あのね……世間には常識とかルールとかがあるのは知ってる？」

なんか失礼なこと言われた。

なに、こいつ！

ほんと、なんなのこいつ！！！

ぐわっと怒りで顔が赤くなるのがわかった。

もう、なに？こいつ！！

ひとが大人しくついてきてあげれば、これ？

ついてくるんじゃなかった。

早く、移動しよっ！

勢いをつけて立ちあがって、くるんっと男に背を向けて、さぁ行こうって思ったら、

「ねぇ、あいつの弟子になりたいってほんと？」

「……なんで？」

「なんでって、なんで知ってるかってこと？」

「うん。」

「そりゃ～ね～。」

思わせぶりににやにや笑う顔が、すっごくむかつく。

何よ！って仏頂面してたら、今度は面白そうに顔をくしゃっと崩した。

その顔は、さっきのにやにやしている顔よりはマシだけど、ちっと

も嬉しくない。

「あいつが言ってたから。
そう言ったら、信じる？」

当然、信じない！！

もう、行こう。
やっぱり、この男から離れようって思ってたんだけど、この人がまたまた

「あいつがここで何て呼ばれてるか知ってる？」

なんか気になること言いだした！
知らないとか言いたくないから、何にも言わなかったんだけど、それでも伝わっちゃたみたい。

「あいつはね、ここでは“能無し”って言われてるんだよ。」

「なんで？」

「剣士でも戦士でも魔道師でも魔術師でも魔法師でも、まして聖人でもないから。」

それは本人からも昨日聞いたけど、だから何？
正直、蒼の民の中には戦士しかいなかったからわかんない。
どこかに入ってないといけないこと？

「ここ、マージナルに採用されている人ってね～。あいつ以外全～

～員、剣とか槍とかの武器の達人とか、魔道や魔術や魔法で優秀な、それこそ国に仕えていてもおかしくないぐらい優秀な人しかいないんだよ。」

「そうなの？」

「そうなの。それに、マージナルに所属しているだけの奴らだって、それなりだし。

ここには、そ～いうヤツしかいないんだよ。」

僕だってその中の一人だしね～とかいう男の声は、軽いけどウソじゃないって直感的にわかった。

けど、

「だけどさ。あいつは何にも持ってないからね。」

続けられた言葉に、ぐっと息が詰まった。

心の中が、「そんなことはない」って言葉でいっぱいになって。

でも、それが強すぎて胸が痛い。

それでも、思わずにはいられない！

あの人は――――すごい人なんだから！

何も持ってない人じゃないもん！！

「だから、あいつは“能無し”」

違う！！

あの人はすごい人なの！

「どうしてここにいるのか分からない“能無し”だよ」

「ちがう！！！！！！」

やっと口から出た言葉を、こいつは笑った。

ムカつく！ムカつく！ムカつく！

にこにこと笑う、こいつが、すっごく、ムカつく～～～～～！！！！

あの人のこと知りもしないで、何言ってんのよ！

あの人はすごい人なんだから！

か～～って身体が熱くなってたまらない。

キッと男を睨みつけやろうとしたら、男の顔がぐにゃんってなった。

あれ？って思ったら、ぽろって涙がこぼれてきちゃった。

しかも、次から次にこぼれてきて、なんか止まんない。

あれあれ？

どうして止まんないの？

どうしてどうして？って思ってるわたしには、

＜もう！わたしの大事な子を泣かせないでよ！＞

「すみません。まさか泣くなんて思わなくて」

＜もっと、言い方っていうのがあるでしょ。＞

「いや…その～～～」

＜そうですよ～。貴方は何をしにきたんですか？女の子を泣かせに来たんですか？＞

「お前まで言うのか？」

＜そりゃそうですよ。頼まれたときに引き受けるって言ったのは誰ですか？＞

「そりゃ、そうだけど……」

＜早く泣きやませてくださいよ。あの方との約束なんですから。＞

＜あら、あなたもあの人と知り合いなの？＞

＜ええ。かなり前からの知り合いですよ。というかこの人との契約を成立させてくれましたし＞

＜へぇ～～そうなの～～。その辺の話、今度聞かせて。私も早く契約したいし＞

＜ええ。もちろんです。＞

守護精霊様と男と他の精霊が、特に守護精霊様が他の精霊とのおしゃべりに花を咲かせていたんだけど、泣いてるわたしの耳には一切意味をなさなかったし、歪んでいる視界のせいで姿がわかるはずもなかった。

◆◆◆

「え？」

＜そうなんですよ。あの方のおかげで今があるんですよね～＞

「なんかそういう言われ方はイヤなんだけど、否定はできないな」

＜まったく、強がりばっかり言って。言いつけちゃいますよ。＞

「うっ、それはやめてくれ。あいつには……」

わたしをそっちのけで話し始めた二人に、わたしはぼんやりした。

さっき、“能無し”とか言ってバカにしてたのに……

どういうこと？

二人からはあの人をバカにしているんじゃなくて、あの人を尊敬しているような、信頼しているようなそんな雰囲気がする。

なんとなく、わたしがあの人に抱いている感じと似ている？

なんでなの？

さっきとのギャップに混乱していたら、そっと冷たいハンカチが目にあてられた。

横を見たら守護精霊様がわたしの目元までハンカチを持ち上げてくれていた。

わたしは守護精霊様にありがとうございますと頭を下げ、ハンカチを自分で目にあてた。

そしたら、やっと気づいたみたいで、男がこっちを向いた。

そして、

「そのまま聞いて欲しい話があるんだ」

そう言って、話し始めた。

弐、わたしと見知らぬ人（後書き）

姫さんの俺への想いが熱すぎな気が……この娘、大丈夫?そして想われ過ぎな“俺”、大丈夫?と思わないでもないです。。。

次話はある男、僕の視点でお送りします。

参、僕と秘密の湖【前編】

僕の住んでいる町は、なんの変哲もない田舎町なんだけど、たったひとつだけ自慢できるところがある。

だけど、それは町の外には秘密なんだってさ。
こんなにきれいなら、観光名所にでもすればいいのに。

「そしたら、僕も……」

お金持ちになれるかもしれないのに……って言葉は呑み込んだ。
代わりに「はぁ～」と細ーく息を吐いて、ゆるゆると首を振った。

観光名所にして、何をするっていうんだか。
あそこが観光名所になったぐらいで、僕がすぐに金持ちになれるわけないだろうし。
というより、僕が何かする前に大人たちがアレコレして、結局僕にはお金は入ってこないような……

うん、やっぱりあの場所は秘密にしていた方がいいや。

僕はあっさり、あの場所の観光名所化計画を捨てた。
そして、ぐ～～となる腹を抑えた。

「おなかすいた～～」

僕のつぶやきは森の中に吸い込まれていく。
歩きなれた道を進みながら、僕が向かうのは町の秘密の場所。

もうすぐ見えてくる……

「ああ、やっぱりここはいいな～」

目の前に広がるのは、湖だ。
穏やかな湖面、さわやかな風が通る度に湖面に波紋が立ち、その波紋が僕の足元までやってくる。
形も大きさもどこにでもある湖だと思う。
けど、

「いつ見ても、すっごいきれい。」

ほぅ～～と息を吐いて、見惚れてしまうのはこの湖の色！！
見てよ、この色！！
青色なんかじゃなくて、透き通るエメラルドグリーンの湖が眼前にあれば、感嘆の声の一つも出るのは当然。
しかも、この湖はこれだけじゃないんだ。

風が通り、波紋が立つ度にきらきらと太陽の光を反射して湖面が煌めく。
翡翠やサファイアの煌めきの合間に、紅玉や紫水晶の輝きを放つ様は、湖に宝石が沈んでいるんじゃないかと思わせるほど美しい。

この前見た虹もよかったけど、こっちのきれいさには勝てないな。

僕はこの前夕立の後に架かった七色の虹を思い出した。
見たときは感動したけど、それは滅多に見れないから思ったこと。
きれいさで言えば、断然こっちの方がきれいだし、

――本当に

「本当に宝石みたいだな」

「えっ？？？？」

僕の心の声にぴったりはまったセリフだけど、僕は言ってないよ？

「“情報”通りだけど、こんなところがあったんだ」

慌てて後ろを見るまでもなく、僕の横を通り過ぎていく少年。
年は僕と同じぐらいかな？
っじゃなくて！！！

「よそ者！！」

町の秘密の場所に町民（よそ者）以外がいる。
大問題だ。

こんなところを誰かに見られたら……

さーーって血の気が引いた。
町の秘密をばらしたって思われる！！！
それはやばい！
めちゃくちゃやばい！！
母さんに怒られ、父さんには殴られるかも。
みんなにも色々言われるかもだし……

これから起こることは、最悪なことしか浮かばない。

やばいやばいやばい

ひたすら頭の中でループする言葉に押されて、「うわぁっっ」って声も無視して、僕は男の子の腕を引っ張って森の中へと駆け出した。

「いきなり、何するんだよ！！」

掴んでいた手を振りほどかれて、怒った顔が僕の目の前にある。

「お前が悪いんだ！どうして、あそこに来たんだ！誰に教えられたのか言えよ！！！！」

対する僕も怒っている。

だってそうだろう！秘密の場所にこいつが来たのが悪いんだから！一体誰に聞いてやってきたって言うんだろう？言ったヤツ、絶対とっちめてやる。

ひょろひょろで、悲しいことにひ弱なことを認めざる負えない僕が、出来るかどうかはわからないけど……意気込みは大切だと思う。うん。きっと、大切だよね？

簡単に振りほどかれた手を見て、ちょっと悲しくなりながらも僕は怒っていた。

そんな僕に、目の前のこいつはやれやれと言いたげに肩をすくめた。

「誰に教えられたかなんて、別にどうでもいいだろ。」

「よくないよ！　あそこは秘密の場所なんだ！　よそ者が来ていいとこじゃない！！」

「なんで？　あの湖がなに？
あの湖は君のものでも、町のものでもなんでもないだろ？」

「町のものだよ！！　よそ者が来ていいとこなんかじゃない！」

「なにそれ？　町の近くにあるだけで、町のものなの？
確か、この町の領地にこの森は入ってなかったはずだけど……
この町は勝手に町のものにしてるの？　それとも国が黙認してるってこと？」

言われて僕は言葉に詰まった。

町の近くにあれば、町のもの。
町のすぐそばにあるから、単純にこの森も湖も町のだって思ってただけで、僕は町の領地とかそんなこと考えたこともなかった。
いきなりそんなことを言われても……
答えられない僕は、ただ口をぱくぱくとしているしかなかった。

「それに、さっきよそ者が来ちゃいけないとか言ってたけどさ。
それを言うなら、俺じゃなくてお前の方じゃないの？」

「はぁ？」

「すっごい不機嫌そうだったじゃん。」

あれはあれで綺麗だったけどさ～と言いながら腕を組んで頷いてい

るこいつに、僕は思った。

変なヤツにからんじゃったのかもしれない。

僕は自然と距離を取るように数歩下がった。

その間、こいつはぶつぶつと「機嫌とるの大変そう」とか「どうやって説得しようかな」とか言っていたけど、急に頭を押さえて

「ほんとに、面倒なことばっか。俺は一般人なのに、ひどすぎる！」

嘆いて髪をぐしゃぐしゃと掻き混ぜ、こっちを見た。

目と目が合った瞬間、どきっとしてじわじわと下がっていた足が止まった。

視線が外せなくて戸惑ったけど、すぐに視線が逸れ、僕の斜め後ろに向いたその目が、大きく見開かれた。

何か、いる？

町の近くにある森のため、この森には大きな獣はいない。

見かける獣の中で大きな獣と言えば、せいぜい兎とか狐ぐらい。

だから、後ろに熊みたいに大きな獣が現れたとかは思わなかった。

けど、珍しい色をした鳥なら？

そう思って僕もその目線の先を見たけど、そこには何もなかった。

何にもないやってちょっと落胆しながら前を向いたら、目を細くして薄く笑っている顔があった。

なに？

その顔、怖いんだけど。

ジリっとまた下がり始めた僕の腕が、ガシッと今度は掴まれた。
ヒィッと喉が鳴った僕に、薄笑いを浮かべたこいつは

「お前にいいもの見せてやるよ」

一言投げつけて、ぐいぐいとさっき僕たちが辿ってきた道を戻り始めたのだった。

参、僕と秘密の湖【前編】（後書き）

こうして、僕と俺は出逢ったのでした。。。

後編に続く。

四、僕と秘密の湖【後編】（前書き）

ちょっと短めです。

四、僕と秘密の湖【後編】

うそだろ……
そんな、バカな……

「すごいだろ」

言ってることが少しもすごくないみたいな、よく言えば冷静な、ぶっちゃけ、すっごくどうでもよさそうな声が横からした。
だけど、僕はその声に無反応。
ぽかんとただただ口を馬鹿みたいに開けていることしかできなかった。

連れられてきたのは、さっき僕がこいつの腕をとったところ。
秘密の湖……のはずなんだけど。。。

「なんで??」

湖だよね?
来た道を引き返してきただけなんだから、間違いなく湖だよね?
毎週2、3回は来てる湖だよね?
あの、秘密の湖だよ、ね?

僕はもう一度なんで?と小さく呟いて、手で目を思いっきりこすった。
力いっぱいこすって、顔が痛くなってやめた。
そして、またぽかんと口を開けて目の前を凝視した。

そこにあるのは、湖。

ただし、真っ青な、底さえも見えるのでないかと思うぐらい透明な、湖。
さっきまでのエメラルドグリーンの湖は一体どこにいったの？

「さっきよりいいだろ。」

ああ、確かにイイと思う。
すっごく綺麗だなって思う。
もう、綺麗すぎるっているか、美しすぎるっているか。
こういうのを、神秘的っていうのかな？

透き通る湖は、神聖な気配がして近づいちゃいけない気がした。
さざ波が立つと、さっきまで宝石の輝きと思っていた波紋が、ただのおもちゃみたいにちゃちに思えるぐらい綺麗すぎて、

「なんだよ。泣くほどのことじゃないだろ？　何泣いてんの？」

呆れた声で、頬を伝った涙に気付いた。
気付いたところで、止めることはできなかったけど。
だって、きれいなんだから、仕方ないだろう！
きれいすぎて、泣けるなんて知らなかったんだし！

「まぁ、いっか。」

そう言ったこいつは、「ちょっと機嫌が直ったみたいだね。よかった。」湖に向かって柔らかい笑みを向けた。
それは、僕にかけてくれた言葉じゃないってことは、すぐにわかった。
僕へと声をかけるんだったら、さっきまでみたいに、こいつはきっとこっちを向いて言った。

ほんの十数分ぐらい前に初めて会った奴だけど、話すときに目をそらさない奴だってのはなんとなく分かったから、だからこいつは僕に向かって言ってないなって思ったんだ。

じゃあ、誰に向かって言ってんだろ？

湖の側には僕とこいつ以外はいない。

だけど、こいつは湖面に向かって、まるでそこに誰かがいるかのように優しい声で話している。

やっぱり、こいつヤバイ奴なのかな？

ちょっと前に浮かんだ考えが再浮上してきた。

そうなのかもしれないって思う。

でも、僕はちょっと前みたいに、ずるずると足を下げることはしなかった。

だって、もったいないじゃないか！！！

こんなに綺麗な湖なんだよ！！！！

涙が出ちゃうくらい、綺麗なんだ。

僕は、横で一人でブツブツと、まるで誰かと会話でもしているかのように話しているこいつを無視することにして、陶然と神秘的な変貌を遂げた湖を、色とりどり、緋や碧、蒼や黄金に煌めく湖面を見つめることにした。

「えっ！　うそだろ～」

熱に浮かされたような目で湖を見ていた僕の耳に、素っ頓狂な声が聞こえた。
それは、さっきからぶつぶつと湖に向かって独り言をしていた奴だ。
さっきまでと声の調子が違ってたし、急に大声を出されたから僕は驚いてこいつを見た。

こいつは頭を抱えて、勘弁してくれよとか、できるわけないとか、他をあたってくれとか言って嘆いていた。
それをぽかんと見ていた僕だったが、はぁ～っとため息をついた奴の視線がこっちに向けられて、慌てて視線を外した。

み～～た～～～な～～～～

とか言われるかもなんてことは、ちょびっとしか思わなかったけど、なんか見ちゃいけないものを見ちゃったような気がして……
何にも見てないよ。僕はただ湖を見てるだけだよ～って態度でいることにした。
そんな僕の肩に、ぽんっと奴の手が乗った。
びくっっっっとなった僕に構わず、視界いっぱいに奴のニヤけ顔が広がる。

「なぁ～お前もっとすごいの見たくない？」

それは、悪の組織への勧誘？

頭に浮かんだのはこれだけだった。

僕が邪悪な笑顔に固まっている間に、間近に迫ってきた手。

それを叩いてしまうことは簡単だったはず。
だけど、僕は金縛りにあっているかのように身体が動かなかった。
そして、

「痛っ！」

パチッと静電気みたいな、ビリっとした刺激が眉間に刺さった。
こいつがしたのは、ただ人差し指で僕の眉間を突いただけなのに、
どうして？と思うが、そんな些細な疑問は一瞬にしてどっかに飛んで行った。

＜どうも、はじめまして＞

「ななっっっな、なに？？？」

目の前に突如として現れた美貌の主に、僕はあたふたすることしかできなかった。

「こちら、ここに住んでる水の精霊。お前のこと気にいったらしいよ。」

淡々と横で言われたことを、僕は全く理解できなかった。

四、僕と秘密の湖【後編】（後書き）

中途半端に次回に続いてしまい、すいません。
次話は早めに投稿します。

伍、わたしと精霊使いになる条件？

「こうして、僕はこいつと出会ったわけさ。」

＜そして、その場で契約をしたんですよ。あの方の立会いのもと。＞

そうでもしないと、この人とは契約は無理でしたね～とのほほんと笑っている水の精霊に、赤茶髪の男は少しだけ不機嫌そうにしていたけど、反論はしなかった。

なんでかな？って思ってたら、答えが返ってきた。

「僕は、もともと精霊使いに向いてたわけじゃないんだよね……“目”が悪かったからね。」

「目？」

けど、返ってきた言葉の意味が分からない。

何を言ってるの？って顔をしてたら、あ～分かんないか？って聞かれたから少しだけ顎を下げた。

なんか、素直になるのも癪なのよね。

「あんた、精霊姫って呼ばれてたんだろ？」

「ええ、まぁ」

過去のこととして言われたことに、ちょっと悲しくなりながら頷く。

でも、男は気付かずに話を続けた。

「だったら、わかると思うけど、精霊って誰にでも“視える”相手じゃないだろ？」

そりゃ～そうね。
わたしは守護精霊様と水の精霊を見て、こくりと頷いた。
守護精霊様を最初に会った時、その話をしたらおばばが変な顔してた気がする。
次の日には族長がやってきて、その日を境にわたしの周りは大人ばっかりになったんだった。
そして、「精霊姫」と言われるようになっていた。
みんなが見えてたら、そんなことにはきっとならない。

「精霊使いってさ、精霊を見る“目”がいるんだよね。
それがないと精霊は見えないわけ。そんで、僕はその“目”がなかった。」

「じゃ～、なんで？」

「その“目”を、あいつがくれたんだよね。」

「どうやって？」

目をくれる？
なに、それ？
さっきの話のどこにそれが入ってるっていうの？
あの人がやった事って、眉間を小突いただけでしょ？
それ以外に何かあったの？
混乱しているわたしに、

＜正確にいうと、あの方に“視界”を広げて頂いたんです。＞

静かで涼やかな声が聞こえたけど、ますます意味が分からなかった。
そんなわたしに、赤茶髪の男はガシガシと頭をかいて苦笑いした。

「まぁ、分からないっていうのも分かるよ。僕もいまだにわかんないし。
人の“目”をどうにかするなんてこと、あいつ以外に見たことないしね。」

＜あの方のように、精霊を見る“目”を開眼できる人間はおりませんよ。＞

「ほんとに、変な奴だよな～。あいつは。」

ははははっと笑う男と、自分のことのようにあの人を誇っている精霊。
何だかよくわからないけど、あの人が凄い人っていうことをわたしよりも先に知っている人だっていうことだけはよくわかった。
そして、やっぱりあの人は、反則的に凄い人なんだと思って、カウンターにいるあの人をちらりと見た。
そこでは、カウンターに並んでいる人に書類を書かせている姿が目に入った。
その書類を書いている人は如何にも強そうな戦士で、あの人がとっても貧弱に映る。
そんな風に視線をそらせていたわたしの横から、

＜“目”のこと、すごく気になるわ。でも、もっと気になることがあるのだけど＞

守護精霊様の声に振り返った。

＜あなた、“声”を聞くことは元からできたの？それともそれも？＞

その質問に、赤茶髪の男は首を傾げ、水の精霊はふふっと笑った。

二人を見た守護精霊様は、やっぱりねと一人訳知り顔。

一体何がわかったっていうのかしら？

わかんないことだらけで、段々いらいらしてきたんだけど。

口を尖らせてぶすっとしてたら、ふわっと髪をなでられた。

見れば守護精霊様がにこりと艶やかに笑って、ついっと水の精霊の方へ向くように促された。

いらいらしてて、面白くない気分だけど……

守護精霊様には逆らえない

わたしはしょうがなくそっちを向いた。

そこには、にこやかに笑いながら、ちょっとだけ困ったよう顔をしている水の精霊がいた。

その微妙な表情を男も訝しげに見ているのが、少し変な感じがした。

＜これを言ってしまうと、哀れなんですが……＞

＜いいじゃない。真実を知ることは大切なことよ＞

＜また、風の方は気軽に仰いますね＞

＜なあに？　気まぐれとでも言いたいの？　流されやすい水の方が。＞

＜言いますね～。風の方。お気に入りと契約も出来ていないという

のに＞

＜それとこれとは別よ。契約に関して言えば、人に取り持ってもらった方には言われたくないわ。＞

守護精霊様と水の精霊が、ふふふふふって見つめあって笑ってるんだけど……

笑ってる？

笑ってるんだよね？

でも、ふふふっって口元は笑ってるんだけど、目が恐いんですけど。。。

ぶるって寒気が走って両腕をさすっていたわたしと、同じように腕をさすっていた赤茶髪の男の目が場パチッと合った。

なんとなく、シンパシーみたいなものを感じて、次の瞬間には気まずくなって視線を外した。

斜め上で笑い続けながら、バチバチと火花を散らしている守護精霊様と水の精霊は、下にいるわたしたちのことなんて気にしてないみたいに、言い争っている。

「なんでこんなことになってるのか、さっぱりわからないわ。」

ほぅっと、わたしがため息を吐くのもしょうがないってものじゃない？

わたしが愚痴っている斜め上では、ますます守護精霊様と水の精霊がヒートアップして、風が渦巻き湿気がすごいことになってきてて、止めた方がいいっぽいけど……

「……」

ヒートアップし過ぎて、声かけらんないし。
今、声かけたらなんかすっごいヤバそう。

わたし、し〜らない。

わたしは、そっと守護精霊様と水の精霊、ついでに赤茶髪の男が視界に入らないように、あさっての方に目を向けた。

伍、わたしと精霊使いになる条件？（後書き）

今回、短めでした。結局精霊使いになるためには……？って中途半端になってしまい、すみません！！最終的に弐章の中できちんと条件を明らかにする予定です。

ちなみに、次は俺の視点になります。

六、俺と押しつけられた役目（前書き）

評価、お気に入り、ありがとうございます！
少しでも楽しんでもらえたら、嬉しい限りです。

六、俺と押しつけられた役目

「お前ら、何やってんの？」

俺が呆れ顔で言うのは、正しいと思うんだよね～。

マージナルにはいろんな奴らがいるし、奇人変人なんてのもざら。
ちょっと変わってるよね～なんて言われるぐらいで、さらっと流すようなとこなんだけど、ね。

これは、ちょっと変わってるってレベルを超えている。
超えまくっている。

その証拠に、この一角だけみんな避けて通ってるし……
まぁ、変な奴には関わるまいってのは賛成だけど、賛成なんだけどさ～
何で俺はそこに行かないといけないんだよ！
ほんとに、俺が行かないとだめ？

ちらっと後ろを向いたら、鋭い眼光が幾つも突き刺さった。
送り主はカウンターの内側にいる面々。
同僚たちからの「お前の知り合いだろ！お前がなんとかしろ！」という意思がバシバシ伝わってきた。
かなりの痛みと冷たさを伴って。

だから俺は、厭々ながらこの異次元空間と化した一角に近づいているというわけだ。
誰も、好き好んでこんなヤバイ状況に首突っ込むわけないって。

いや、だってさ～

「この空間は何だ？」

いや、分かってるけどさ。
あえて分かりたくもないよ。これ。
精霊２体の喧嘩のせいで、こうなってるなんてさ。
ここに来るまでもなく分かってはいたけど、精霊力の無駄遣いもいいとこだ。
んで、

「わたしは、「ぼくは　＜だってこいつひどい　＜あなたに言われたくない　「別に何もしてないわよ！「頼まれたこと　＜こいつ！　＜あなたは！「をしようと……」」」」」

声をかけた途端ぶわっとまくし立てられた。

「何言ってんのか全然わからん」

俺はどっかの１０の声を聞き分けられる偉人さんじゃないんだから、一気に言われたって分かるわけないだろうが！
一人ひとり順番に言え！
それか、全員黙ってろ！

そう言いたかったが、仕事でお疲れ気味の俺は人間２人は無視して、喧々囂々と低次元の喧嘩で盛り上がり、全く周辺状況を認識していない精霊たちに、

「うっせーんだよ！」

とりあえず襟首捕まえて地面に下ろし、その頭上に拳骨を落としておいた。
＜痛い＞と頭を抑える精霊たちに、ちょっとばかりスーッとした。

＜ひどいです！＞

＜なんで、こんなことすんのよ！＞

＜そうですよ！　悪いのはこの人だけじゃないですか！　なんでこんなことを＞

＜なに言ってんのよ！　あなたのせいじゃないの！＞

涙目で睨んできたかと思ったら、もうこっちのことは気にせずに睨みあって言い争う。
ついでにさっきにまして空間を歪めはじめた……っていうか、歪みから氷雪が？　あれ？　今度は熱風！
変な現象をまた引き起こし始めた精霊たちに、俺は思う。

「ストレスってよくないよね！」

俺の拳は、ギリッとイイ音を立てて、再度標準を定めて呻りをあげた。

「そんで、お前ら何やってんの？」

痛いとかひどいとか言ってる精霊（バカ）はほっといて、俺は最初にした質問を繰り返した。

「なにって、なにもしてないわよ」

姫さんがぐちぐちと文句を言ってる精霊たちから目をそらし、あさっての方向を見ながら言えば、

「僕は、頼まれてたことを……」

赤の水使いが青ざめた顔で言った。

あっ、ちなみに“赤の水使い”ってのはマージナルでのこいつの通称。

理由はいたって単純。赤茶の髪をしている水の精霊使いだから。

水の精霊使いなのに、蒼とか青とかでもなく“赤”ってついてるからなのか、こいつのことを知らない連中は“赤の水使い”って名前にビビっちゃうとかなんとか言ってたのを、ちらっと聞いた。

“赤”ってついてるだけに、残酷残忍非道の限りを尽くす奴とか、通る道全てを血で染めるみたいな戦闘狂とか思われてんのかね～？

俺の前で小刻みに小動物みたいに震えてる、こいつに？

ちゃんちゃらおかしいだろ？

おっと、そんなどうでもいいことは脇に置いといて……

「姫さんは何もしてなくて、お前は頼んだことをね～」

俺はハンっと鼻で笑って、コツコツと足を鳴らせた。

「それじゃ、こうなった経緯を教えてもらいたいんだけど？」

指差すのはそこら辺。

見たくないけど、見えちゃうもんはしょうがない。
けどさ～、ほんとにどんな展開でこんなことになったわけ？

２人と精霊２体の周囲一帯は、床は凸凹になってて、水でびしゃびしゃ。
ニョキニョキ氷柱が出てるところもあれば、水柱に、あれはお湯柱かな？
そんであっちには竜巻発生中で……お～～、椅子とか盛大に回ってるね～。

すごいね～
マージナルの中でこんなことを、ね～
ここら辺、誰が修繕すんのかね～
椅子とか完全に買い替えだよね～。
もう木くずになってるのもあるし……

「ねぇ、君らマージナルに恨みでもあんの？」

精霊２体の動きを止めても、まだ蠢いている“力”に、流石に涙が出てくるよ。
なんで俺がこんなの止めなきゃいけないんだよ。
俺は何の力もない“一般人”なんだぜ。
ここは、無駄に力がある奴らが来るべきところなんじゃないのかよ！！！
俺の嘆きを、誰か聞いてくれ！
そんで、俺の代わりになんとかしてくれよ！

そんな心からの願いは、どこにも届いてはくれなかったのに、同僚たちからの痛いくらいの「早くなんとかしろ」コールは俺の方に届きまくりだった。

がっくりだよ。ほんとうに。

◆◆◆

ああ～。あの、いつもの如く呼び出しくらって、有無を言わさず飛ばされてた湖か。

思い出した。

あの湖は確か、自然発生的に生まれた水の精霊たちが何故か変に集まり過ぎてるから、何とかしろって言われたんだっけ？

解散させても良し。人の立ち入れない精霊の地にするのも良しとかなんとか。

一目に付き過ぎてちょっと困ってるけど、御仁方自らが出張るほどじゃないし……ってな理由だったかな……

「今は“迷いの森”の奥だったか？」

「そう、あの湖だよ。あの後急に濃霧が発生して、地場が狂ったみたいになったんだよね。」

故郷に帰省したときに何回か試したけど、やっぱり行けなかったってカリカリと頭を掻きながら言う赤の水使いに、俺はさらに思い出した。

あれって確か……

“迷いの森風”にするためにめっちゃ濃い霧を発生させて、精霊結界を張らせて、幻覚魔法とか方向感覚を狂わせる魔法とかをかけるようにしたんだよな～。

あの湖が居心地いいから退きたくないとか言われて、それなら湖を不可侵領域にしろって条件つけたような気がする。

頭の隅に追いやられている記憶をぼんやり思い出して、俺は一人あ

のときも大変だったな～と黄昏た。
立ち退き反対運動に熱くなる水精霊（じゅうにん）たちとの、頭が痛くなる会話。
あれには苦労したよ。ほんとに。

異種間交流の難しさっていうのを、まざまざと教えられたね！
まったくあいつらときたら！
こっちが眉間に皺を寄せたぐらいで何か暴れだしそうにするし、態度でかいし、うるさいし。
にこにこ作り笑いで顔面筋肉痛になったあの痛さを、あいつらは知るまい！
それに、長々とそんでもって延々と愚痴られ、暴れられて、それを宥めさせられて……
あ～～、思い出したくない！！

＜ねぇ。ちょっと、聞きたいんだけど。＞

俺があの時のことで、仏頂面になってたら、くいくいっと髪を引っ張られた。
いつの間にか復活を果たした風の精霊が俺の顔をひょいっと覗く。
何だ？と視線で促せば、

＜あれをどうやって精霊使いにしたの？＞

興味津津という感じで聞いてきた。

「さっき、言ったじゃないですか。」
＜ついさっきのこと、もう忘れたんですか？＞

間髪いれずに、そして全く同じタイミングで赤の水使いと水の精霊

が言い放つ。

＜あんなの、言った内に入らないわよ。＞

「何でですか？」

＜だって、ちゃんと全部言ってないし。＞

「僕が言えることはあれで全部ですよ。」

首を傾げる赤の水使いに、風の精霊は＜あなたには、聞いてないから大丈夫よ＞と手をひらひらとさせた。

そんな風の精霊に、＜ちょっと……風の方！！＞と憤る水の精霊。

＜なによ。ほんとのことじゃない。＞

＜今はそっちではなく、なんですかその態度は。失礼じゃないですか！＞

＜なにが？＞

＜私の主に対するその態度ですよ！＞

＜わたしの主じゃないもの。別にいいでしょ。＞

＜あなたという方は！！！＞

そして始まる水の精霊ＶＳ風の精霊。

戦いのゴングが、カーンと鳴った……ような、そんな幻聴に俺は頭が痛くなりそうだよ。

質問されたの俺なのに、俺完全に蚊帳の外だし。

もう、こいつら他の奴らに任せた方がいいんじゃないか？

ってか、むしろそっちの方がいいよな。

俺“一般人”だし！！！

決意を込めて、後ろをチラ見。

はい、ダメなんですね。

俺が何とかするしかないんですね。

そうなんですか～～。

同僚たちの視線は弱まることなく、むしろこの事態を見にでも来たのか、確実に増していた。

はぁ～、なんかすっごい面倒くさい。

赤の水使いに姫さんを弟子にしろって言っただけなのに、なんでこんなことになってんだろ？

再び渦巻く力にがっくりと肩を落とす、俺。

そんでもって、三度拳を振りかざす俺。

振り下ろす場所は当然

「お前ら、いい加減にしろ～～！！」

ガコン！とイイ音を鳴らして、キュ～っと2体の精霊は仲良く目を回した。

六、俺と押しつけられた役目（後書き）

過去編の湖で、“俺”がどんなお願いごとを叶えるために行ったかでした。
俺が、ぶーぶー文句を言ってくる精霊たちを相手に、笑顔を武器に心で泣いてがんばっていたというのは、赤の水使いは永遠に知ることはないと思います。彼と契約した水の精霊さんも。。。
次回はまた視点が変わります。お楽しみに。

七、わたしと運命の一言？（前書き）

お気に入り、評価、ありがとうございます。暇つぶしにお楽しみください。

七、わたしと運命の一言？

＜は～。なんでこいつなんかと一緒にいなきゃならないのかしら？＞

＜それは、こっちのセリフですよ。＞

＜なによ！＞

＜何ですか！＞

今日も守護精霊様は不機嫌だ。
それもこれも、この見ためがすっごい綺麗な水の精霊（っていっても守護精霊様以上じゃないけど）との相性が良くないみたいなんだよね。
初めてあったときとかは、別に仲が悪いってわけじゃなかったのに。
どうしてなのかな？

「2人とも。落ち着いてよ。」

わたしの隣にいるこの赤茶髪の男が、必死になって2人を宥めるのも恒例行事。
わたわたと手を動かして2人を宥めている男の姿は、傍目には変に見えるんだろうな～と人ごとのように思って、わたしはそっと隣の男から距離を取った。

これで、わたしは大丈夫ね。

うんうんっと頷いて、ちょっと離れたところから男と守護精霊様と

水の精霊を見ることにした。
そして、何日か前のことを思い出してみたり……

「お前ら、さっさとこっから出てけ！」

ぽいっと外に追い出された守護精霊様を追いかけて、わたしは思わず側にかけよった。
そしたら、ぴしゃっとマージナルのドアを閉められちゃったのよね。
わたしの隣では、わたしと同じように水の精霊を追ってきた赤茶髪の男が、「ちょっと待って！」とか言ってたけど、あの人が戻ってくることは……

「あっ、そうそう。」

戻ってきた！
しかも、顔に笑みを浮かべてこっちに来た！

あの人が近くに来てくれることは、うれしいはずなんだけど……
な～んか、ちょっと、イヤな感じ？
あの笑顔がそこはかとなく、黒いっていうか、邪悪な感じがする。

「お前ら、半年間マージナルに立ち入り禁止だから。
これ、マージナルの総意。覆ることはないから。」

放たれた言葉はこれ。
言われたことの意味がよくわかんなくて、はぁ？って呆けちゃった
わたしの横で、赤茶髪の男がギョッと目を剥いて、

「それだけは！　それだけは勘弁して！！
半年間どうすればいいんだよ！　僕が悪かったからせめて1カ月にしてください～～」

必死の形相で言ったけど、ニコニコ笑顔でパタンと扉が閉まっていった。
そして、

「うわ～～～～ん」

大の大人が、しかも男の人が、恥ずかしげもなく大泣きするのも見てしまった……

それって、そんなに大事（おおごと）なの？
建物に入れないだけじゃない。

マージナルが今一分からないわたしには、ここは単にあの人が勤めている場所ってだけの価値しかないんだけど……
この人の嘆きっぷりを見てると、それだけじゃないのかな？

そんなわたしの素朴な疑問は、その後、後悔とともに解消されることになった。

「マージナルに入れないなんて……しかも、半年も……」

悄然としてぶつぶつと呟く人って、普通に話しかけたくないものよね。
ましてや、その項垂れっぷりが度を越してたら、近寄りたくもない

わよね。

わたしは、あの後マージナルに再度入ろうとして、あの人以外の職員の人に追い出されてしまった。
あの人が言ってたことって、本当なんだ～と初めて理解した。
それと同時に、あの人を追いかけてここまで来ただけだから、あの人が1日の大半を過ごしているあの場所に入れなくなったのは、正直痛いな～と思って、ちょっと凹んだ。

っということで、わたしはあの人の仕事が終わるまで暇になってしまった。
だから通りをぶらぶらしてみようと思ってたんだけど……

すっごい淀んだ空気を醸し出して、変な空間を作り出しているこの人を見つけてしまったのだ。
思わずうわっ！って声が出ちゃうのは、しょうがないと思うのよ。
周りの人も言ってるし。

ほんと、近寄りたくないわ～。

わたしは、この人を視界に入れないように、くるりと後ろを向いて歩くことにした。
向こうの通りの方が賑やかそうだけど、どこ見ても見たことない場所だからどこもかしこも物珍しい。
それだったら、わざわざあっちに行くことないし、向こう側を見に行こ～っと。

ふんふんっと鼻歌を歌いながら歩きだした、わたし……なんだけど。
あれ？

なんか、前に進めない？
足に冷たいのが触れてる感じがするのは、気のせい？

「どこに行くんですか？」

声に振り向けば、赤茶髪の男が笑っていた。
その顔に、ひくりと頬が引きつるのが、すっごいよく分かった。

だって！！　この人の目、笑ってないんだもん！！！

そんでもって、足元のひんやりした感触は、

「わたしの足が、凍ってる！！！」

わたしの足を捉えた氷が、わたしと地面をばっちり固定していた。

「だいたい、どうして僕がこんな目に合わないといけないんですかね。
　僕はただ話をしていただけなんですよ。それをお前とあなたが……」

云々（うんぬん）とぐちぐちと言ってくる相手に、わたしはふは～とため息をついた。

ここは表通りから離れた場所にある、公園。
のどかな笑い声と、子どもがわーわーと遊びまわっている声の合間に、軽食とか飲み物とかを売り歩いている物売りの張りのある声が聞こえる。

そんな平和な公園の片隅、木陰にわたしとこの人はいるわけだけど……

も〜〜〜、すっっごくうざいよ〜〜〜

表通りから、わたしを有無を言わさずここに連れてきたと思ったら、これだ。

延々と愚痴をこぼしている。

＜申し訳ありません。＞

＜はいはい。もうわかったわよ。私が悪かったわ。これでいいでしょ〜＞

水の精霊と守護精霊様に。

わたし？

わたしはっていうと、もう完全に蚊帳の外ね。

傍から見れば、まるでわたしが怒られてるみたいだけど、ここに来てから一回も目が合ってないし、わたしに対しては、な〜んにも言ってきてはいないのよ。

ま〜、わたしに八つ当たりされてもいい迷惑だし、そんなことしたら絶対殴っちゃうわね。

そんな風にわたしが物思いにふけって、男の声を遮断していたんだけど、

「あなたたちのおかげで、僕はマージナルに入れなくなったんですよ。」

深刻そうにそう言ったこの人の声が、やけに重苦しくてひっかかった。
だから、ちょっと聞きたくなったんだよね。

「ねぇ。建物に入れないことの、何がそんなに辛いの？」

単なる好奇心。
ちょっと気になる程度の軽〜〜〜い好奇心だったのよ！！

なのに……
ああ、なんでこのときわたしは質問なんかしちゃったのかしら？
魔がさしたとしか思えないわ。
男の言葉なんて聞き流して、何でそのままさよならしなかったんだろう。

わたしのこの一言が、これからのわたしの未来を決めるきっかけになるなんて！！

……今さら後悔したってどうしようもないのよね。
思い出すだけでため息が出るわ。

わたしは守護精霊様と水の精霊の間に立って、必死に宥めている男に会うたびに……っていうか、毎日会ってるから毎日、毎日、朝日が昇った瞬間から太陽が沈んだ後も、後悔とため息を繰り返している。

八、わたしと精霊使いの師匠

毎度おなじみの光景になりつつあるけれど、守護精霊様と水の精霊と赤茶髪の人がごちゃごちゃし出すと、なかなか治まらない。
ちょっと離れたところから傍観していたわたしは、今や影を作る木陰に移動している。

だって、暑いんだもん！
もうお昼に近いせいか、太陽は真上。
まっすぐな太陽の光は、歩いていれば気持ちいいぐらいだけど、ぼーっと立ってるとじわじわと肌を焼いてくるのよ！
とっても、とっても暑いのよ！

ぱたぱたと手で風を送りながら、木陰に入れば幾分涼しくなった。
あっちは、盛り上がってるから、まだまだここから移動できそうにない。

なんで、あのとき勢いに任せて頷いちゃったのかな？

木陰に入ったわたしは、こうなった原因を思い出し。

「……うん」

やっぱ、しょうがないわよね！

あのときのことを思い出して、しょうがなかったのだと一人首を縦に何度も振った。
通りすぎる人がそんなわたしを見て、

「あの人大丈夫かしら?」
「この暑さでやられたのか?」
「具合でも悪いんじゃ。」
「顔色が悪くないか……」

とかなんとか言っているのは、全く聞こえてはいなかった。
それは、わたしの意識があの日の公園に飛んでいたからで、わざと聞こえないようにしていたわけじゃない。断じてそんなんじゃないとだけ、言っておくわ。
誰にとかは言わないけど、ね。

誰に対して言い訳しているか分からないまま、わたしは精霊2人を宥めている男の横顔を見た。
その顔は一言で言うと、ゆるい。
間抜けには見えないけど、それだけ。
とにかく、ゆるいのよ!
今何て、守護精霊様と水の精霊を優しく宥めているというよりも、2人に情けない顔でお願いしているようにしか見えないし。
そんな男の顔を見る度に、あの日の顔とのギャップにわたしは付いていけないなと思っちゃう。

そう、あの日。
わたしがうっかり質問してしまったあの日の男の顔は、今でも夢に見るほど強烈で……

「……また、思い出しちゃったよ〜」

あの日のことを思い出して、ちょっと涙が出てきた。

あの日、

「ねぇ。建物に入れないことの、何がそんなに辛いの？」

うっかり言っちゃった質問に、ぴくりと男の顔が一瞬固まった。
そして、すっごくゆっくりと顔を向けてきたんだけど……

「……ひっ」

ゆらりとこっちを向いた赤茶髪の男の目に、わたしは小さく悲鳴をあげてしまった。

やばい！！！
ヤバイ人の目だ！

咄嗟に顔をそらせなかった。
眼前の顔は普通の、さっきまでと同じはずなのに、暗いというか黒いというか、どこか逝っちゃってるぽいその目のせいで、完璧に狂人一歩手前の危ない人になってるその顔が！！！
ばっちりわたしの目に焼きついて。。。

い～～～や～～～！！！

声にならない悲鳴を心の中で叫びまくったのは、初めてかも。
あの化け物のときは、思いっきり固まっちゃって、叫んでるどころじゃなかったし……

◆◆◆

もう、イヤ！！
さっきからルール、ルール。
だから何なのよ！
あ～～、ほんとにイライラするわね。
早く本題に行ってくれない？
さっきから２０分ぐらい「マージナルとは」って説明ばっかで、疲れるったらありゃしないわ。

そんな、わたしの心の声がやっと届いたのか、逝っちゃってる目つきの男の視線が、ギランってわたしを睨みつけてきた。

「そんなマージナルの所属者は、マージナルからの斡旋による依頼で生計を立てているわけです。
そして、マージナルに立ち入り禁止を言い渡されたということは、仕事ができないということです。
ということは、僕は半年間強制的に仕事が出来なくなったってことなんですよ。」

わかりましたか？
そう聞いてきた男の顔は、鬼気迫るものがあって、夢に出そうなぐらい怖かった。

目が変われば、人相が変わることをわたしは身をもって知った。
マージナルについて切々と語っていたと思ったら、これ。

もう、やだよ～～

泣きたくなってきた。
だって、怖いんだもん。

この日、延々とこの怖い目で夜中まで散々「マージナルについて」という講座が開かれた。

講師は赤茶髪の男。
講習生はわたし一人。
２人の精霊はと言えば、いつの間にかいなくなっていた。

守護精霊様の薄情者！！

場所が公園から宿屋の食堂に代わって椅子に腰かけ、延々続く講習会が女将さんの一声で終わりを告げた瞬間、わたしの目には宿の女将さんが天使様に見えた。

っていうのは、いくらなんでも大げさかな。
なんせついこの間、本物の麗しの天使様を見ちゃったわたしとしては、たとえでも天使様と女将さんを同列になんか扱えない。
天使様と女将さんでは、次元が違いすぎるしね。
あっ、でも天使様じゃなくて、救世主とかだったらいいかも。
わたしにとってはそうだったし。

こうしてこの日は、長時間の苦行にヘロヘロになって眠りについたんだけど、こんなに疲れて眠った翌日がすっきり爽やかな朝になるわけがなかったのよ。
夢の中でもマージナルトークと、あの怖い目を向けられてたし。

スカッと、晴れ渡る空とは対照的に、わたしの心の中はどんより曇って、ついでに頭の中も霞がかっていた。
だから、正常な思考能力なんて、わたしにはなかったのよ！！
あの怖い目に根こそぎ刈り取られちゃったのよ、きっと！！

翌日の朝早く、

「今日から君は僕の弟子になるから。」

「はぁ？」

「いいよね。」

「……はい」

ニコッと笑いながら、その実昨日の夜と同じ目つきの男が、朝っぱらから目の前に現れたら……

頷くでしょ！

わけわかんないこと言われてるとか思っても、反射よ、反射。

とりあえず頷いとけって感じで、反射的に頷いちゃったのよ！！！！！

っということで、弟子になりました。

ええ、弟子になることになりました。

わたしの師匠は、切れると恐ろしい水の精霊使いです。

巷では“赤の水使い”と言われている、赤茶髪のひょろ男がわたしの師匠になりました。

あの人じゃないことは、ひじょ～～～～に！！

ひっじょ～～～～～～に残念で、とっっっても悲しいんだけど、

わたしは師匠の弟子になりました。

わたしの師匠があの人じゃないんて……
こんなことがあっていいの？
なんであの人じゃないの？
あの人を追いかけて、ここまで来たっていうのに、ひどい！！

そんなわたしの嘆きなんかなんのその、この男、いやもう師匠って言わないとダメなんだっけ？
この師匠は、ちっとも気付かず守護精霊様と水の精霊たちとごちゃごちゃと何かしている。

う～～ん。後もう少しってとこかな？
師匠の懇願に守護精霊様が折れるまでのカウントダウンが始まってるし。

って、こんなことばっかり分かるようになってる自分にちょっとうんざりよ。まったく。

空は晴れ渡っていて、気持ちのイイ風がそよそよと流れている。
わたしは、これからどうなるのかな？
そんな風に疑問は募るし、こうなっちゃった後悔もあるんだけど。

「……がんばってみるのも、いいかな？」

蒼の民の集落から飛び出して、守護精霊様に言われるままにあの人を追いかけて。
あの人の弟子になるのは断られたけど、あの人の近くに行けるように。

「うん、がんばりたいな」

あの人がいる場所は、もうわかってる。
あとは師匠に色々教わって、あの人の近くに行こう！

わたしが望んでいた結果じゃないけど、これもいいかなと思えるようになった自分に、ふふっと笑いが込み上げてきた。

わたしの心は、まだまだ曇ってるところももちろんある。
けど、雲間から差し込む日差しみたいに、希望と期待の晴れ間が顔を覗かせはじめているのも確か。

「待ってなさいよ！」

すぐにあなたのもとに行くから。

師匠に弟子入り？してから１０日目。
まだまだ、なんにも分かんないけど。
すぐに一人前になって、マージナルに入るんだから！

ふふふって笑顔がこぼれてるわたしに向かって、「お待たせ」って言いながら師匠がやってきた。
やけに機嫌がイイわたしに、ちょっと目を瞬かせてどうしたのか聞いてくるけど、わたしは無言で首を振った。

「それで、今日は何を教えてくれるの？」

昨日よりも明るい声のわたしに、ますます思案気な顔をするけど、

「まずは基礎からだよ」

詮索はしないで、ただ嬉しそうに師匠は笑ってくれた。

八、わたしと精霊使いの師匠（後書き）

弐ノ巻はこれにて幕になります。
あんまりにもわたしの話が長くなって反省です。幕引きもちょっと無理やり感が否めないのですが……これ以上は長引かせたくないので、ここまでに。
次回は俺の話にしたいと思っていますので、お楽しみに。

ちなみに、弐ノ巻のその後的な話は活動報告にあります。
読みたい方はそちらを～～

壱、緊急指令！　奪還任務？（前書き）

お気に入り、ありがとうございます！！
そして、遅くなってすいません。。。。。

新しい幕、楽しんでいただけると幸いです。
それでは、どうぞ！！

壱、緊急指令！　奪還任務？

「どうして、俺が……」

毎度毎度のことではあるが、俺は悲嘆に暮れている。
最近は途方もない、それ、さすがに無理あるだろう的な“お願い”もなく、平和な時を過ごしていただけに、ショックは大きい。

「俺は、“普通”の人だよな……」

空にため息を吐いたところで、虚しいだけだ。
そして、誰も聞いていないのに言う必要は全くないし、無駄なだけだが……
やはり俺は声を大にして主張しまくりたい！

俺は、“一般人”だ！！！
眷属でも、聖人でも、神子でも、魔法師でも、魔術師でも、魔道師でもない！
無力なそこら辺にいる、普通の、ふつ～～の人間だ！

そう主張しまくっているというのに、彼の御仁方は意に介さないばかりか、無理難題をにっこり麗しの笑顔でごり押ししてくるのだ。
非力で、矮小な人間である、この俺に。
なぜ俺にごり押ししてまでさせたいのか、未だにさっぱりわからない。

「どうしたらいいんだよ……」

途方に暮れた声は、存外一人部屋に反響したが、あっさりと消えていく。
残ったのは、表情筋がぴくりとも反応しない、抜け殻のような俺の間抜けな顔と、

＜早期回収＞

彼の御仁方の第一の従者にして、忠実なる部下である無常なる大天使……に仕えているという、ミニミニサイズですっごいちっちゃい天使？らしきモノ。
今回はことがことだけに、助っ人として連れて行けと押しつけられた奴だ。

＜早く、早く＞

すいすいと眼前で飛び回るのはやめてもらいたい。
思わずぺしりと叩きつぶしたくなる。

……とか思ってても実際には何もしないよ。
どんなにちっちゃかろうが、虫っぽかろうが、俺が逆立ちしたって叶わないし。
人外、しかも次元が遥か彼方の相手に、そんな恐ろしいことができるわけがない。

なんせ、こんなあんたは親指姫ですか？と言いたくなるような姿（なり）をしてても、天使であることには変わりはない。
ってことは、人間なんか目じゃないのだ。
だから、逆らっちゃいけないってのは十分すぎるほど理解している。
けどさ～

「俺は、一般人なんですけど……」

とりあえず主張だけはしておく！

なんで、こんなに普通な俺が行かないといけないんだよ！

今回ばかりは、そっちでなんとかしてくれてもってか、そっちサイドで何とかしろよ！

ただの人間ごときが関わっちゃいけないレベルの話なんじゃないか？　今回は！！

そっちの管理問題なんだから、そっちがなんとかしてくれよ！

恨みがましい視線を向けて、滔々と俺は言ってやったさ！

見事、一般人代表として、正面から立ち向かってな。

拳を握りしめ、訥々と。

普段はしない、熱意を込めて。

言葉に魂を込めて！！

俺は、俺のために！！

＜早くいきますよ！　そして、即座に回収を！＞

しかし、敵は全く俺の主張を聞いてはくれなかったけどね……

とほほ、だよ。まったく。

俺にも予定があるんだぜ。

この調子じゃ今日にでも向かえって感じだけどさ～

「せめて、明日の朝に手続きしてからでお願いします。」

全く聞き耳を持たない相手に頭を下げるのも、なんかイヤだけどさ。

ついでに、頭を下げたところでそれも無視されてるっぽいけど。

「……何て言おうかな」

とりあえず明日の朝にマージナルに行ったら、なんて言って何日かかるかわからない“お願いごと”のための日数を獲得するか？
それを考えるとしますか。

なんか、ミニミニサイズの天使様が横でうるさくって考え事の邪魔で……
ほんと、こいつ叩き落としてやろかな～なんて思いながら、夜は更けていくのだった。

弐、俺と道行不安な先導者（前書き）

遅くなってしまい、すみません！！
そしてお気に入り、評価ありがとうございます！！！
拙作を楽しんでいただけたら幸いです。

弐、俺と道行不安な先導者

「雨乞いの魔法？」

＜そう＞

てくてくと道を歩いている俺とミニミニサイズの天使様。
向かう先は不明。
道は目の前を浮かぶ天使が示し、そのあとを俺はついて行っている。

なんて言うと、なんだが慈悲深き天使が迷い仔のために道を照らしているような、そんな心温まるエピソードが想い浮かべられるが、そんな優しさにあふれた展開は今のところ全っっっっくない。
もう一度言う。
全くもって、これっぽっちも、ぜんぜんナイ！！
むしろ、こいつ天使じゃなくて悪魔なんじゃないか？　と思う場面の数々。
今は、比較的普通な、それこそ整備された安全な道をてくてくと歩いているが、昨日、一昨日は俺に何をさせたいんだと何回言ったことか。

なぜか獣道でもない藪の中に入らされるのは、まだいい。
蜂の巣をわざと刺激してるとしか思えず、そんでもってそれを止めようと全力を振り絞った俺に被害がきたのも、まぁいいさ。よくないけど、いいさ、いいさ！

けどね。なんで魔獣の巣の中、しかも今の時期子育て真っ最中で警戒態勢ばっちり、殺す（ヤル）気満々の森のクマさんとか、森の狩人（主に狩られるのは草食の獣とやわい人間種）の巣の中を通るんだよ！

なんで、広大な湖を泳がせたり、川の中を遡らせるんだよ！
川はひどすぎるだろ！　泳いで向こう岸に行くとかならまだいいけどさ、遡れって何だよ！
激流の中、溺れてるんじゃないかって思える無様な姿をさらした俺を笑ってんのか、ああん？
しかも、流れに逆らってまで泳がされたと思ったら、急に方向展開して今度は一気に流されろとか言われた俺の気持ちがわかるか？

俺を何だと思ってやがる！
ヒトの脆弱さをナメンなよ！

極めつけは、川の先に待っているのは轟轟と呻る盛大な水音。
そして勢いを増す水。
開けた視界。

もう、わかるだろう？
この先に待ち構えてるのなんて一つしかない。
滝壺へ真っ逆さまだよ！！

落ちた先、目覚めた俺は生きていることに感謝しつつ、当然の如くキレた。

天使だからって、全て許されるとでも思ってんのかよ！！
許されるわけないだろが！
御仁方に進言（という名の告げ口）ぐらいするに決まってんだろうが！！

天使を鷲掴みしていた拳を、ギュっギュと握りしめつつ、愚かで阿呆なミニミニサイズの天使様……いやもうこんなバカを天使と言うのも癪だ。こんな奴チビでいいだろう、チビで。

俺は要請された側で、本来ならそっちだけで解決される問題なのに、何故こんなチビに殺されかけにゃならんのだ！

……というキレてチビを握り潰す夢を見たときには、妙に心がすっきりした。

だが、夢ですっきりするのは一瞬のこと。

起きて数十秒もすれば、目の前で寝こけているチビを夢の如く鷲掴みにしたのは言うまでもない。

天使がなんだ！

ここまでされて、許せるほど俺は出来た人間じゃない！

ギュッと力を込めたせいか、苦しさで目が覚めたチビを前に俺は笑った。

うんでもって、死にそうな目に会ったここ2日について、散々お説教……いやいや正当な抗議をしまくった。

その熱いトークは日も昇らぬ早朝から、すっかり太陽が昇ってさらに中天に近づくころまで続き、さらに昼食を挟んで夕方にまで及んだのは、俺のせいではない！

むしろ、俺の熱い魂からの叫びが1日で半日過ぎぐらいで終わったことに感謝してもらいたい！

その成果のおかげか、やっとこさ回避した道なき道。

そして、ウェルカム整備された歩きやすい道よ！

今なら、その素晴らしさを俺が熱く語れそうだぜ！

というテンションの高さも、歩き続けれているうちに下がってきた。

そこで、今回の件についてそういえば何も知らなかったなとチビに振ってみたわけだが。

俺の疑問に、短い返答が返ってきただけで、そのあとには一言も説明もない。
「雨乞いの魔法」ってのも御仁方が言っていただけだ。
詳細なんか聞く余裕も、今回は御仁方からの“情報”も頭に送られてはこなかった。

ってか、「雨乞いの魔法」って何だよ。
盗まれた魔法が「雨乞いの魔法」って、一体……
水不足で悩んでるってことにしても……
いや、そもそも盗む価値って？
水関係に強い魔道師やら、魔法師、やら魔術師を派遣してもらえば……まぁ、“情報”がそこまでないからわかりはしないし、それに。
。。

知らんことを考えるのも馬鹿らしいか。
なので、知ってそうなチビに聞いてみたんだが……

「どうして、その魔法が盗まれたんだ？」

＜盗んだ輩に聞けばわかる＞

「それで、それを盗んだのは？」

＜行けばわかる＞

「どうして盗まれたんだ？」

＜人間が知る必要はない！＞

「……おい」

俺の質問に、何一つ明瞭な答えを返さないばかりか、見下した態度を隠そうともしないチビ。
低く怒気を込め、睨みつけたくもなるってもんだろ？
ここ2日間の苦しみは、半日過ぎの説教ごときで晴らせると思うなよ。
俺の怒りは全く治まってないんだからな。
そんな恨み節を乗せて更に睨みつけてると、チビの身体がピキッと固まり、背中の翼も動きをとめ……
「おちた」
ぽてっと地面に落下した。
ふよふよと復活を果たしたチビはこう言った。
＜実を言いますと、私も知りません。＞
上からの命令だと答えたチビの態度は、随分と好感を持てる。
やっぱ上から見下した態度を取られるよりも、対等な立場が一番だよな。
互いを尊重しあうっていいことだよ。
「それで？」
でも、こっちの態度がそれですぐに軟化するわけじゃないから、多

少ぶっきらぼうになるのは御愛嬌ってことで。
俺とチビとの旅路は続く。
どこに続くのかは、俺には全く判らぬままに。

参、俺と本当の依頼【前編】

ミニミニサイズの天使様ことチビと出逢って7日、チビに示された道を歩き始めて6日が経っている。
俺とチビとの関係は当初と比べると、まぁイイかなって感じだが……

「これから、どうすりゃいいんだ？」

＜わたしに着いてくれば、それでいいのです＞

チビといえども天使は天使ってことなのか。
それともこいつの性格なのかもしればいが、横柄な態度は相変わらずだ。
若干最初の頃よりもよくなったのは、その語気の中にこちらを窺う要素が含まれていることだ。
3日前の朝っぱらからの説教が効いたかな？
それとも、教育的指導のおかげかな？

「それで？」

つんっと澄まし顔のチビは、ついっと俺から離れて前へと進む。

＜ここを抜けます＞

「どうやって？」

間髪いれずに問うた俺に、チビはむっとするが、言わせてもらう。

「どうやって？」

チビの指し示したのは洞窟。
ただし、洞窟は洞窟でも完全に入口が塞がれていて、入ることができない洞窟だ。
隙間なくびっしりと落石で覆われている洞窟を、“洞窟”だと認識できるのは、若干ながら周囲の壁と年月の差があるからだが、それもよくよく見ないと分からない。
この洞窟が落石で塞がれたのは、ここ何カ月とか何年なんかじゃなく、十数年単位なんじゃなかろうか。
下手すると何十年前とかに塞がれたのかもしれない。
じゃなきゃ、苔とか蔦とかがこんなに張り付いていたりしないだろう。
従って、重ねて「どうやって？」と訊く俺は、絶対に悪くないし、間違っていない。
だというのに、

「なんで、そんな目で見るんだよ」

チビの目はメチャクチャ俺のことを見下し、バカにしまくっていた。

＜っこっこここちらから、どうぞっっっ＞

それから数分後、洞窟を覆う岩に手を翳したチビの手が淡い輝きに包まれたと思ったら、ずずずっと鈍い音を立てながら岩が地中へと沈んで行った。
「おおっ！」ってちょっと声が出るぐらいには驚いた。

やっぱ、天使は天使なんだな～。

人間にはできないとは言わないが、俺には逆立ちしたってできない芸当を見せられれば感心もするってもんさ。
やっぱ力あるモノはすごい！
目をキラキラさせて、尊敬の眼差しとかは送らないけど、心の中では一応拍手しておこう。

いや～、こんなすごい力があるのにね～。

つ～っと視線をやれば、

＜わわわわたしの後を、つっ着いてきてください＞

かなりどもりながら、涙目で俺の前を飛ぶチビ。
そんでもって、

「中、暗いけど？」

ぼそっと言った俺の声に、はい～～～っと悲鳴にも似た返事をして明りを生み出し、洞窟を照らすチビ。

うん、教育の賜物だな。

やっぱ、天使様といえども協力者には親切にしないとな。
それに気付いてくれて、よかった、よかった。
数分の間に何があったかって？
いやいや、それは聞かぬが花って奴だよ。
天使様にも見られたくないものとか、聞かれたくないものの一つや二つはあるって。

＜もう、許してください＞

お尻を抑えながら、うるうるとこっちを見るチビなんか知らないよ。
天使ともあろうものが、こんな矮小な地上種、しかもそんな中でも取りに足らない“一般人”に、幼児のようにお仕置きをされて泣いてるなんて！
いやいや、天使様に限ってあるわけないじゃないか。
ね～、チビ助。

＜ううう、こっち、です＞

屈辱的なのか、顔を赤らめながら、それでも最早横柄な態度をしないように気を付けているチビの後を、俺は悠々と着いて行くのだった。

さて、どうしたものか？

俺はチビの後ろを追いながら、考えを巡らす。
というより、やっと考えを巡らせるだけの余裕ができたから、考えることにした。

これから、どうするか？

おっと、そういえば、今回の俺のおかしな点に気付いているだろうか？
今回俺が、チビといえども天使を相手に強気でいるという、このあり得なさに。

実を言うと、俺がこんなにも強気な態度を取れるのには、裏がある。

思い出すのは3日前の真夜中。
お説教地獄をチビにブチかますまで、後数時間。
チビに振り回されて死にかけて、疲労困憊。
もう、一歩も動けん！　ってことで、泥のように眠りについたはずの真夜中。
俺は不意に目覚めた……のではなく、

＜おはよう＞

極上の笑み。麗しい美声。
けれど、決して優しくも何ともない御仁方に、俺は、無理やり起こされたのだ。

「真夜中におはようも何もありませんが……」

御仁方相手に、こんな皮肉も言いたくもなるぐらい、本当に優しくない起こされ方だった。
何せ、疲労困憊で身体も精神も睡眠を欲求し、それこそ前後不覚、失神同然で寝ていたのだ。
それを御仁方に脳と精神を揺さぶられて、起こされたんだから機嫌の一つも悪くなる。

頭いて～
身体いて～
全然、回復してない～

って感じて、起こされた今も身体も精神も赤信号を送っている。
けれど、御仁方の気配のせいで本能的な機能さえ凍りついているから、たまったもんじゃない。
本能を凍結するぐらいの強制力に、恐怖心よりも失望感が募る。

苛立ち？
そんなものなんて、ないない。
御仁方に苛立つほど、俺は人間捨ててるわけじゃないし。
御仁方に苛立てるのは、御仁方と対等かそれに近しい存在じゃないと無理でしょ。

＜いや、我ら相手に皮肉を言えるのも、充分ヒトの枠外だがな＞

小さく呟く大地の御仁のセリフは、聞こえなかったこととして……

「それで、どういった御用向きでしょうか？」

見れば、ここはいつもの空間だ。
一体どうやって？
などと考えても意味がない。
この白い空間に呼ばれた、それの意味だけがわかればいいだけだし。
そんで、早く聞いて、早く寝たい。

＜ふむ、ちょっとは急に呼ばれて、びっくりしてくれればよいのにの～＞

＜ほんとうに、冷めちゃって。あ～あ、昔はかわいかったのに＞

＜慣れられてはつまらんな＞

なんですか、御仁方！
こんな風に慣れるぐらいに呼ばれなきゃ、もっと可愛げある態度の一つもできますがね～。
頻繁に呼び出されりゃ、いくら“一般人”の俺でも慣れますって！

人間は、慣れる生きモノなんですから！
それと、これとは別として……

「あの助っ人の天使様、何なんです？
俺を殺す気、マンマンなんですけど？」

ちょっと愚痴るのは情けないけど、いい機会だ。
ここ2日間の苦境。
死にそうな目に遭う頻度の高さに、流石に御仁方への口も刺々しくもなるってもんさ。

＜あ～。見ておったよ。＞

そう言う御仁方は苦笑。
俺の愚痴を寛大に受け取っているのかと思えば、その視線は何やら申し訳ないと謝っているようで……
思わず、こっちが目を白黒させてしまう。

＜実はな……＞

そうして真夜中に起こされた俺は、今回の本当の“お願いごと”を聞かされることになったのだった。

四、俺と本当の依頼【後編】

＜あの天使（娘）は今年で５００になり、大人の仲間入りをするのだがな……＞

そうして語り始めたのはチビについて。

＜ただね～なんというか……ね～＞

＜うむ。なんというかだな～＞

けれど、いつも余裕綽々、悠然と語りかける御仁方の歯切れがどうもよくない。

朗らかでいて、覇気のある気配はいつも通りといっちゃ～、いつも通りだが、なんとなく気配が弱い感じがする。

そんな雰囲気を受けたら、なんとなく警戒心も湧いてくるって。

聞きたくない！

いや、聞いたらダメだ！

心の中でそう俺が強く思っても、まぁ、結局は俺に拒否権なんかないんだけどね。

その証拠にほら。

御仁方は俺の心の裡を知ろうが、お構いなし。

お互いをちらちらと見て、誰が話すのかを擦り付け合ってたりする。

そんな姿を見りゃ～

「余計、こっちは不安になるんですけど……」

ぼそっと主張した俺の声は、やっぱり御仁方には無視されましたよ。
ええ、見事なまでにね！！

そうして、待つこと暫し。

＜あのこに先導されて、どうだった？＞

結局誰が言うのか決着が着かなかったのか、こっちに御仁方は視線を向けた。
そんで、俺はというと……

どうだったかって、ね～

「正直、何度死ぬかと思ったことか。
殺されるんじゃないかって本気で思いましたよ。」

ええ、ほんとにひどかった。
藪に入れば身の丈十数メートルはあろうかという巨大蛇（おろち）に丸のみされそうになるわ、巨大雀蜂（ジャイアント・バッチ）の大群に追いかけられるだけでも死にそうなのに、殺人蜜蜂（キラー・ビー）の大群にまで追いかけられたら、普通に死ねるだろ！
子育て真っ最中の森熊（グリーン・ベア）に引っ掻かれそうになり、狩人狼（ハント・ウルフ）に飛びかかられそうにって湖に入れば、水生吸血蛭（ウォーター・ブラッド）が大挙して襲ってくるし。
挙句の果てには滝に真っ逆さまだ。

こう考えると、よく生きていられたもんだと自分を褒めてやりたい！

＜今回ばかりは、申し訳ないわね～＞

つらつらと地獄の2日間を思い出していたところ、御仁方の気まず

げな謝罪が届いて俺は大きく目を見開いた。

え？　何で驚いてるかって？

だって聞こえただろ？

御仁方が、“申し訳ない”なんて、口にしたんだぜ！

驚いてもしょうがないだろう～が。

たかだが、人間なんかに御仁方が口先だけでも謝罪なんて！

これが、平静で聞けるわけがない。

＜今回ばかりは、しょうがないのよ～＞

そんな驚きまくりの俺に、ほほほっと艶やかに笑いながらも、語気は弱い。

本当に、今回は何なんだろうか？

俺がますます首を傾げ、これから何を言い渡されるか身を強張らせたのは当然なんじゃないかと思うんだが、どうだろうか？

＜あの娘ったら、上の言うことは聞くけどそれ以外は全然ダメ＞

＜自分がしたくないことはやらないでは、これから先が不安での～＞

「具体的には？」

＜あなたが体験してるでしょ～＞

＜導き手であるはずなのに、ちっとも導く気がないとしか思えん行動だったろう？＞

＜さっきお主が言った通り、これでは天使として人を導くのではのうて、人死にの天使になろうの～。“死の導き手”という天使の誕生にはなろうがな～＞

困った困ったって、ちょっと！
シャレにならないですって！！

ここ2日間のザ・地獄体験ツアーをして、導き手？
いや、確かに“死の導き手”だったらしっくりきますけど、それ天使じゃなくて死を司る神の仕事ですから！
っていうより、寧ろ悪魔だ。あれは人を破滅に追いやる小悪魔の所業だ！
神様サイドから、悪魔サイドにでも転属させるんですか？
前代未聞ですよ？

＜そうさせないために、お主にお願いをしたいのじゃ＞

ようは、新米天使の実地訓練&指導教官を勤めろと？

御仁方から言い渡された本当の“お願いごと”を総合すると、そうして欲しいらしい。
それに思い当った瞬間、ぽかんと大口を開けてバカ面を曝してしまったが、俺がそんな間抜けを曝したのはしょうがないと思う。

御仁方よ、尊い貴方がたが何故に人間、しかも魔法師でも魔術師でも魔道師でもない、“普通”が取り柄の俺にそんなモノをさせようとするんです？

怪訝&やだやだオーラを若干出してみる。
いや、だってね～。
今回のは死と隣合わせで、安らぐ時間がないんだよね。
御仁方のお願いでも今回ばかりは遠慮したい。

話を聞く限り、俺の手に負えるような性格じゃなさそうだし。
死神代行……寧ろ小悪魔？　みたいな奴に行く先を導かれたら、それこそいつ本物の死の神様や悪魔とご対面するか、わかったもんじゃない。
この2日間の地獄体験ツアーから、普通の道をいつどんな時でも、いかなる場合においても選択させて歩かせることができるようになるまで、なんて。
どんだけ大変で、無謀なことか……
チビの上司も御仁方もできなかったことに、俺を挑戦させないでくださいよ！

そんな感じで久方ぶりに、本気で断りをいれたんだけど……

そんな真剣な目でじ～っと見続けるのはやめてください！
なんで、うんともすんとも言ってくれないんですか！
いや、ほんとそろそろ勘弁してくれません？
背筋が凍りつきますから！

『ピキッ！！！』

ひ～～～！！
いま、ピキっていった！　ピキって～～～
背骨が変な音出し始めてる～～

「やります！　やればいいんでしょ！」

もう、ヤケクソで言い放ったとたん、

＜期待しているわ～＞

＜びしばし、やっておくれ＞

＜手加減は無用！　好きにしてくれて構わぬからな！＞

よろしく～と声を響かせ、御仁方は去って行った。

もう、清々しいくらい爽やかな風を俺に吹き付けながら。

最後に御仁方が風にまぎれて

＜あの娘（こ）の権限は制限してあるわ＞

＜お主には逆らえぬようにもしておいたぞ～＞

そんなちょっぴりの優しさがなければ、俺はきっと絶望の中で息絶えていたかもしれない。

伍、俺と秘境の地底湖

「おっ、出口か？」

そうこうしているうちに、出口が見えてきたようだ。
チビが洞窟内を照らしているとはいえ、外の明るさを感じるとほっとする。
俺は探検が趣味みたいな冒険ヤロウじゃないから、余計ほっとるんだよな。
だから、

＜見ればわかるでしょ！＞

ツンっと澄まして可愛げのない態度を取られても、大丈夫。
怒ったりはしないよ。
ただ、

「後でお尻ペンペンな」

＜えっ！！＞

指導員的立場として減点ってことで、ね。
さっとお尻隠してもやるっていったら、やるから。
どうして、お仕置きされるのかわからないとか言い始めてるけど、

「それがわかんないようだったら、追加かな……」

出口に向けて歩く道すがらつぶやく俺に、チビの顔が青ざめていたのは、きっと光の具合によるんだろう。

うん。そうに決まってる。
天使様ともあろうものが、人間の、しかも“一般人”の俺なんかを怖がったりなんかしてないよな～。
ね～、天使のチビ助。

軽快な足取りで進む俺を、ちらちらと窺いながら先へと進むチビ。
俺はニコニコ、爽やかな笑顔をチビへと向ける。

「なんて邪悪な笑顔なの！」

小声でチビが言い放った一言に、俺は若干傷ついたがそれに文句を言う余裕はなかった。

「すごいな～」

進む先、一瞬白んだ視界が晴れる。
俺の視界に外の景色を映し出されたのだ。
そこに広がっているのは……

「って、ここ外じゃないじゃないか」

一面に広がる湖と天井をびっしりと埋める水晶。
蒼なのか、碧なのか。
咄嗟に何色なのか判断ができない。
ただ、凄まじいまでの絶景が目の前を埋め尽くしている。

どこから光が入っているのかと見れば、どうやら壁にびっしりと生えている光苔（ひかりごけ）が湖と水晶に反射されたために、普通ではありえない絶妙な明りが生まれているようだ。

その光景は、筆舌に尽くしがたい。
憎まれ口を叩こうにも、それを言おうとする口は完全に動きを止めた。
この光景を前に、つまらない説教をするのもバカらしい……

そんな風に思う。
確かに思うんだけど……な～～～

＜ここに、あります！＞

美しい景色に陶然としていた俺の前を、ふよふよと行ったり来たり。
俺が諦めて目線を合わせれば、実に堂々と胸を張って宣言するチビに俺はげんなりした。

人が感動しているんだから、少しぐらい付き合ってくれてもいいじゃないか？
そう思うのは、ヒトの勝手ってもんなんだろうか？

俺のそんな思いは当然無視され、チビは＜ここ、ここ＞としきりに言い募っている。
それは別にいいんだが……

「それで、ここってどこだ？」

＜それは、あそこです！＞

とりあえず、件の『盗まれた魔法』がどこにあるかを聞けば、天井に幾つも張り付いている水晶の一角を指差された。
確かにその大きすぎず、小さすぎない水晶の中にはループを描くよ

うに術式が回っている。
ちらちらと青く、赤く光る様は、一度目に着くとどうしようもなく違和感を覚える。

淡い幻想空間に紛れ込んだ“異物”。

そうとしか見れなくなるような、人工的な不自然さが……いや、もう正直に言おう。
実に見え透いた、見つけてくれと主張し過ぎな感が拭えず、御仁方の手抜き具合に俺は疲労を感じる。
いくらなんでも、酷過ぎないか？　とは思うものの、時間がないのかも……と前向きに考えたい！

厭きてきたからとかだったら、目も当てられない。
それが一番可能性としてはありそうな気がするが、そうではなければいいなと、俺は小さな希望を捨てたくはない！！

7日間、俺とチビの動向を見ている御仁方は、どうやら相当面倒くさくなったのではなかと思いたくなるような。
滅茶苦茶分かりやす過ぎる代物を前に、俺はそっと目尻を押さえた。

それから数瞬。
まぁ、俺は御仁方の“お願いごと”という名の任務を遂行できりゃそれでいいや！
と半ば以上投げやりな気分で立ち直りはしたが、はてさて、チビの教育はこれで完了でいいのかね？
これ以上長く“お願いごと”に付き合うのも時間的に厳しいので、俺としては助かると言えば助かる。

「……それで？」

＜それでって？＞

「それで、あれをどうするんだ？」

人間種で、その中でも“普通”に分類されている俺に、御仁方の御心情など測れるはずもないので、取りあえず違和感の原因、光のループを描く水晶に思考を移した。

俺はこのことについては、何も言われてないんだよな。
回収しろってことは最初に言われてたけど、無理でしょ。

＜回収するに決まってるじゃないですか＞

「だから、どうやって？」

＜パパッと回収です！＞

「誰が？」

＜あなたがですよ！＞

「無理」

俺の身長の5倍以上ある天井から垂れ下っている水晶。
そしてその下にある、恐ろしい透明度を誇る地底湖。

観賞には持って来い！　秘境の神秘をどうぞご堪能あれ！　的な絶

景観光地としては最高のロケーションではあるが、この自然の産物の中に挑むだけの勇気はない。
そんな無謀さがあれば、今頃冒険者の端くれぐらいにはなれただろう。
そして、実際の俺はしがない準公務員。
しかも、事務要員であって戦闘要員ではない。

「普通に、無理だろ」

俺の発言は予想してしかるべきだと思うわけだが……

「なんだ、その顔は？　不甲斐ない奴みたいな目で、何で見てるのかな？」

俺より能力が断然高いくせに、わざわざ俺にやらせようとしているところからして間違っていると思うわけだが、何故そんな顔をする！
馬鹿にするぐらいなら、何も言わずにさっさと自分で行けばいいのだ！
俺はそれが非常に、ひっじょ～～～～に頭にくる！！

＜そっ、それ……その手は、なんなんですか～～～＞

うん？　何って？
俺は何のことやらと笑いながら、手をワキワキ。
チビを捕まえるべく行動を開始。

そんな俺を見て、わーわー言いながら慌てて逃げようとしているチビ。
本来、回避速度は俺なんかがついていけるようなレベルじゃないんだ

が、悲しいかな。
チビは知らずとも、俺は知っている。
チビが御仁方に動きを制限されていることを。
だからこそ、

「ほらよ」

ひょいっと木の葉を掴むよりも簡単にチビは俺の手に収まった。
俺の手の中のチビは、哀れっぽく目に涙をためている。
それは万人の心をギュッと鷲掴みするような、罪悪感さえ込み上げる表情。
それを目にすると、

「許してやる、なんて誰が言うか！！」

そんな、うるうるな目を向けたって俺には全然効かないし、説教の一つもしないで手を離すこともない！
天使の涙目に良心の呵責なんて、今さら湧きようもないのだ。
この7日間で湧く余地が残っていれば、俺は今頃、善意と万人への博愛を常とする高名な聖職者にでもなっているだろうさ。

教育的指導なら、行動制限が働かないって素晴らしい。
つまるところ、俺の行動全てが教育的指導って受け取られてるってことだしね。
ただ、ぺしぺしと教育的指導をしながら思うのも何だが……

こいつの周りって甘い大人しかいなかったのかね？

ここまで事あるごとに指導が必要な天使ってのは、おかしい。
相当な甘ったれだから、こんなことになっているのだと思うのだが、

あの御仁方の御前に侍る栄誉を賜るべく切磋琢磨しているはずの天使達が、そんな愚かなことをするとは思えない。

何かが起こっているのか？

俺には所詮、天上人の事情など分かるわけもないのだが、関わってしまうと少しばかり気になりはする。

このチビだけだけが、こうならまだいいんだが、そうではない場合は？

俺はぺしぺしとお仕置きをしながら、小さく身震いした。

まだ教育中の天使たちまでもこんな状態だったら……

なんて、恐ろしいんだ！！！

教育的指導をしながら、俺は切にチビだけが例外であり、そのほかはまともな天使様に育っていることを願わずにはいられなかった。

「今後ともよろしくとか言われたら、幾らなんでも泣き喚くぞ。」

わんわんと五月蠅いチビに、泣きたいのはこっちだよと俺はため息をついた。

六、俺と暴虐の天使？

結果的に言うと、『盗まれた魔法』は俺が回収する羽目になった。

「お前、それでも人の上位種の天使なの？」

ほんの数時間前、俺を見下していた天使様ことチビを、今度は逆に俺が憐れみを目に見下している。

何故こんなことになったのか。
それにはこんなわけがある。

俺の教育的指導で目を潤ませていたチビだったが、指導が終われば
それまで。
すぐさま涙をひっこめ、いつもの如くの態度。つまり、上位種らしい高圧的な態度に戻った。

＜あなたができないなら、しょうがないですね！　そこで私の勇士でも見ていらっしゃい＞

とかなんとか胸を張って宣言。
すい～～～っと浮き上がったチビは、至極簡単にピカピカ光っている水晶の元まで到達した。
それ自体はいいと思うのだが、虚勢を張っているとありありとわか

る後ろ姿に俺は関心半分、呆れ半分でやれやれと首を振った。
これが虚勢のままなら可愛いもんだけどね。

＜ふんっ＞

痛みに涙し、あっさりと謝っていたかと思えば、もうこれだ。
上位種としての自尊心は天上知らず。
自分より遥かに劣る種族に泣かされたことは、すでにチビの中では終わったこと、もしくは「なかった」ことになっているのだろう。
その証拠に、振り返って鼻を鳴らしたチビの瞳は、思いっきり俺を見下していた。
その視線にむっとはするが、そのことは脇に置いておこう。

ここで言うことはただ一つ。
チビの余裕は所詮ここまで。
そっから先が問題だったのだ。

＜えっ？　ウソ！！！＞

驚愕の声がチビから零れた。

チビの小さな手が水晶に手を伸ばされ、水晶に触れる。
その瞬間、バシッと火花が散った。
何事かと見れば、水晶の周囲には保護結界が張られているようだ。
チビも気付いていたようだが、保護結界を舐めていたのだろう。
思いのほか堅く、強固な結界に阻まれている状況に素直すぎるぐらい素直に反応している。

＜なんでなんで～～～～＞

そんでもって、あんまりにも手ごわい結界に挑み始めて数分で半泣き状態。
それからぼんやりと俺はわ～わ～喚きながらパチパチ、バチバチと火花を散らしているチビを見ていたのだが。

厭きた。

ここまでの道のりで溜まりに溜まった疲れもあったのだが、それよりもとにかく厭きた。
ということで、光苔が密集している地面に座りこんだ。

おお。いいね～～

光苔は思いのほかふっくらとしていて、疲れた体には心地いい。
上等なベッドとまではいかなくても、安宿のベッドよりは遥かに柔らかかった。
光ってるっていっても目に優しい光加減もｇｏｏｄ！
ぽふっと寝転がれば、あくびが止まらず、俺はその衝動に逆らうことなく

「おやすみなさ～い」

今や泣きながら水晶に挑んでいるチビを尻目に、目をつむり健やかな眠りの世界へと旅立った。

ああ、ほんとにいい気持ちだわ。
この光苔、持って帰ろうかなとか思いながら。

……数時間後　……

＜うわ～～～～ん。起きてよ～～～～＞

耳元であんまり五月蠅い泣き声を聞かされ、俺は心地いい夢の世界から蹴り出された。
不機嫌顔で横を向けば、涙でぐちゃぐちゃの顔をしたチビのドアップ。
事情は聞くまでもないが、俺は不機嫌顔のまま一応聞いておく。

「なんだ？」

＜あれ、あれ～～～～＞

指差す先は例の水晶だ。
水晶は依然として不自然に光り輝いていた。

＜あっ、あれが～～～～　とっ、とれ、ない、よ～～～～＞

わんわんと泣きながら、必死に言い募る姿は最早上位種の天使の姿ではない。
ただの子どもだ。
子どもが出来ないことに癇癪を起して泣いている姿にしか見えない。

＜あれ、あれが～＞とか＜取れない、取れない＞と泣きじゃくる姿を見ると、こいつ本当に５００歳なのだろうかと疑いたくなる。
いくら長命種であろうとも、俺よりも数十倍も長く生きている癖に、何故に泣き方は幼児なんだか？

寝起きの不機嫌も呆れに変わるぐらい珍妙な姿に、俺はただため息しか出てこなかった。

「よっと。これでいいか？」

不自然な光り方をしていた水晶を片手に、チビの前に差す俺。
あれからすぐに、「取りあえずやってみるから」と泣きわめくチビを宥めたわけだが、意外や意外。
チビに俺を浮かせるために術をかけさせ、水晶に近づくとポロリと勝手に落ちてきた。
しかも、ご丁寧に保護結界ごと。

＜……＞

「おい。お～～～い、起きてるか？」

すんなり片手に収まった水晶を手に、浮遊術をかけてもらって1分と経たずに戻ってきた俺に、チビはぽかんと目を開けたまま固まっている。
チビの前でひらひらと手を振ってみるが、無反応。
回収できたよ～。よかったね～これで帰れるからね～と幼い子どもに言うように……
まぁなんだ。完全にからかい口調で言っても無反応。

こりゃ、どうしたもんかね？

なんて思いつつ、これで俺の任務は終了。
これで、やっと帰れる。

けど、こっからどうやって帰るかな～とかなんとか考えていれば、か細い声が耳に入った。

＜……なんで＞

「うん？」

聞こえないな……なんて思って、訊き返すんじゃなかった。

＜なんで、あっさり、取れるのよ～～～＞

耳にキ――ンと来る甲高い声が、凶器となって俺の頭蓋を揺さぶった。

痛い！！

ひたすら、痛い！！！

どっから声を出してんだよ？

やっぱりお前は天使よりも悪魔向きなんじゃないか？

癒しの声とか、天上の調べとか天使の声は言われてるのに、お前のそれは凶悪だぞ。

他の天使たちと造りが違うんじゃないのか？　色々と。

チビの凶器（こえ）のせいで、耳鳴りと頭痛。貧血時のように白んだ視界に、ふらつく体が回復するまでには、若干の時間が必要だった。

この仕打ちにどうしてくれようか！

なんて俺は思っていたわけなのだが、何とか全ての症状が回復に向かった時には、チビは俺の足元にべったりと座り込んで

＜ひどいよ～～～いじめだよ～～～～～なんで～～～～～＞

わけのわからんことを言いながら泣きじゃくっていた。
対する俺は最早怒る気力すら湧いてこない。

「なんでって言われてもな～」

そりゃ、御仁方に聞いたらいいんじゃないか？　と俺は言いたい。
言ったら御仁方に何か言われそうだから言わないけどさ。

さて、これから俺はどうしたらいいんだろうね？

泣きわめいているチビは、今俺が何を言ったところで聞きゃしない。
……というよりも、聞こえはしないだろう。
泣いているのに精一杯で、外の音には無反応。

待つか。

仕方がないが、俺には待つしかどうしようもない。
片手に収まっている水晶を眺めながら、俺はさっきまで寝床にしていた光苔のベッドにどかっと座って待つことにしようと、チビに背を向けた。
それが、間違いだった。

＜赦・せ・な～～～～～い＞

「は？」

声に振り返れば、俺の後ろから凶悪な閃光が一瞬にして放たれていた。
その圧倒的な力は、たかだが脆弱なヒト種に向けるには過剰な光条。

死の光線が視界を埋め尽くし、俺へと一直線に向かっていた。

「そんなバカな」

今、著しく能力が制限されているチビから放出できるレベルの力ではない。
俺の否定したい心とは裏腹に、どこをどうしたら可能にしたのか。
純然たる破滅を呼ぶ音が確かに俺へと迫ってきていた。

迫る光はさながら夜闇を切り裂く一条の朝日のように美しいが、それは暴虐の光。
現に俺とチビとの間にあったわずかな距離を、光苔を瞬間的に無に帰すどころか、その下の堅い地面さえも消滅させ、ついでとばかりに巨大な水晶を巻き添えにして破壊の限りを尽くしている。

そんなばかな……

たかだか水晶に閉じ込められた魔法ごときに、何故こんな即死レベルを遥かに超えた力を振るわれているんだ？
なぜ、俺がこんな目に遭っているんだ？
そもそも俺、全く悪くないのに……
なんで？

死の光線が到達する数瞬で色々疑問は浮かぶ。
だが、最早俺にはどうしようもない。
この状況をなんとかできる起死回生のアイテムがあるわけでも、これを避けられるだけの身体能力も、力もない。
俺は普通の人間なわけだから、この先に待ち構えるのなんてただ一つしかない。

「恨みますよ……」

ただし、結果の先で待っているだろう御仁方には、たっぷりと愚痴りますけどね。

六、俺と暴虐の天使？（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

御意見、ご感想、要望などありましたら、よろしくお願いします。

七、俺と任務強制終了？

視界は真白。
焼きついた閃光が遂に俺を呑み込んだのか。
そう思ったのも一瞬。

＜大儀であった＞

俺の一生は幕を閉じたと意識が遠くなったと思ったら、俺は馴染みの場所にいた。
そのことにちょっと呆けてしまったが、

「これで、任務終了ですね」

すぐに立ち直って視線を上に。
そこには見慣れてはいけないはずの光景がある。

＜少しは慌ててくれてもいいのよ～＞

＜それより、もっと呆けていてもいいぞ。滅多に見れぬしな。＞

＜それよりもじゃ。感謝感激雨あられ、泣いて妾の胸に飛び込んでもよかろうに＞

何ですか。それ。
慌ててもとか、呆けてもはまだしも。
最後のはないでしょ。最後のは。

「どこのどいつがそんな恐ろしいことができるんですか。
そんなことしたら、よくて地上種から天上種に強制チェンジ。運が悪けりゃ魂が昇天するじゃないですか。」

まぁ、あれだ。
この状況ならこれしかないんですよ。
むしろ、こうなってくれないと困る。

俺がいるのは、いつもの如く広がる神聖さあふれる白い空間。
その神聖さを凝縮し、さらに磨きがかかりまくって超然と、そして一層神々しい気配を放出している御仁方の微笑み。
首が痛くなるような大きすぎる姿もいつも通り。
もうなんか、馴染み深い御仁方の姿に密かに安堵の息を吐く。

いつもなら不満の一つも言いたくなる強制移動だが、今度ばかりは助かった。
この空間に呼ばれなければ、今ごろ五体満足どころか、木端微塵になって俺がいたという痕跡すらなくなっていたはずだ。
見慣れた空間、いつも通りの御仁方にこんなに安心する日がこようとは思いもしなかった。

ただ、今日はいつもの見慣れた光景の中に、ちょっとした違和感がある。

「……磔（はりつけ）ですか？」

御仁方と俺の間。
本来なら風を捉えるべく広げられる両翼は、虫の標本のように不自然に広げられ、両手は万歳でもしているかのように上へ。両足はぴ

ったりとくっつけられ微動だにしない。

白い空間に場違いな雰囲気を醸し出しているのはチビこと、最初に会った時からの手のひらサイズではない。
通常形態に戻った一人の天使の姿がそこにはあった。

その気配は共に旅をしていたときとは違い、明らかに巨大な気配をひしひしと感じる。
ついでに、自由の効かない四肢と両翼の代わりのように俺にぶつけられる殺伐とした気配も相当なものだ。
だが、如何せん今にも泣き出しそうな涙目で、しかも若干助けて欲しそうに見られたら全く恐怖なぞ感じはしない。

「しっかり、説教でもされてろ」

寧ろ小言の一つ二つは言ってやりたくなる。
けど、俺はもう何もしませんよ。

小言を言うのも、説教をするのも、教育的指導をするのも、もう俺の仕事ではない。
この空間に呼ばれたのなら、俺の仕事は終わり。
晴れてチビとはさよなら。通常業務に戻るだけだ。
これから先はたっぷりと御仁方に叱られたらいいのさ！

そう、俺は心の底から思っているわけだが……

＜あら？　もうこの娘にお説教をしてはくれないの？＞

＜これから先もばんばん叱ってもらって構わんぞ？＞

＜寧ろこれから先も指導しろって感じ？＞

「いやいやいや。それはないでしょ！！！」

御仁方が衝撃発言をしやがった。
それはないでしょ。マジで勘弁してくださいよ。

「もう、こっから先はイヤですよ。マジでイヤです！
俺、今さっき殺されてるんですよ。しかもそいつの八つ当たりで！！」

本当に今度ばかりは勘弁してくださいよ。
これから先も任務続行とか、俺に何回死ねって？
毎回助けてもらうとかでも、死にかける度に俺の寿命縮むから！
天上界の不始末を俺を使ってなんとかしようとするのも、よしてください！

＜ふむ。不始末とな……＞

っっっう！
言いすぎたか？
いや、しかしこれは俺の生死を左右する重大事項。
心の中だけじゃなく声に出しても言っとくべきか？

＜まぁまぁ～。そんなに気合いを入れなくてもいいわよ～。わたしたちも今回ばかりはね～＞

＜うむ。不始末というのは正しい＞

＜おぬしの口から我らに言わずともよいよい。

“心声”と“声”ではおぬしにかかる重さが違う故、おぬしが辛かろう？＞

よかった。

俺は御仁方の言葉にほっと息を吐いた。

俺みたいな地上種が天上を突き抜け、絶対的な立場におられる御仁方に対して直接的な非難を口するのは、正直なところ精神的な圧力が半端ないのだ。

普段の軽い感じなら平気だが、いざ覚悟を決めて“ここで”口を開いて非難すればどうなるか？

よくて一週間は昏睡。目覚めても一ヶ月は体の自由が効かない。悪ければそれ以上。

そこまでに至らなくてよかった。

主張は大事だが、一ヶ月近く倒れたらマージナルで仕事できないし。倒れてる間に退職扱いとかならまだしも、変な方向にいってたらシャレにならん。

神殿関係とか、聖域関連とか。その辺に移動させられたら……

＜あら。それもいいわね。＞

「いえいえ。よくないですから。神殿とか聖域の連中に、睨まれまくってますし。」

＜そうなのか？　けしからん奴らよのう～＞

＜我らがなんとかしてやろうか？＞

「いえ。大丈夫です。」

御仁方の何とかするってのは、天罰云々とかになりますよね？
そんな大きな力、天災レベルの話じゃなくなりますから。
しかも、俺が睨まれてるそもそもの原因って……

っと、何か話がズレたな。

「それで、俺はもうそいつの面倒はみない方向でいいんですよね？」

＜うむ。残念じゃがな＞

＜あなたに頼んだ方がさっさと矯せ……じゃなくて成長するでしょうけどね～＞

＜なに。後１００年、２００年かけてじっくりするしかあるまいよ＞

ははは、うふふ、ほほほって笑う御仁方。
その笑顔は完璧だ。
しかし……

ああ、あいつ終わったな。。。

中空に蝶の標本よろしく磔（はりつけ）されている、元チビの天使見習いはぼたぼたと涙を落としている。
蒼褪め、血の気が引いた顔を滑り落ちる水滴は留まることを知らない。
涙腺が壊れているんじゃないかという勢いで、滝のように流れている。
その姿は哀れを誘うが……

うん。俺は同情なんかしないし、憐れんだりもしないぞ。
あいつは自業自得だ。

それに、自分のためだけに流している涙なんて、なにかを思う価値がない。
勝手に泣いて、泣いて、泣いて、泣き続けるがいいさ。
願わくばこの先何十年もそうしてくれても構わない。
そうすれば、俺が生きてるうちは地上に降りてきたりはしないだろうしな。

冷たいと思われようが、非道だと思われようが構わない。
俺は7日間行動を共にしたチビを見上げながら、心から思うんだ。

どうか、二度と俺の前に現れたりしませんように。
そして、地上に降りてきませんように

ってな。
偶然にしろ故意にしろ、死にそうな目に遭うのもどうだろうとは思うが、まだ何とか対処する。
けど、見習いといえども天使は天使。
その膨大な力を殺意のあるなしに関わらず向けられるなんて、もう無理。
癒しとか慈悲の力なら構わないが、あいつはそんな力を向けたりしない。
向けるとしたら破壊の力。
そんな危険な奴には、もう二度と遭遇したくはないよ。

多少性格が改善されようが、あいつの本質はそうそう変わりはしないだろうし。

上辺が殊勝になってようが、気に入らないことがあったらさっきみたいに爆発。
八つ当たりで殺されるなんて、冗談じゃない。
地上の平和のためにも、俺の平穏のためにもぜひとも降りてきませんように。

そう真剣に願いながら、俺は御仁方の微笑みに涙する元チビに、氷点下の視線を向けるのだった。

八、俺と要らない御褒美？

もう、俺の出番は終わったからこれで帰れるかなとか、帰ったらどんだけ仕事が溜まってんだろうとか顔を青くしながらも緩んでいる俺だったが、おかしなことに俺はまだこの空間に留められている。そのことに首を傾げていると、頭上から朗らかな声がかかった。

＜そうそう。これは貴方に御褒美としてあげるわ＞

「これを、ですか？」

涙目で睨みつけてくる、磔天使を一切無視したいつも通りの御仁方と俺。

そんな御仁方の一柱、水の御仁が示したのはルーンが巡る水晶だ。

「正直どうでもいいんですけど。」

＜そう言わずに受け取って頂戴。＞

にこにこ笑顔の麗しの水の御仁。

その笑顔は酷く眩しくって……

正直、何かを企んでいるようにしか見えん。

＜その中身、かつて“盗まれたモノ”であるのは確かなのよ＞

疑いの目で見る俺に、にっこり笑顔で語る御仁。

俺はその笑顔に若干引きながら、手元の水晶をもう一度“見て”み

る。

水晶の中を巡るルーンをよくよく見れば、なにかしらを“封印”するためのものだというのは解る。
ぐるぐると動き回るルーンは相当に手の込んだもので、少なくとも今の世でこのルーンを施せる者は皆無だろう。
ヒトには過ぎたルーンであり、施すことが到底不可能な類だ。
その精巧さ、そして緻密さもそうだが、使われている術式自体も解析不能。
ヒトという種がこれに手の届く日は、当分来そうにない。

この封印のルーンを施せるのは、それこそ上位種と言われるような天使とかか？
まぁ、御仁方ならお茶の子さいさいレベルではるけれど、まさかね～。
御仁方が施したなんて……

＜綺麗にできてるでしょ。随分昔にしたのよ。それ＞

「はい？」

簡単そうに見えるように小細工もしたから、結構大変だったのよとか言わないでください！
何ですかそれ？

「貴方がしたのなら、全然盗まれたモノじゃないじゃないですか！
何が、盗まれたですか！」

＜そんな呆れたような目で、そんなこと言わないで頂戴。地上から取りあげたことは事実なのよ。

つまりは、地上からは“盗まれた”って言ってもおかしくないじゃない？＞

「何ですかそれ？」

＜若気の至りというのかしら？
ちょっと～むかっとしたから、地上から強制引き上げして～ひょいって封印しちゃったのよ＞

＜相当にやんちゃだったからな＞

＜そうよの。アレには手を焼いたの～。妾も相当腹を立てたこともあったしの＞

＜あのときは大変だったわい。諌める方のことも考えて欲しいぐらいだったからな＞

ほほほ。ははは。うふふっとか何昔を思い出していい気分になってるんですか！
ちゃんと説明してください。
何かイヤな汗とか出てきちゃってるし、この水晶を持ってるのが恐いんですけど。

＜恐いことなんてないわよ。あなたなら＞

そして、いつも思うんですが心の声も拾わないでください。。。
ついでに、脆弱な人間になに超過大評価をしまくってんですか！！

＜まぁまぁ。それでね……＞

「って、スルーですか？　進めちゃうんですか？」

＜それの中身知りたくないの？＞

「いえ。知りたいですけど。」

＜じゃ～黙って聞いていなさい。それはね……＞

そうして始まったのは遥か昔の物語。
御仁方からすれば少し前の。
けれど俺みたいな地上種にとってはお伽噺レベルを超えた、神代の物語。

ある　ところに　かみさまが　いました
その　かみさまは　うまれたばかりの　かみさま　でした
その　かみさまは　……

そんな冒頭から始まったお伽噺は……

――――――長かったので割愛。
ええ、割愛ですよ割愛。
面倒くさいのでさくっと、すぱっと簡単に言うと、以下の通り。

「やりたい放題の我儘に育って、迷惑ばかりかけるから精霊に格下げ。
それでも反省せずに勝手ばかりするから、封じられたってことで

すか？」

俺は御仁方の話を聞きながら、かなりイヤな予感がしている。
というか、イヤな気配がすぐそばから漂ってきている。

＜そうなの。ほんとうに困った子だったわ＞

頬に手を当て、子育てに困っているマダムみたいに言わんでください！

＜やんちゃで、やんちゃで、何度手を焼かされたか＞

そんでもって、問題児を抱え込んで頭を悩ませている教師みたいに唸らんでください！

もう、あれですよね。
この展開でその話ってことは、もう決まりですか？
決まりですよね！
そんな、御仁方にも手に負えなかったのなんて

「いりません！」

ええ、きっぱりお断りします！
御褒美だ、なんだ言われたってこの水晶にはその、困った奴が絶賛封印中なんでしょ！
そんな危険極まりないモノ、誰が持っていたいものですか！
こんなの喜ぶのは、戦争中の馬鹿か、頭がとち狂ってる輩ぐらいなんじゃないっすか？
俺はそんなモノとは縁もゆかりもないんで、

「断固拒否です！！！」

＜そんなこと言わないで～＞

＜それも、そろそろ反省ぐらいしておるだろうしのぅ＞

＜力はあるから、便利ではあるかもしれんぞ＞

厭々と頭を振って拒否の姿勢を貫く俺に、御仁方が言い募る。
やれ、永い封印生活のため従順になっているはずだの。
上位精霊だから周囲の精霊も従え放題だの。
俺を守る盾にも剣にもなるだの。

はっきり言って、何一つ心に響いてきませんが？

だってさ～、俺は戦闘要員とか冒険ヤローとかじゃないわけよ。
魔獣討伐に繰り出したり、盗賊退治もしない。
護衛任務を受けることもないし、リュックを担いで秘境探検とかも勿論しない。

俺がするのは事務仕事だ。
事務仕事に超強力な剣も盾も必要ない。
周囲の精霊が使いた放題になったって、マージナル内で使う場所がない。
しかも、やんちゃで封印されるような奴が、大人しく反省して従順になるか？

イヤ、ないでしょ。
マジでないでしょ、そんなこと。

ランクダウンして精霊に格下げされようが、関係なく好き放題やっていたっていうなら、九割九分反省なんてなんのその。
解放されればまた好き放題するんじゃないか？
俺が拒否するのって、当たり前じゃない？
そう思うんですが、御仁方、どうなんです？

「俺は、こんな危険そうなのなんて、絶対、ぜ～～ったい、要りませんからね！」

俺の必死の懇願。
目と目を合わせ、結構真剣に言ってみる。
ここ最近にない必死で真剣な視線と、超懇願の眼差しを御仁方へ！！

＜……＞

「……」

無言で見上げる俺。
にこにこと笑みを絶やさない御仁。

うふふ。とか笑ってないで、俺の意思をちょっとは尊重してくださいよ～～。
本当にお願いしますから。

そんな俺の主張は、御仁のえらく可愛らしい声に打ち破られた。

＜えいっ＞

「ちょっと……」

御仁の片手が軽い調子で一振り。
狼狽する俺を無視。加えて俺の願いもあっさり無視って……マジですか！

こうして事態は刻々と進んで行く。

ああ、人生って本当に儘ならない……ってか、

「俺で遊ぶのとか、マジで御遠慮願えませんか！」

俺の心からの絶叫もなんのその、俺の手のひらの上で水晶のルーンは瞬く間に崩壊していく。
強烈で、鮮烈な光を発しながら。

仇、俺と謎の物体X

強い閃光に目の前が真っ白になり、現在

「うぁっっ！！」

俺の手のひらにあった水晶のアトに、思わず声が漏れた。
御仁の手の一振りで水晶が浮かびあがるのは、まだ驚くに値しないのだが、目の前で現在進行形で展開されている事態には、本当に思わず声が出てしまった。

ちょっとばかし恥ずかしい。

随分慣れたと思っていたけど、そうでもないみたい。
いや、ここはまだまだ慣れ切っていないことを喜ぶべきか……

そんなことを思いつつ、少し赤くなった頬を気合いで正常化する。
そして、改めて俺は手のひらを見つめる。
正確に言えば、俺の手のひらに握られていたはずの、水晶の中に閉じ込められていたものを。
つまるところ、件の神様から降格したという精霊を……？

「……」

ええ～～～と。。。
……なんて言や、いいんだ？　取りあえず

「……？？？？」

最大限、何ですかこれは的な疑問の眼差しを御仁方に向けてみた。

＜……あれ？？＞

そして俺の眼差しに返ってきたのは、当惑しているらしい御仁方の反応であった。

「ちょっと？　なんですそれ？」

そのあんまりな反応に、小さく舌打ちして目をそらす俺。

その結果として、俺はその当惑の現物をまじまじと見つめることになった。

御仁方の話を聞いた限りでは、水晶の中には神様から降格した精霊が閉じ込められているという話だったはずだ。

そして、その精霊の本質は水と風。

元々が嵐の神様であったため、精霊になっても荒れ狂う気性に大層難儀されたという、悪戯大好き、迷惑極まりない精霊様であったそうな……

そんで、それがあんあまりに酷過ぎるからということで、水の御仁が統括者として処罰。

結果水晶に封印という。。。

そんな、ちょっと前の話を思い返しつつ、俺はそれを見る。

見たくないけど、仕方なく見てみる。

水の御仁（一見邪気のない、俺からすればイヤな感じの満面笑顔）の一振りであっけなく封印が解除された、水晶（それ）。

その一振りは精巧で緻密なルーンを容易く氷解させ、跡形もなく霧

散させた。
結果、水晶は内側から亀裂を生じさせ、ダイヤモンドダストの如く空中に虹色と金色（こんじき）の光を散らせた。
その一瞬の光の乱舞は、とてもキレイだった。

そこまでは、よかったはず。
そこまでは、何の問題もなかったよな？

問題は、その光の乱舞の後だ。
俺の目は真白な閃光に塞がれ、目を開けば、これ。
水晶の中に閉じ込められていたと思わしき、この物体。

これは一体なんなんだ？

「ええっと……」

目をパチパチ瞬いたところで、そんでもってどれだけ凝視しようが、俺が行きつく答えなんてものはない。
ないったら、ない！！
だって、生まれてこのかたこんなのと遭遇したことないし。
本でも見たことは……
まぁ、俺は学者でも賢者でもない、しがない一般事務員だから遭遇したこともなければ、これが載ってるような専門書を見たことないだけかもしれないけど、さ。

ああ、いや。
そんなことはどうでもいいよ。うん。

俺が知ってなくたって、そんなのどうでもいいんだ！
答えを求めたいのなら、答えを知る方々へと求めればいいんだから！

俺がわからなくたって、御仁方なら余裕ですよ～～よゆうよゆう。
そうですよね！！
俺に教えてくれますよね！！

そんな期待を込めて、再度目線を上へ。
今度は答えてねって感じで、きらきらと見上げてみる。

＜……＞

＜……＞

＜……？＞

そして場は静寂に包まれ、

「何よそれ？　卵にしか見えないわよ？」

はい。どうもありがとうございます。

俺と御仁方の沈黙を磔天使様が、きょとんとした目で答えてくれました。

そうですよね～。
どこからどう見ても卵ですよね～。

「しかも羽が生えてるってどういうこと？　初めて見るわ！」

これから罰が与えられるはずの天使様は、そんなことは気にしないってな感じの雰囲気で目をキラキラ。

その視線は何で？　そんでもってどうやって生えてるの？　と問いかけたくなる純白の羽に注がれている。
ぱたぱたって微かに動いている羽を見れば、ああこいつ生きてるのね～とかほのぼのとした気分に逃避したくもなるが、そこはちょっとばかし待って欲しい。

これって精霊だったんだよ？
しかも、元下級ながらも神様から降格した精霊だったはずでしょ？
なんでそんな上等な存在が、たかだか封印されてただけでこんな変わり果てた姿になってんの？

いや、俺はその姿とか見たことないから、実は元々こんな姿なんですよ～とか言われれば、「そうなんですか。変わった精霊もいるんですね」とか言って終わりなんですが……

＜……どうなってるのかしら？＞

封印を施したと仰った当の御本人が首を傾げてるってどういうこと？

＜……後退？　いや、まさか＞

あさっての方向を向きつつ、ぶつぶつ言い始める炎の御仁とか、大丈夫ですか？

＜ははは……どうなっておるのじゃ……＞

何故に空笑いをして目線を遠くにするんですか！　大地の御仁！

その場の混沌とした様子も知らず、羽をぱたぱた、くるくると俺の手のひらの上で八の字旋回を続ける卵らしき存在。

それと御仁方の混乱を交互に見ながら、

「とりあえず、もう帰ってもいいですか？」

なんか全てがどうでもよくなって、無性に帰りたくなってきた。
というより、早く帰して欲しいんですが。

そんな儚い願いを知らぬげに……
いや、若しくはそんな俺の願いを叶えるためかもしれないが、それは大きなお世話というものですよ！
そう叫びたくなる事態が起こったのは次の瞬間。
起こしたのは、俺の手のひらの上で旋回する謎の卵だ。

それはというと、

「あっ！」

という間に、先ほどまで緩い動きでフヨフヨ飛んでいた、謎の物体Xこと羽の生えた卵が、疾風の如く俺の手のひらから射出されたのだ。

勿論、俺の意思ではない。
というか、普通の俺が弾丸並みのスピードでモノを投げれるわけがない。
ついでに言えば、そもそも投げる動作もなしに、そんなことが出来るわけがない。
従って、卵は勝手に、一直線に飛んでいったのだ。

「……へ？」

今、すっごい間抜けな顔をしている磔天使の元へ。
一直線。

すごいね、マジで一直線。
このスピードで行くと、天使の腹辺りで卵が弾けて、中身が飛び散るか？
それとも、まさか風穴が空くとか……

そんなことを考えているうちに、事態は進む。

「きゃ～～～」

以外に可愛らしい声を上げる磔天使に、肉薄する弾丸卵。
ああ、中身をぶちまけるのか、それとも天使の腹を突き破るのかと、恐いモノ見たさでドキドキする俺。
そして、

「まぶしっ」

俺は緊張感もなく、一言。
何が、どうなっているのかさっぱりだが、このところよく目にする閃光が瞬いた。

違いがあるとするならば、それは閃光のくせに目に優しい感じがした点。
そんでもって、未だに光り続けている点。
あとは、

＜繭？＞

＜もしくは、たまごかしら？＞

光が礫ごと天使を呑み込み、大きな塊になっている点だ。

なんだこれ？

一体何回思えばいいのかわからないが、あえて言おう。

「なんだこれ？」

俺の目の前にある大きな大きな塊は、ころんと丸みを持った卵と言えば卵っぽく、繭と言われれば繭かもね……と言える珍妙な物体。

それが何かを問いながら、俺は全力でこの場から消え去り、この先に待っているだろう事実を知りたくなと思っている。

なんか、これに関わってはいけないような。

ついでに言えば、この先の展開を見聞きしてはいけないような、そんな気が。。。

俺はぼけっと謎の光るたまごだか、繭だかになった塊を見上げながら、悪い予感に身震いしたのだった。

什、俺と不本意な結末

帰りたい。
帰りたい。
帰りたい。

一心に思うものの、俺の願いは御仁方次第。
だからして、どんなにこの場から離れたい、帰りたいと思ったところで、御仁方に何とかしてもらえないとどうしようもない。

なんたって、ここは御仁方の空間だ。
現実と切り離された空間であるからして、“普通”でしかない俺にどうすることもできず。
つまるところ、帰りたくとも帰れず、どんなにこの場から離れたくとも、ちっとも御仁方から距離を取れないということであって、

「……」

この意味不明な状況から逃げることができないということだ。

＜どうなるのかしら、これ？＞

＜新種が誕生するのか？＞

＜はは、楽しみよの～＞

俺と御仁方の間に依然としてある物体は、現在ぐらぐらと右に左に揺れている。
何かがたまごだか、繭だかの中で身じろぎしているようだ。

そして、その揺れに合わせるかのように、ちかちかと点滅している。
何が出てくるかは、わからない。
なんせ、御仁方からして分かってないっぽいし。
新種とかって一体……
御仁方が見守る中、謎の物体はさらに激しく揺れ、忙しく点滅を繰り返す。
ゆらゆら、ぐらぐら。
ちかちか、ちちちちっ。
何か、爆発寸前の爆弾みたいになってきて、非常に怖い。
もしや、ここにいたら危険なんじゃ……
先ほどよりも更に激しい揺れと明滅に、俺の血の気がさっと引いていく。
やばい感じがするのだ。
激しく、アブナイ感じが漂ってきている。
そして、
ドン！！！
「うわっっっっっ」
咄嗟にしゃがむ。
爆風が体に激突するが、縮こまって何とか耐える。
その頭上を何かがヒュンヒュンと通り過ぎていく音がした。

爆風が収まって後ろを向けば、遥か彼方に飛んでいく『何か』があるが、すぐに消えた。
おそらく視界で捉えきれないほど、遠くへと飛んでいったのだろう。
未だに空気を切り裂いている音がする、『何か』が。

「……」

こわっ！
めちゃくちゃ、コワッ

何それ？
俺、しゃがまなかったら『ＴＨＥ　ＥＮＤ』じゃない？
俺の人生、幕下ろしだよ？

そんな九死に一生を得た俺は、蒼褪めた顔で前を向き、御仁方に一言モノ申そうと思ったわけだが、

「……？」

ぽかんと空いた口が塞がらなかった。

あの日、あのときのことを思い出しながら、一筆。

「俺の平穏はどこにいったのか？」

この疑問はいつになったら解けるのだろう。
御仁方からの“お願いごと”を訊き続ける限り、解けない問題なの

か。
そして、御仁方の“お願いごと”を聞いてくれる人（と言う名の生贄？）が現れるまで俺は……
ツーっと俺の目から流れる水。
これは当然、
「お前は、なにを、やってんだーーーーーー」
怒りの血涙だ！
今、俺の眼前には荒れ果てた一室がある。
机やタンスは横倒しになり、至る所に服やら本やら小物やらが散乱している。
さながら泥棒にでも入られたかの如く、いやそれ以上に荒らされている。
その証拠にほら、
「そのベッドを降ろせ！　包丁を部屋の中で振り回すな！　モノを玩具にするんじゃね～～～～」
隣の寝室にあるはずのベッドが空中で高速回転。
キッチンに仕舞っていた何本もの包丁や食器、ペンとか本とか食材とか、あらゆるモノがぶんぶんと唸りを上げて飛び交っている。
何ですか、このカオス。
うきゃうきゃ笑う、このカオスを作り出している元凶を睨み、俺は骨を軋ませるが如く拳を握りしめる。
煮えたぎる怒りで、頭の血管が千切れそうだ。

ぎりっと握りしめた拳を構える。
そして、

「さっさと、片付けやがれ！！！」

怒りの右ストレートを、元凶に向かって俺は振りぬいた。

「ぎゃわっっ」

俺の拳はクリーンヒット！
そいつは正義の鉄槌の前に無様に倒れ、顔面から床にキス。
その結果

『ドガッ』
『グサッ』
『がちゃん』
『ぐしゃ』

「……」

ベッドは床に墜落、包丁が床や壁に突き刺さり、食器は割れ、食材は無残な姿へ変身した。

「……（涙）」

そのあまりの惨状に、俺はがっくりと膝を着くしかなく、

「俺の平穏を、返してください。
せめて、俺の家の中だけでも……」

もう、勘弁してください。

本心から、心から、切実に思う。

「早く、こいつを引き取ってください」

床にぽたりぽたりと、俺の心からの想いが、小さなシミを作っていき、その元凶はといえば

「おかえりなさい」

拙い言葉で、にっこり笑顔。

「どうかしたの？」

あまつさえ、膝をついて涙する俺を心配げに見上げるのだ。

とことこと、俺の顔面が見える位置に来て！！

「お前のせいだろうが」

あの日、あのとき、俺の目の前で生まれた？存在。

それが、こいつだ。

体長、小指の爪から巨人程度（実際は不明）。いまは３０センチといったところ。

その背には３対の翼が広がり、尖った耳の後ろからも１対の翼を広げている。

天使という存在と、精霊だったはずの謎の羽あり卵が融合した存在。

最早天使でもなく、精霊でもない。

人格は融合の結果なのか、リセットされたらしいが、本当のところ

は不明。
存在自体は神に近しい存在に昇格したらしいが、神ではないらしい。
一番近いのは神獣だとか。
それを聞いたときは、天使よりも神獣の方が格上なんだとか思ったが、

＜神獣といえども、ピンキリよ。天使より上もあれば下もあるのよ＞

とかなんとか。
まぁ、その辺の序列を知りたいわけではないので、丁重に詳しいお話は御遠慮した。
暇なら触りぐらいなら聞いていたかもしれないが、その時は無理だった。
なんせ、俺の身に大問題が起こっていたからだ。

「わたし　なにかした？」

そう、いま俺を見上げている、こいつのせいだ。
インプリティングと言えばわかるだろうか？
御仁方を見るより先に俺を見たこいつが、すっかり俺を親だと勘違い、みたいな感じになったらしい。
目の前にいたというただそれだけで、俺に張り付き、御仁方がどんなに説得してもダメだった。
しまいには

＜そのこを連れて帰りなさいな＞

＜すぐに自立するだろうから、そんなに大変なこともなかろう＞

＜しばしの間、世話を頼もうかの～＞

御仁方は笑いながら、こいつを俺に押し付け、俺が文句を言う前にフェイドアウト。
気付けばこいつを張りつけた状態で、自室に送られていた。
呆然とするしかない。

「それより　きょうね　わたしね……」

こうして俺は、今日も今日とて涙する俺を無視して話し始める、この部屋を荒らしまくった元凶の相手をしつつ、横倒しの机を所定の位置に戻す。

「話しを聞く前に、ベッドを向こうに置いてこい」

「は～～い」

「本棚とタンスも今朝と同じ位置に」

「は～～い」

重い家具類を元に戻させている間に、床や壁に刺さった包丁を抜き去り、比較的平気そうな服を畳み、ダメそうなのは一か所に。
本や小物も点検しつつ元に戻して、ダメなものはそれぞれ固めて置いて行く。
割れた食器類は放置。

「おわったよ～～」

「これを元に戻したら、話しを聞いてやる」

「やったーーー
すぐにもどすから　いっぱいきいてね！」

汚れた服から汚れを消し去り、破れた本や壊れた小物を修繕し、割れた皿を復元。
ついでとばかりに、床でつぶれた食材が時間を巻き戻されているかのように、その姿を取り戻す。
それを横目に、俺はせっせと片付けつつ、ここ最近、妙に慣れてきた状況に俺の目から、またぽろりと涙がこぼれた。

こんなことに慣れる日が来ようとは。
頭が痛い。

目をキラキラさせて話し始める頭痛の種の相手をしつつ、こいつが早々に巣立っていく日を心待ちにするしかない、俺なのだった。

什、俺と不本意な結末（後書き）

参話、いかがでしたでしょうか？　参話は、これにて＜完＞となります。
予想外な展開になってしまいました。。。。
一体、どうしてこんな展開になってしまったのでしょう？　不思議です。
それでは、また次話に。

壱、放り込まれて洞窟任務！？

「う～～～わ～～～～～～～」

なんかきてるよ！

こっちに、やって、き　て　　る～～～～～～～

「く～～～～る～～～～～な～～～～～～～～～～～」

ひ～～～、なんか黒い物体がこっちにきてる～～

しかも、ケタケタ笑いながらきてるよ～～～～

≪それ、全部片付けてくれたらいいからね～≫

≪期待していますわ≫

≪おぬしに渡したそれがあれば、ちょちょいのちょいじゃ≫

あはは、おほほ、ふふふっ。

彼らの笑い声に俺はひっっと悲鳴をあげた。

冗談じゃない！

そう言いたいところだけど、

「ええいっ！くっっぅっっっそ～～～～」

わけのわからない洞窟の中、黒い何かに追いかけられている俺には、

文句を、言ってる

「よ、ゆ、う、が、な～～～～い～～～～～～」

ひ～～、勘弁してくれよ～～～～
きてる、きてる、きてる、きてる～～
まんまるの黒い物体とか、とげとげの黒いのとか、四角いのとか、
ぶにょぶにょのが、

「い～～～や～～～～だ～～～～～」

俺のすぐ後ろを、ケタケタ笑いながら追ってきてる～～～

夢に見ちゃうよ！
トラウマになっちゃうよ！
もう、これは、

「逃げるしか、ないだろ～～～～～」

ひたすら全力疾走！！！！！！！！！！
これしかないだろう！！！！！！！！！

っということで、どうして、こんなことになっているのか、聞いてくれるか？

ことの起こりは、いつものごとく呼び出しをくらって、いつものように出向いたときだ。

≪最近、異常気象が起こってなあい？≫

何気なく切り出されたセリフに、俺はここのところの気象を思い出した。

確かに、最近やたらとおかしいことが起こっている。

北の方では雪が一夜にして溶け、雪祭りの最中だったそこでは観光収入がゼロどころか、ありえない水害のせいでマイナスになったとかなんとかいっていた。

かと思えば、リゾート地として有名な南国のパラダイスが、過去最低気温を軽く更新してマイナス５℃を記録し、ついでに１００年ぶりの雪を観測したとか。

んで、南国特有の生物の危機とか叫ばれていた。

そのせいで、気象系に強い魔道師、魔術師、魔法師はマージナルからも民間ギルドからも、果ては国家の魔法連隊たちも駆り出されて対応する羽目になっていたはずだ。

昨日は、その手続きとかなんとかで対応に大わらわだった。

あれは、疲れた。

かなり、疲れた。

手が空いてるのを手配するのも、国から予算をブン取るから根回ししろとか、民間にも国にも負けないぜとかなんとか、わけわからん理由で上から言われたときには、は～？　何言っての？　とか他人事みたいに思ってたのに、なんか、周りがやたらと盛り上がったせいで、俺まで、俺まで……

なんで、あんなに仕事しないとなんないんだよ！

ほんと、徹夜になるんじゃないかって、泣きそうだったよ。マジで。

あのときのことを思い出して、俺はちょっと思い出し笑いならぬ、

思い出し泣きが出来そうだぜ。
まったく！

≪聞いておるか？≫

おっと、いけない。
昨日のことを思い出してたら、すっかり。
俺は居住まいを正して彼らを見上げた。

≪あれね～。実はね……≫

「はい。」

≪風邪ひいたからなのよ。≫

「はい？」

風邪？
なんか、唐突すぎてわけわかんないんすけど？

≪雪の姫神は、身体が弱くてな～≫

いや、だからですね～。
何の話です？

≪そうなのよね。季節の変わり目によくかかるし。この時期は免疫力が落ちるのかしら？≫

≪う～ぬ……そうではないのではないか？　あの子はがんばり屋さんだからな。きっと、過労ではないかの～？≫

≪そうかもしれんな。もっと労わってもよいと思うのだがな。≫

「しみじみとしているところ、申し訳ないですが、ほんとに何のことですか？」

≪うん？わからんか？≫

「ぜんぜん。」

≪だからな。あの子が風邪をひいたんじゃ≫

だから、それの意味がわかんないんすけど？

≪それでね。あの子の管轄は“雪”なのよ。≫

ゆき？

まさか

≪体調を崩しておるからの～。調整ができんのじゃ。≫

だから、地上は大変なことになってると？

俺の無言の疑問に、御仁方は力強く頷いた。

≪それで、今回のお願いなんだが……≫

≪あの子のために、病魔を倒してきて欲しいの。≫

≪今回はなんと、特別サービス付きじゃ！　喜び勇んでちょちょい

とやってくるのじゃぞ！≫

それじゃ～～がんばってね～～っと言われた次の瞬間。

「へっ？」

俺は見知らぬ洞窟の中、一振りの剣を手に突っ立っていたのだ。

そして、冒頭に戻るわけだが……

「ようは、あれを、何とかしないと、だめってことか？」

ぜーはーと肩で息をして呼吸を整えている俺は、真っ黒いのがいないことを確認して腰を下ろした。

っていっても、完全に座ってはいない。

すぐに立てるように片膝立ちだ。

じゃないと、黒いのがまた来たときに対処できやしない。

「あれを、倒せってことであってんだよな？」

御仁方の言ってたことを反芻して、俺はあの黒いのが病魔なんだろうな～とため息をついた。

そして、あの黒いのを全部倒さないと、俺はここから出ていけないんだろうと確信して、さっきよりも大きなため息をついたのだった。

そんなこんなで、「こんなとこでため息ついててもしょうがないか」と思って歩き出した俺だが、

「なんじゃこりゃ？」

歩き始めて十数歩。
まだ、１分も経っていないってのに、俺の視界は奴らに占領され、
しかも……

あ～～なんか、もうだめ。
もう見たくない。
ってか、これ誰かウソって言ってくれない？

人間、自分が把握できないってか、したくない事態に陥ると、考えることを放棄したくなるんだな～と実感しちゃったよ。
ほんとに、いやになるね！
なんだよこれ！！！！

目の前には、大小様々、形も色々なまっ黒けとか、青みどろとか、どす黒い紫とか、ごちゃごちゃな斑とかがいて。ついでに言うとケタケタ笑ってたり、ガオガオ吠えてたり、シクシク泣いてたり、フンフンっと歌ってたりと、なんかかなり混沌としている。
さっきはケタケタ笑っているまっ黒けだけに追われてたから、病魔ってのは全部そいつらのことだと思ってたけど、そうじゃなかったんだね。
へ～～～。ふ～～～ん。
そうなんだ～～～。
あははははははははっっくぅっっぅ～～～

もう、泣いてもいいですか！！！！！！！！

かなり、きもい。

かなり、きしょい！
ってか、見てると気持ち悪くて吐きそうだよ。

これを倒す？
ほんとに、これ倒すの？
これで？

俺は人形のような動作で、右手で握っている剣を見た。
どこにでもありそうな味気ない柄とは対照的に、鍔から伸びている刀身はあまりにも美しすぎる。
何を打てばこうなるのか？
俺の頭じゃ到底わからないその刀身の色は、光を固めたかのように純然たる白。
優美にして繊細なそれは、確かに神々の祝福を受けていると一目でわかる。

……けどね～、わかっちゃいるよ。
そりゃ、これでアレを切りゃ、倒せるんだろうな～とは思うけどさ。

これ、衝撃波とか、光線とか飛び出ないかな？
飛び出ないよな。。。
はははは……はぁ～～

ってことは、つまりってか当たり前だけど、あいつらの側までいってバサバサ倒さないといけないに決まってんだよな。
うわ～、まじでイヤなんだけど。

真っ黒、ケタケタ。
青みどろ、シクシク。
どす黒紫、ガオガオ。

ぐちゃぐちゃ斑は、フンフンっと。

ちらっと見て、ぱっと目をそらした。

ちら見しただけでも、インパクトがでかすぎる。

やりたくない。

逃げ出したい。

「……けどな～～～」

後ろをちらっと振り返った。

「もう、逃げ場がないんだよな。」

声に出して言ってみると、余計ズーーーンときた。

さっきから、わかってはいたさ。

なんか、うるさいなとは思ってはいたさ。

けど、まさかこれほどとは！っと目を剥くってか、目にしたくない光景が広がってるとは思いたくはなかった。

前も後ろも、カオスだ。

弐、俺と退治対象？

「うおりゃっ」

突き出した刀身に身体をのせ、流れに身を任せたら、ぎりぎりのところで刀身に自分の身体を引き付ける。
んで、ちょっと勢いを付けたまま、よいせっと思いっきり身体を捻った。
このとき気をつけるのは、あくまで不自然に体を捻らないこと。
刀身の動きに沿うように、自然な流れを阻害しないまま振り切る。

ぶんっ！

風が唸る。
大きく円を描いた刀身の軌跡が、白銀の煌めきを作った。

今度は上に、左に、下に、右に。
回転の勢いを殺さないように。
そんで、あくまで優雅に素早く、流れを止めずに……だっけ？

確か、これで良かったはずだよな……と思いながら、俺はバッサバッサと斬りまくっている。
そのお相手はというと……

くきょくきょっっ！！！！！
（しゅわわわわっっ）

とか、

ぐぎょぐぎょっっ！！！！！
（じょわじょわわわ）

とか。

「……」

実に気味の悪い絶叫？　断末魔？　みたいなのを上げ、しゅわしゅわと空気に溶けるようにして消えていく。

呆気ない。
実に呆気ない。
呆気なさすぎる。

なんせこの、ちょっとまばゆく輝き過ぎな刀身にちょこっと触れただけで、しゅわしゅわっとなるんだぜ。

「えいっ」

気合いも何もなく、ただこの剣を振り回してるだけで、充分。
技も何もない、子供が棒を振り回しているような攻撃とも呼べない。
そんなもので気色悪い黒やら、緑やら、紫やら、まだらやらが空気に溶けるように消えていく。

ちょっと驚いたような顔をして、わけがわからないというように消えていくそいつら。
消える一瞬前に真白い煙をあげ、蒸発していく様を見るのはなんだか不思議な感じだ。

まぁ、むかし剣を教えてくれたヤツのことを思い返しながら、型通りに剣を振るおうが、棒きれを振り回すように振るおうが関係なく消えてくれることは素直に嬉しい。
何と言っても俺は剣を持って戦うような、そんな戦士や剣士めいたことはできないんだから。

ちょっと教えてもらったぐらい。
しかもお遊び程度で、打ち合いもしたことがない俺だ。
めちゃくちゃ強いのを相手に生き残ることは、絶対に無理。
めちゃくちゃ強くなくても、攻撃力が弱い、それこそ蝙蝠みたいなモンスター並みの強さでもやばいかもしれない。

数がいるってのは、それだけで脅威だしな。
一匹、二匹を倒したところで、どうしようもないし。
しかし、

「なんか、俺。悪モノみたいじゃないか？」

同朋が次々と蒸発していくことに、やっと危機感を持ったのか。
俺の目の前を占領していた病魔たちが、じりじりと下がったかと思うと、一目散に逃げ出した。

きょきょきょきょ

というなんか気が抜ける奇声は、もしや悲鳴か？
そんで、逃げ出したあちこちに点々としているのは、黒や緑や紫や斑のしみ。
そのしみは地面や壁や天井に張り付いたかと思うと、次の瞬間にはすーっと消えていく。
これってもしかして、なみだ？

涙（？）を流しながら、悲鳴（？）を上げて散っていくヤツら。
しかも、小動物めいた仕草でプルプルと震えながら去っていく……

これじゃ、どっちが悪モノなのかわからん。
俺はなんじゃこりゃ？　と頭をかきながら

「とりあえず、どっちに行こうかな？」

前に行くか、後ろに行くかに迷った。

とりあえず、前に行くことにした。
人間何事も前向きに生きてれば、なんとかなるさって誰かが言ってたし、どっちに行ったってやることは変わんないしね。
てれてれと剣を引っ提げて俺は歩く。
歩く歩く歩く……？

「えっと……」

かりかりと頭を掻きながら歩いたり、早足になってみたり、床を見ながら、壁を見ながら、はたまた天井見ながら歩いてはいる。
けど、だ。

歩けども歩けども、奴らはいない。

「どこに行ったんだ？」

逃げてく姿は見たけど、そこまで素早い動きでもなかったのになぁ

と思うが、いないものは、いない。
けど、どっかにはいるはずってことも分かる。

だってさ～、今回のお願い事は“風邪を治す”ことだからね。
たぶん、病魔を一掃しないと俺は“ここ”から出られないと思うんだよね。
……思うだけだけど。

ってか、場所すらわかんないからそう思ってないと怖すぎる。
これで、自力で脱出して帰れとか彼の御仁方から言われた、イヤすぎるって！

俺はその想像を頭を振って追いだし、早足っていうか、もう走るぞ！
走って探して、さっさと一掃して帰りたい！

何時間とかならまだしも、何十時間とか何日もここにとかだったらどうしよ～。
そしたら、怒られる！
上のとかより、あの恐い同僚に怒られるのが……

イーーーーヤーーーーー

さっさと、帰ろう！
さくさく、帰ろう！
あいつらを一掃して、帰らないとヤバイ！！！！
ビリビリがくる～～～！！！！
杖を持った悪魔が、俺の真後ろに～～～～！！！！

ヒィーーっとちょっとばかり焦燥感に駆られながら、俺は走る。
走る走る走る！
額と背中を伝う汗は、冷汗じゃなくて普通の汗だと思いたい！！

そんなこんなで、全力疾走した先で、俺はポカンと口を開けた。
決して、口が閉められないぐらい疲れているから、間抜け面して開けてるわけじゃない。
ただ、驚いて開いた口が塞がらないだけだ。

いま、俺の目の前には追いかけていた奴ら（？）がいる。
奴ら（？）って“？”をつけたのにはもちろん理由がある。
それは、

「いつの間に成長ってか、合体？　したのかね～？」

ぼけっと目を上に向け、下に向け、ついでに左右にも向けてみた。
そこには、縦にも横にも立派に成長した？　≪奴≫がいたのだ。
あえてここは、≪奴≫って単体で言わせてもらう。

だってさー、こいつしかいないんだよなぁ。
後ろにいるのかもしれないけど、いまんとこ見えないから単体って思ってもいいんじゃないかな。

これって、やっぱあの小さいのが寄り集まって、合体した結果なのかな？
っていう推測は外れていないはずだ。
色はぐちゃぐちゃに混ざって、さらに気色悪いことになってるし、顔が数秒おきにころころと変わっているし。声はもう混ざりすぎて何が何だか分からないが……

ま、いっか。

「さっさと終わらそ」

そんで、さっさと帰ろう。
俺は剣を握りなおして、気色悪い巨大不定形生物を見上げた。

「よし！」

小さく気合いを入れて、俺は剣を掴む手にさらに力を込めた。
気合いなんて、普段はしない。
剣をゆっくりと、真剣に構えるなんてこともしたことがない。
けど、

さすがに、気合い入れないと見れないって。。。

目の前には、世にもおぞましい色をした超気色悪い物体。
しかも、俺の背丈の3倍はあろうかという巨大な不定形物体がいるのだ。
気合いでも入れないと、あまりの気持ち悪さに吐き気を堪え切れない。
ちっちゃかった頃が懐かしいよ。

なんで、こんなになっちゃったのかね？
泣いちゃうよ？　俺。
これで、腐臭とかを放ってたら、ほんとに泣けてたかもしれないな。

とか思いがら、俺はジリっとすり足で間合いを測る。
思い出すのは、俺に「剣術を教えて進ぜよう」とかなんとかふざけ

た口調で、ぺらぺらと講釈を始めた誰かさんのこと。
あのときは、暇だから付き合ってやるかと聞いてやっただけだったが、それがこんなとこで役に立つとは……

「「「「シク「「「「ガオガ「「「「ケタケタ「「「「フンフン」」」」」」」」」」

何が何だかわからない声は、シャットアウト！
聞くのは自分のどくどくとなっている鼓動の音だけ。

ドキドキとちょっと早かった音が、次第にドクドク、トクトクと緩やかになっていく。
深すぎず、浅すぎず。
俺のいつも通りの呼吸を意識して、今度は呼吸を深くしていく。
静かに深く。身体中に行き渡らせて、力に変える。
熱い鼓動と深い呼吸。
陶酔せずに平常心。
剣は俺。俺の手。
だから、剣（これ）は自由自在に動く俺自身。

ゆっくりと静かに構え、ふっと軽く息をついた俺は、自分から奴に向かう。

そして、

ピッカッ！！

「「「「「きょわきょわ、ぎゅわぎゅわ、ぎょわぎょわ、ぐぎょぉぉぉぉ～～～」」」」」

強烈な光が瞬いた。
そんで、思わず目をつむったら

「あれ？」

世にも奇妙な断末魔をあげ、病魔は一掃されましたとさ。
ただし、

「まだ、何にもしてないんだけど……」

俺は剣を構えたままの格好から、すとんっと剣を下げた。
あれだけ真剣に、誰かさんの言うこと通り、忠実にやってみようっかな～とか思って、ちょっとがんばってみたのに！！
せっかくがんばってみようとか思ったのに！

似合わないことに真剣になった俺が、馬鹿みたいじゃないか！

俺は、く～っと袖で目元を拭った。
目から水なんか出てなかったけど。
雰囲気、雰囲気。

ちょっと空ぶった感のある俺自身を慰めるためには、めちゃくちゃ必要だったんだよ！

弐、俺と退治対象？（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。
これからも楽しんでいただけたら幸いです。

参、俺と初めての御対面

＜ありがとう＞

ぺこりとほんの微かに顎をさげたのは、見目麗しく荘厳にして、尊大……な？

「……」

妖精じみた小さい身体をした……

「え～と、どなたさまで？」

＜雪の女神です＞

非常に愛らしい仕草で小首を傾げた女神さま（？）が、俺の目の前にぷかぷか浮かんでいる。

その姿は非常に愛くるしく、どっかの町でマスコットとして置いとけば、観光収入が増えそうな……

そんでもって威厳とかより親しみやすさが前面に出てるせいか、微笑ましい光景が広がりそうな。

「……」

そんな妄想が俺の中で急速に固まってきている。

けど、そんなことは想ってるだけ。

単なるイメージだから。

本当のところは疑っているわけじゃない……よ？

うん、まさか神様って柄じゃないだろう、使い魔って言われたら納得するけど

……なんて思っていませんよ？

ええ、ええ。ご本人が名乗ってるんだから、そうなんですよね。

なんか、精霊よりも存在感薄いんですが、そうなんですよね？

＜ほんとうですよ？＞

そうですよね！

ええ、ええ、そうでしょうとも！！！

涙目になって訴えてきた女神さま（？）を中心に、ぶわっと一瞬にして冷気が漂ってきたので

「お目にかかれて光栄です。」

とりあえず、慌てて呆けた面を引き締め丁重に跪く。

この力一つで神様である証明には、十分すぎる。

疑うべくもない。

ええ、俺は信じていましたとも！！

だあら、あの……この極寒地獄は勘弁してください（涙）

＜あなたのがんばりで漸く体調がよくなってきました。＞

ほぅ。っと息をついて女神さまは、

「何か、身体が大きくなってきてませんか？」

さっきの妖精サイズがウソだったかのように、急成長を続けている。
そう、続けているのだ。
毎秒一回りぐらいの早さで、着々と大きくなってきている。

「どこまで、大きくなるんですか？」

そう聞きたくなる俺の心情は、間違ってないと思うんだ。
そして、

＜あと2倍ぐらいは＞

軽く言い放たれた言葉に、愕然と言葉を失くしたのも、しょうがないと思う。
だってさ、

「もう天井まで頭ついてますよ」

狭くない天井に頭すれすれになってるってのに、それの2倍！！
正直、逃げたいんですが。。。

＜あら？　窮屈なのはイヤね。それじゃ～、えいや＞

気合いも減ったくれもない声とともに、視界が真っ白になる。

その力の余波を受けて、俺の服は盛大になびき、急いで前かがみになってなければ、その辺の石ころとかと同じように洞窟の奥へと叩きつけられたに違いない。
その事実に血の気が引くが、血の気とともに踏ん張ってる足が浮いたらシャレにならん！

あれ？
前にもこんなことがあったような……

いやいや、そんなことを今は考えてる場合じゃない。
今はとにかく、踏ん張るんだ！
ここはぐっと、踏ん張るしかない！

＜これで大丈夫ね＞

そして、ひどく満足げな声に前を向けば、満面の笑みを浮かべて愛らしい顔のままの女神さまが洞窟の天井を粉砕し、仁王立ちしていた。
その頭上には白い世界が広がり、

「メチャクチャ、サムインデスケド」

猛吹雪でホワイトアウトした世界から、怒涛の寒さというプレゼントは全く嬉しくなかった。

＜ああ、本当に助かりました＞

ほぅ。さきほどよりもかなり満足げな吐息は、白銀の世界の中、唯一の美しさを醸し出している。
しかし！

「……ソロソロ　シニソウデス」

哀れ。俺は凍死寸前。
女神さまが一呼吸するだけで増量し、加速度的に寒くなっている気温に、がちがちに震えまくっている。

＜あら、軟弱ね～＞

いや、今の俺の格好を見てそれを言いますか？

ここは、今しがた突如豪雪地帯になったのだ。
俺は比較的に温暖な気候に適した格好はしているが、豪雪地帯向けの格好をしているわけじゃない。
長袖ではあるが、厚みのないぺらぺらの服装の俺が、こんな極寒の中で元気いっぱいでいたらおかしいだろう。

＜もう、しょうがないわね＞

そうやって心底楽しそうに言うのは、何か間違っている気がするんですが？
でも、文句なんていいませんから。
何も愚痴ったりとかしませんから、どうにかしてください！
もう、ヤバいです！
俺の視界が塞がってきています！

ああ、ヤ　バ　イ……

なんだかねむく

俺は抵抗空しくその欲求にあっさり負け、周りに広がる世界と同じように白い世界へと沈んで行ったのだった。

参、俺と初めての御対面（後書き）

四、俺と雪の女神さま

「あれ？」

真っ暗闇から浮上したら、そこには女神さまの笑顔がありましたとさ。

って、なんだ、それ。

自分に突っ込みを地味に入れつつ状況確認、状況確認。

あまりの寒さに気を失った俺は、本来なら洞窟内で凍死寸前だったはず。

でも、いまは何故か温かい空間にいるんだが。

ついでに周りは相変わらず吹雪いていているというのに、ドラゴンさえも飛べそうにない空中に浮かんでいる。

眼前の女神さまの微笑みを見るに、多分っていうか確実に女神さまの温情か？

＜気がつきましたね＞

俺がじっと女神さまを見ていたからか、目線が交差した。

おっと、いけないいけない。

いろいろ考えるのは後だ、後。

兎にも角にも、まずはお礼言っとかないと。

「ありがとうございます。おかげ様で凍死せずにすみました。」

たとえ目の前にいる女神さまのせいで死にかけたとしても、助かったのは本当だしね。
きっちりとお礼は言っとかないと。

心からの謝意を込めて。
深々と一礼。

その謝意を受け止めてくれたのか、女神さまが一層微笑む。
正直、ただの“一般人”の俺には過ぎた笑みだ。
そういう表情は、あなたを信仰している奴らに向けてやったらどうなんですかと言いたくなる。
きっと有頂天になって、より一層女神さまに傾倒するはずだ。

＜うふふ。嬉しいことを言ってくれるわね。でも、わたしの顔を見られるヒト種はあなたぐらいよ＞

「なんでです？」

＜だって、わたしヒト種には知られていなかったはずだもの＞

「そうなんですか？」

＜ええ。地上種では竜種や幻獣たちぐらいしか、わたしを知らないはずよ＞

はて？　なんでまたそんなことになってるんだろ？

雪の女神さまについて、確かに俺も初めて聞いたが、俺が知らないだけで神官連中は知ってると思ったんだけどな。

全ての神を知っているとも言ってたし、知識の神だか、記録の神だかよく分からんが、そのへんのが神子を通して神さまのことを教えてるんじゃなかったっけ？

＜……まぁ、いろいろあるのよ。＞

いろんな疑問はその一言でスルーされた。

いろいろって何？　と気になりはするが、そこは聞いてはいけないんだろう。

きっと何か俺にはよく分からん、やんごとなき事情があるんだろうし。

俺ごとき一般人が、おいそれと踏み込んでいいような領域でもない。

「それじゃ、今回お目にかかれた俺は相当ラッキーってことですかね。

　神官連中に知られたら、さぞかし悔しがらせるんだろうな……」

って、場つなぎ的な発言でヤバイことに気付いた。

俺は神殿関係とは御仁方との件で既に睨まれてる。

そのうえで女神さまとのヒト種においてのファーストコンタクト的な立場って知られたら……

ヤバイ！

軽く殺されるんじゃないか？

御仁方と会っているのは、バレる心配なんぞ皆無だからいいけど、神殿の神子が問題なんだよ！

時たま変な風に託宣を引っ提げて、ひょっこり現れるんだよ、奴ら。

「神の啓示が」とか、「神のお導きに従って」とか、何だかんだと

いちゃもんつけて現れちゃ～、神殿の厄介ごとを押し付けに来やがって！
いい加減にしろと叫びたい！　でも叫べない、俺の弱い立場に泣けてくる。

ああ、やだやだ。
思い出しただけで厭になる。
絶対に、女神さまのことはばれないようにしないとな。

＜ふふ。秘密の関係ってちょっと素敵ね＞

ははは。
にっこり笑顔、ありがとうございます。
そんでもって、やっぱり全部筒抜けって悲しくなってくるんですけど。

＜まぁまぁ。仕様がないじゃない。聞こえちゃうんですもの＞

「……そうですか」

そりゃね。聞きたくなくても聞こえるんだろうから、仕様がないっちゃそうなんだろうけど。

＜それにしても、う～～ん＞

「どうかしました？」

＜うん。どうしようかなって思って＞

「なにがです？」

＜治してくれたお礼よ。お・れ・い＞

「いや、そんなウィンクつきで可愛らしく言わないでくださいよ。
正直、心臓が全力疾走しまくってて、きついんですけど。」

まじ、勘弁。
垂れ流し気味の女神さまオーラが厳しい。
血液が尋常じゃない早さで体を巡ってるし。
柄にもなく顔が真っ赤になってる自覚がある。

「お礼なんか別にいりませんから。」

手をパタパタしながら、必死に目をそらす。
お礼なんて本当にいいんで、そのオーラを何とかしてくれ。
いつもの空間の御仁方みたいにオーラを通常以下に抑えてください。

＜もう。かわいいんだから～。でも、お礼なしは認めないわ＞

認めないって……

＜ええ。わたしの主義に反するもの＞

えへんって、そんな胸張って宣言しなくても。

本当に気にしなくてもいいんだけどな。
御仁方のお願いごとなんだし、女神さまが気にすることもないと思うんだけど。
そんなことをつらつら考えているうちに、女神さまは閃いたとばかりに顔を輝かせた。

＜決めたわ！＞

そうして、驚くべき光景が広がるのは、最早確定事項。
女神さまのなさることに、驚かないわけがない。

伍、俺と御褒美が齎すもの（前書き）

ちょっと長めになってしまいました。
楽しんで読んでいただけたら幸いです。

伍、俺と御褒美が齎すもの

「なぁ、アレ見たか？」

「ああ、アレだろ。見た見た。」

興奮した声が上がるかと思えば、

「おい、知ってるか？　今、各国の神殿から調査員が向かってるらしいぞ」

「俺が聞いた話じゃ、中央神殿の神子様、御自ら行かれるとか」

ひそひそと仕入れてきた情報を交換し合う者たちの声。

それに俺は無関心を装いつつ、内心恐々としていた。

「すごかったな、アレ」

「あなたはどこから見た？　私は派遣先で見たんだけど？」

「ぼく？　ぼくは南で見たけど。君は派遣先ってことは北？」

「そうそう。すごかったわよね～」

興奮冷めやらぬ声は、マージナルを訪れている奴らだけではなく、内部の奴らも話している。

俺はそいつらに話かけられることがないように、こそこそと書類片手に人気のない場所へと移ることにした。

まじ、勘弁。

俺の今の心境はこの一言に尽きる。
いま、内でも外でも大変な話題になっている内容。
それが何かは知っているし、あまつさえその原因が何かも分かっている俺としちゃー正直、耳に入れたくもない話だ。
俺なんかに話しかける奴がいるとは思わないが、知ってる手前きゃっきゃと話している奴らを前にどんな顔をしていいのか分からん。
ポーカーフェイスで切り抜けられるとは思うし、俺のことなんか気にもされてないから、そもそもどうってことないんだろうが……

「早く収まってくれないかな……ってか収まってくれ」

そんで、誰の意識にも上らないようになって欲しい。
切実に！

はぁ。っと吐き出した溜息が存外大きいことで、結構精神的にきているらしい。
そのことを自覚して、また溜息が零れそうになった。

こんなにも俺が参っている理由は簡単だ。
その原因があの“雪の女神さま”に関係することだからだ。
どういうことかと言うと

～～～　かいそうちゅう　～～～

「うわぁ～～～」

俺は眼前を埋め尽くすように展開されたその光景に、ぽかんと大口を開けていた。

すごい！

ただただ、凄いという単純で、陳腐な言葉しか浮かばないぐらいそれは凄かった。

「神のカーテンだ」

北の終着点、極寒の地でしか現れないとされ、その光景を目にできる機会は何十年、何百年に一度と言われる極上の光景が展開されていた。

遥か上空から、彩（いろ）とりどりの光の帯が風に揺れるように揺蕩（たゆた）っている。

絶妙な光彩は神秘的の一語に尽き、我知らず涙が流れるほどの光景だった。

しかし、

「あれ？」

ここからが問題だったのだ。

ゆらゆらと揺れる光の帯から、きらきらと別の光が瞬いていた。

それは光の帯の影に隠れるように、淑やかに、けど確かな存在感を持って溢れてきていた。

なんだあれ？

じっと目をこらす俺。
そして、見計らったように女神さまは言った。

＜これが、お礼よ＞

ほうら。と実に楽しげに、軽々しく手を振った女神さまは光る粒子を俺の方へと一斉に飛ばしてくる。
そのあまりの勢いにギョッとして、感動の涙はすっかり乾いた。
ついで、飛んできた粒子の実態を知って、固まった。

迫りくるそれは、最早粒子と呼べるものではない。
粒子と粒子が急速に結合し、粒は粒ではなくなり、結晶となり、塊へと変貌を遂げる。

よく目を凝らさなくてもわかる。
それは

「精霊結晶石！！」

しかも雪の精霊結晶石と、神のカーテンを凝縮した光の精霊結晶石だ。
それも、小指の先ほどの塊ですら高値で取引されている最上級ランクの。
その塊が小指の先とかいうみみっちいレベルではなく、拳サイズでいくつも飛んでくる。

ぶつかれば、タンコブどころではない。
当たり所が悪ければ別の世界に旅立てそうな、そんな凶器レベルの塊が勢いよく俺に向かってきている。

「ちょっと〜〜〜」

そーれ受け取れーーーっとばかりに次々と襲い来るそれらを、俺は勢い余って打ち上げた。

すぽーーーん

ってな感じで、未だ手に握りしめていた白銀の剣を振りかぶって。

＜あっ！＞

「あっ！」

女神さまのびっくりした響きと、俺のやっちまったって感じの声が重なり

＜きれいに飛んで行ったわね＞

大きな塊は、大きな弧を描いて遥か彼方。

御仁方からの剣であるからか、たった一度振り切っただけなのに、幾つもあったはずの結晶石は一つ残らず今や遠い空へ。

拳大とか、それ以上の塊だったものが、再び細かな塊になって勢いよく遥か上空へと打ち上げられた。

そして、それは起こるべくして起こった。

＜きれいな流れ星ね＞

「いや、むしろ流星群じゃないですかね？」

ぼけらっと見つめている先で、打ち上げられた結晶石たちが物凄い

スピードで地上へと降下し始めた。
流れ星とかいう可愛いモノではなく、流星群として。
雪の結晶石と光の結晶石であるからか、偶に見る流れ星なんて目じゃないぜと言わんばかりの光の帯を引かせながら、それはそれは盛大に降り注いでいる。

きっとあの流星群の到達地点は、明日の朝を迎えるころには冒険者のみならず、各関係各所がこぞって向かうことだろう。
何せ、見る奴が見れば流星群の正体が精霊結晶石だとすぐに気づく。
運が良ければ、かなりの数の最上級ランクの結晶石が形をとどめているはずだ。
そこに宿る力は、魔法師、魔導師や魔術師といった異能者もさることながら、神殿とか各国の王族とか権力者たちが喉から手が出るほど欲しがるに違いない。

特に神殿は凄まじいだろうな。
ハイエナのようにたかりそうだ。

光の精霊結晶石も大変珍しいが、雪の精霊結晶石の稀少価値で言えば雲泥の差だ。
何て言ったって雪の女神さまが知れ渡っていないのだから、雪の精霊結晶石の存在も知られてはいないはず。
ってことは……

「新しい神の誕生とか言われるかもしれませんね」

＜そうね。とっくの昔に生まれてるけど＞

何てーこった！
今の今まで何らかの事情で知れ渡っていなかった情報が、こんなこ

とで公になるのか！

「すっすっっっすいませーーーーーーーん！！！！！」

土下座だ！

直ちに、速やかに、謝罪をせねば！

死ぬ？

俺、死んじゃうの？

今日命日ですか？

御仁方の、天上の事情が絡んでるのに、俺なんかのせいで知れ渡るとか！

天罰レベルの話じゃないよ！

何て事してしまってんだ！　俺は！！！！

テンパって焦りまくりの俺は、ひたすら頭を下げた。

もう、下げる以外の何をすればいいのか、皆目見当がつかない。

そんな俺に女神さまは、こう仰った。

＜まぁ、いいんじゃない？　なるようになるでしょ＞

女神さまだ！

いや、最初っからわかっちゃいるが、女神さまがここにいる～～～～

慈愛に満ちた表情の女神さまに、俺はひたすら感謝の意を伝えまくった。

もう、涙をだらだら流しながら感謝しまくった。

俺、生き延びた！
死なずにすんだ！

もう、俺の中はこのことでいっぱいだ！
だから、欠片も気付かなかった。
俺がぺこぺこしている姿に、女神さまが悪戯な笑みを浮かべていることを。
そして、

「よかった」

心底安堵してへたり込んだのは、俺の部屋。
ぺこぺこしているうちに、いつもの如く俺の部屋へと帰ってきたらしい。
生還を果たした俺は、暫くの間ぼんやりと中空を見つめていた。
そんな呆けまくりの俺の脳裏に、麗しく悪戯な声が響いた。

＜今回はありがとう。お礼の品は粉々になっちゃったから、新しいのを用意しておいたわ。
　これは、わたしのことを全世界に告知したことを兼ねてだから受け取っといてね＞

その声の主は、先ほどまで話していた女神さまで、言葉の端々が刺々しい。
そのことに背中を寒くさせながら、新しいお礼って何だと首を捻る。
そして、目にした。

「これは……」

煌めく光は虹を内包した、新雪の如き眩い結晶。

サイズは小指の先ほどだが、その内包した力は雪と光の混合結晶。
女神の祝福を溶かしこんだ、神具を彷彿とさせるっていうか、そのもの？
というとんでもないモノが嵌っている指輪が、俺の左の小指に嵌っていた。

宝石の類を付けない俺は、当然のことながら引き抜こうとして

「うぎゃっっっ」

唐突に訪れた痺れと、凍える寒さに固まった。

＜あっ、そうそう。言ってなかったけど、それ外そうなんて思わないでね。
ず～～～っと付けてないと赦さないから。外そうとしたら……＞

うふふふっと軽やかな笑い声が脳裏に響く。

どうやら、女神さまは少々御立腹だったらしい。
そして、＜それとね＞と続けられたお言葉に、俺は頭を抱えた。

～～～　かいそうしゅうりょう　～～～

足早に廊下を歩きつつ、俺は女神さまからの贈り物を視界に入れる。
そこにはあの日頂戴したままの姿では流石にと冷汗をたらし、必死に懇願した甲斐あって一寸見ただけでは分からない細工がされた、鈍い輝きをした武骨な指輪が嵌っている。

「これからが問題なんだよな～」

その指輪を見ながら、俺は重いため息をついた。

どうしてかっていうと、女神さまがこう仰ったからだ。

＜その指輪、あなたが吹っ飛ばした結晶をあなたが近づいたら回収するようにしといたからね。　そうしたら指輪の格があがったりするかもしれないから便利になるかもしれないわ。＞

ウソだろ！

……と咄嗟に叫ばなかった俺は偉いと思う。

近づくってどの範囲が含まれるんだとか、これ以上神器の格を上げてどうしようというのかとか色々言いたいことはあったが、もっとも大きな問題はこれ。

回収が強制的に行われること！

俺の頭の中で俺の意思とは全然、まったく、これっぽっちも関係なく、この指輪が勝手に結晶の欠片をひょいひょいと吸収か何かする光景が頭に浮かんだ。

もう、血の気が引くとかいうレベルの問題じゃない。

これから先、確実に世間を騒がせる代物がマージナルに一欠片も来ないなんてことがあるわけがないんだ。

依頼品として持ち込まれることもあるだろうし、鑑定品とか、換金用とか様々な理由で来るはず。

そんな品々が所持者の手から忽然と消えるということが起これば……

騒ぎにならないわけがない！

そんなことが続けば対策に乗り出すわけで、そうなれば誰かしらが気付くはずだ。

気付かれたらどうなるか。
想像しただけで怖ろしい。

「どうか、気付かれませんように」

廊下の窓から空を見上げ、俺は儚い希望を吐きだす。

これからどうなるのか？

みんなの口から話題に上る度、そんで欠片の情報が上がる度にこそこそと人気がない方へと逃げることに、うんざりする。
だけど、逃げる以外にどうしようもないから、尚更うんざりだ。

「いっそ、全部さっさと回収しに行こうかな～」

なんとなく呟いたことだけど、なんか一番それがイイような気がする。
まぁ、もういろんな国、神殿、企業団体、冒険者とかが我先にと群がってるだろうから、

「いまさら無理か」

その考えは一秒も経たずに潰えたわけで。。。

「あ～あ。かみさまからの贈り物は碌なのがないよ」

空を見上げながら黄昏たって、仕様がないって思わないか？

伍、俺と御褒美が齎すもの（後書き）

四ノ話はこれにて「完」です。
次話をお楽しみに～

マージナルは今日も平和です？（前書き）

今回は“俺”が働いているマージナルについて。
閑話なので少々テイストを変えてお送りしております。
お楽しみください。

はい、どうも。
本日はどのようなご用件で？

はい。聞きたいことがあると？
何についてでしょうか？

えっ！
神霊課一種？
どちらでお知りになったのですか！

はっ？　小耳に挟んだ？
その課は、職員でもあまり知らないのですがね～～
あなたは、どうして……

うん？
あそこにいる奴に聞いた？

……。

ああ、すみません。
険しい顔になっていましたね。
申し訳ありません（ニコッ）

それならば、納得致しました。
しかし、何故お知りになりたいので？

ああ慌てなくても結構ですよ。
落ち着いてお話になってください。

ふむふむ。

ああ、そういうことですか。
あなたは初めてここに来られて、まだここをご利用になったこともなければ、どのような場所かもご存知ないのですね。

わかりました。
それでは、まずここがどのような場所であるかをご説明致します。

まず、ここマージナルが請け負っていることについてですが、これは主に3つあります。
民間のギルドでは扱いかねる案件。
逆にギルドでは扱わない案件。
後は国からの要請がそれです。

あれ？
分かりにくいですか？
それでは少し長くなりますが、一つずつご説明申し上げます。

まず、民間ギルドでは扱いかねる案件についてですが。
これは、ギルドに所属している人間では手に負えなかった依頼のことです。
一番多いパターンは、依頼を受けた者たちが死亡、もしくは重症を負って対処できなかったなど、半年以上解決することが不可能であった案件をこちらで引き受ける、といったものですね。
後は、ギルドが対処できないと判断したものもこちらに上がってき

ます。

次にギルドが扱わない案件について。
これはギルドでは簡単すぎたり、面倒だったりなどして人気がなくて引き受け手がいない依頼のことです。
こちらも半年以上放置、もしくはそうなるだろうと判断してこちらに上げてくるものになっています。

最後の国からの要請についてですが、これはそのまま。
言葉通りとしか申し上げられません。

以上、３つのものを扱っているのがマージナルとなります。
お分かりいただけましたでしょうか。

はい？
随分、厄介なものばかりをと？
全くもってその通りなんですが、まぁそれがここの存在意義のようなものですからね。
ここがなければ放置される案件が増えていくばかりですし、そうなれば、ねぇ？
とんでもない状態になりますから。
痛仕方ありません。

何やら難しいお顔をなさっていますが、どうなさいました？

なになに……
ここでも解決できなかったら、ですか？

ふふ。
私を含めてですが、ここの職員もここに所属している者もそれなり

の実力者であると自負しております。
厄介ごとでも何でも引き受けたからには、どんな手段を使っても達成いたしますよ。
これまでの案件も全て解決して参りましたし、これからもです。

これは自惚れでも何でもありませんよ。
それが出来なければならない場所なのですよ、マージナルは。
そのために有能な実力者しか所属していませんし、先に申し上げたようにどのような手段を使っても、解決いたします。
そのためには、如何なる犠牲も已む無し、それほどの覚悟とそれを成し遂げる実力者がつどっております。
いままでは（ボソッ）

おっと、すいません。失言を！
最後の言葉は忘れてください！
きれいさっぱり、お流しください！

これからも実力者しか所属いたしません！
ええ、ええ、あんな軟弱な役立たず以外はみな実力者なのですから！

っは！！
またまた、失礼いたしました！
あやつのことになるとどうも……
お恥ずかしい限りです。

え？
あいつって誰のことか、ですか？
口にしたくはないのですが……

あなた様が初めに問いかけられました、神霊課一種にただ一人所属

しております、あのカウンターにいる奴のことです。
あの男はある日突然、やってきまして……

あの、、、
嫌に真剣にお聞きになっておりますが、如何いたしました？
何か気になさることでもお有りで？
あの男のことは、マージナルの説明とは関係ありませんが。
それでも、ご説明いたしますか？

ええ、ええ。そうですよね。
あ奴のことはどっかに忘れてください。
それでは、その他のご説明に移らせていただきますね。

こちらでは得意分野ごとに部署を設けておりまして、案件に適切に対処しております。
部署はこちらのボードをご覧いただけますか？

ええ、後ろのこのボードです。
ここでは主に2つの省、異能省と戦闘省があります。
異能省では異能のスタイルで、魔法部・魔術部・魔道部と3つに分けておりまして、戦闘省では戦闘スタイルで近接戦闘部・中距離戦闘部・遠距離戦闘部と3つに分けてございます。
その各省各部の中で、異能省魔法部でしたら精霊課、言霊課など、戦闘省近接部でしたら拳闘士課、剣士課といったように能力ごとに所属場所を分けております。
能力的に多岐にわたる者の場合は兼任している者もおります。

以上がマージナルの簡単な説明となりますが、いかがでしょう？
そろそろ目的をお話になった方がよろしいのではないでしょうか？

なんのことだ、ですか？

ふふ。
なぜ私がここまで詳しく話していると思っているのですか？
知らない人間に親切にもご説明差し上げたとでも？
マージナルの実態を知らない方だから？

ふふふ。
そんなこと、あるわけないじゃないですか。
ここに来るのはマージナルを知っている者だけです。

ふっふふふふっ。
何故そう言い切れるのか、ですか。

先ほども言いましたよね～。
ここの主な案件は３つ。
ギルドが扱いかねた案件、ギルドが扱わない案件、国からの要請の３つだと。
どの案件も一般の方から直接受けることはありません。
よって、一般の方が依頼にくるわけがないのですよ。

それに、、、

分からないとでも思ってんのか？
お前のような薄汚い野郎が、人間の振りして聞きにくんじゃねーよ！
虫唾が走るんだよ！
さっさと正体現して、ここに乗り込んできた理由を吐けっつでんだよ！
それとも、何にも言わずに昇天させてやろうか？
ああん？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

どがん！！！！

「おっ？」

俺がせっせと書類仕事をしていたそのとき、爆音が響いた。
なんだ？　と目を向ければ、もくもくと煙が上がっている。

「へぇ、珍しいこともあるもんだ」

別に爆発が起こったことは対して珍しくない。
ここでは何でかあっちこっちで爆発だったり、暴動だったりが起こる。
何だ何だ！　と騒ぐのも馬鹿らしくなるぐらい日常茶飯事だったりする。
だからか、ってか元々そんな奴らばっかが集まってるからか、誰も騒いだりしない。
それなのに、俺がちょっと驚いたのには訳がある。

「あいつがこんなことしてるの初めて見たな」

それをやった相手が珍しかったからだ。

真面目で型物。
誰も騒がない爆発とか暴動にいっつも目くじら立てて、やれ器物損壊だ、報酬から引いてやると自体収集に駆けつける当の本人様がやったからに他ならない。

さっきまで話し込んでたと思えば、何やってんだか。

「ここは一つあいつに代わって、天引きするぞって言えばいいのかね？」

ちょっとにやけながら見てれば、爆発地点からノソリと黒い影が立ちあがった。
それは背中に黒い翼を広げ、頭に角を生やした典型的な悪魔のシルエットをしていた。
そのシルエットにちょっと、既視感？
ええっと……なんだっけ？

何か視たことあるような。
会ったことがあるような。

うんうん呻っていたら、煙が晴れた。
そんで、頭の霧も晴れた。

「あいつは、この間会った奴じゃないか！」

びっくり！
負け犬の遠吠えよろしく、覚えてろよ！　と叫びながら去っていった奴に違いない。
お願いごとは達成済みだったから、すたこら逃げてく背中を手を振って見送ったことを覚えている。
そいつが何でこんなところにいるのかは、さっぱり見当がつかないが、それにしても

「あいつも運がないな」

相手が悪すぎる。
異能省魔術部祓魔課一種、いわゆる悪魔祓いの超スペシャリストの前に現れるとか。
どんだけ運が悪いんだと、同情したくなる。

「さっさと地獄に戻らないと、強制昇天させられるぞ」

お前の逃げ足の速さを今こそ発揮しろ！

密かにあいつにエールを送ってみたわけだが

「ああ、やっぱそうなるわな」

鮮やかな術式が悪魔を覆う。
後はあっという間。
聖なる光に囚われて、しゅっと姿が蒸発していく。
呆気に取られた間抜けな顔で、地獄に帰れず昇天だ。
折角の逃げ足も役に立たなかったか。

「哀れな奴」

どうしてこんな危険なところにのこのこ来たんだか。
あいつの思考はどうなってるんだろう？
そんなどうでもいい疑問を浮かべれば、真ん前を人影が通り過ぎた。

「ああ、ムカつく。
なんで悪魔なんかがここに来るんだよ。
あいつのせいで余計な労働させられたじゃないか！」

通り過ぎざま悪態をつく悪魔祓いの超スペシャリストを横目に、俺

は思う。

「何で最初っから気付いてて、途中まで相手してやってたんだ？」

結局、問答無用で昇天させるんなら、話し込んだりせずにさっさとすればいいものを。

その辺がさっぱりわからん。

悪魔といい、こいつといい、訳がわかんらん。

そんな些細な疑問を残しつつ、今日もマージナルはいつも通り。

ちょっとやそっとの厄介事じゃ、マージナルの平常はびくともしない。

「今日も平和だな。」

マージナルの日常はこうして日々過ぎていくのであった。

壱、強制召喚！　神殿に急行せよ？（前書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。
第伍話目のはじまりです。
お楽しみください！

壱、強制召喚！　神殿に急行せよ？

「おい、神殿からの使いが来てるぞ」

「えっ！」

なんだそりゃ？

俺が事務仕事をせっせとこなしていたある日、妙に真剣な顔をした同僚に言われた言葉に絶句した。

「早く向かった方がいいと思うぞ。上には言っとくし」

更に続けられた言葉に、イヤな顔をしたのは仕様がないと思うんだ。だって、神殿からの呼び出しだぜ。

しかもすぐにってことは、そうとう緊急な要件なんだろ？

いい話なわけがない。

俺と神殿関係者は犬猿の仲なんだから。

「そんな顔してもどうしようもないだろ。」

そんな呆れた声と、さっさとしろって感じの圧力に負けて俺は席を立ったわけだけど……

「……いきたくないなぁ」

神殿に向かう足が遅くなるのは、どうしようもないことだと思うん

だよ。

「今度は、どんな嫌がらせがくるんだか」

神殿に呼び出されたら、大抵ってか、絶対面倒事の押しつけか、嫌味とか、わけわからん要求を当たり前のように付きつけてくるのだ。
そんな奴らのところに行くのに、スキップスキップらんらんらん♪気分で向かえるわけがない。

ああ、本当に憂鬱だ。

俺はどんよりとした空気を纏いながら、活気に満ちた通りを過ぎ、だらだらと足を進めた。
そして見えてくるのは真白な建築物。
偉容を誇る大神殿だ。

神の声が聞ける神子が祈りを捧げる、その神聖なる御座所。
その場所へ向けて多くの信者が、敬虔な面持ちで祈りを捧げている。
彼らの信仰する神々へ、一心に願うその姿は今、俺が相対している大神官様よりよっぽどこの場所に相応しい。

俺を見るといっつも不機嫌な大神官様に、軽い会釈。
そしたら、もう、ほんとそんなに嫌ですかってな具合にますます顔を歪めた。

そんなにイヤなら呼びつけなきゃいいだろ！
マジで、呼びつけんなよって言ってやりたい！

こんなことを思っちゃっても仕様がないってもんだし、そんな顔されちゃ～こっちも気分が悪いって。

だから、ここはさくさく要件でも聞いて、さっさと帰るとしますか……
ということで、
「御用件は？」
「……こちらへ」
あれ？
奥に行くの？
ここでさっさと要件言ってくんないの？
疑問を浮かべつつ、俺は大神官様の後を追う。
忌々しげな様子を一切隠す気がない大神官様は、静々と先へ先へと進む。
おいおい、どこまで行こうってんだよ。
その足は神官以外立ち入り禁止区域さえも通り過ぎ、一つの大扉に向かう。
精緻な紋様が淵を飾り、神々の象徴が見事なバランスで配置されているそれ。
夜の森を思わせる重厚な雰囲気の中に、軽やかな風や光、流れる水の気配が伝わってくる、実に芸術性に富んでいる大扉の前で、大神官様はぴたりと足を止めた。
その様子にだらだらと冷汗が止まらない。
いやいやいや、可笑しいでしょ。
この大扉の奥は御座所だろ？
ってことはこの中にいるのって……

「神子様がお待ちです」

「……（何の冗談だよ）」

厳かに開けられる大扉を前に俺は思う。

今すぐ、まわれ右して帰りて～

そんな俺の切実な願いを乗せた視線は、悲しいことに大神官様へは一切伝わらなかった。

ついでに言えば、一人で奥へ行けと無言の圧力にあっさり負けた。

そんなこんなで俺は前へ前へと進んできたわけだが。

「何してんですか！」

神殿の一角、もっとも奥まった場所であり、もっとも神聖な場所とされている御座所。

そこにいる人物を見て、思わず大声を出してしまった。

「なんじゃ、もう気付いたのか？」

「当たり前じゃないですか。気付かないはずないでしょう」

「ここの者どもは全く気付かなんだがな～」

そう笑いながら応えたのは外見だけなら、ここにいるのが当然の神殿内の外面上トップ。

世間では国のトップである王様とかより偉いとされている神子さん

だ。
だが、内面は全くもって違う。
本来ならいないはずの人。
いや、ヒトなどと言ってはまずいだろう。
なぜなら、そこにいたのは天上にいるはずの一柱なのだから。
それにしても不思議だ。
「どうして神子の体に降りてきたりしてんですか？」
何か用事があるんなら、めちゃくちゃ不本意ではあるが俺に何か言ってくるはずなのに。
どうしてまた、こんなややこしいことをしているんだか。
御仁方は本来、下界ともいうべきここことは違う階層にいる存在だ。
本当の意味で別世界の住人とも言える。
だからといっては何だが、御仁方は本体のままでは下に降りてこられない。
偶に精神だけで降りてこられるときもあるが、そのときは特別な場所に降りているらしい。
前聞いた話じゃ～特定の場所以外だと空気に酔うのだとか……
聞いたときはなんじゃそらとずっこけたものだが、体験すれば納得する。
あれは、酔うとか以前の問題だ！
即効目が回って、意識が飛んだ。
そら見たことかと鼻を鳴らして笑った御仁方にぐうの音も出なかった。

そんじゃ、御仁方は絶対に特定の場所以外には降りてこないのかというと、そこには例外がある。
今みたいに何かに降りてくればいいのだ。
ただ、問題がないわけではない。

「神子の体に降りたりしたら、どっちにもかなり負担がかかるんじゃないですか？」

そう。双方に負担がかかるらしいのだ。

確か、御仁方側は精神体の一部しか降ろせないから、能力に制限はかかるし容れモノをフィルターにしてもやっぱり下界の空気に多少は酔う。
そんでもって精神の一部が少しでも酔えば、やっぱり本体にも影響が出るらしく雪の女神さまみたいに体調を崩すこともあるらしい。

一方、降りられて御仁の容れモノにされた側、今回の場合は神子さんの方はというと、単純に次元違いの高位存在に魂を圧迫されるため肉体的にも精神的にも負荷がかかる。
どうなるかっていうと負荷が軽ければ、御仁が去ったら一ヶ月は寝込むぐらい。
重くなればなるほど寝込む期間が長くなったり、悪ければ昏睡状態になったりする。
そのまま死に至るようなことがないのが救いと言えば救いか？

つまるところ、どっちにとっても体に良くない。

「そんな渋い顔しなくてもいいではないか」

ううむ。と呻っていればお茶目に笑われた。

「いや、笑い事じゃないですし」

思わず突っ込む俺に、御仁が目元を細めた。

「ちゃんと理由はあるぞ」

そして御仁が口を開けて連ねた言葉に、俺は全速力で逃げたくなるのは……

まぁ、いつものことと言えばいつものことだったりする。

弐、俺と語られる理由

話をまとめると、こうだ。

１つ、地上に未知なる存在が出現した。
２つ、存在が上からでは確認不可だった。
３つ、下界で調査を敢行することになった。

以上。

何それ？

話を聞いて「はぁ？」とか不良っぽく聞き返した俺は悪くないと思う。
けど、御仁に言ったのはまずかった。
どれぐらいまずいかと言うと

「すいません、すいません、マジですいません！！！」

壁に逆さで宙摺りにされて、顔とか体すれすれに何かが高速で飛んでくるぐらいに！！！

「ほんとにすいませんでした！！！！」

ひいひい泣きながら必死の懇願で解放されたのは、更なる地獄を見た後だったことは追記しておく。

詳しくは言わない……

ってか、封印だ！
即効で何があったかは封印です！

「それで、未知の存在とか調査とかは分かりましたけど」

実際は全然わかってな……

「実際は全然理解してないのは、わかっておるわ」

ひっ！
心声は健在なんですね。

「もちろんじゃ」

そうですか。
いつも通りではあるが、何だろう。
いつもと違う空間でのことだからか？
結構、衝撃とも何とも言い難いものがある。

「それでは、正直ご事情が全くわかりませんが。それは一先ず置いておいて……
俺が呼ばれた理由って何なんです？」

「うむ。お主には吾の手足となってもらいたいのじゃ」

「って、どうしてですか！
神子さんに入ってるなら、ここの連中使えばいいじゃないですか！
俺である必要性ゼロですけど」

ここは仮にも数ある神殿の中でも本殿と呼ばれるところだ。

さすが総本山と言うべきか。
神殿の中には腐るほど神職者がいる。

そんな神殿にいる神子さんに入っているのだ。
御仁が一声かければ、それこそ感涙に咽び泣きながら喜んで手足となるものが何百といる。
どんなに困難なことであろうと、一も二もなく飛びつく姿が容易に目に浮かぶのは当然。
俺なんかをわざわざ呼びつける必要性は、全くない！

「ここの者共ではダメじゃ」

って、何でさ！
首をふるふる振りながら言われたら、ここの連中ちょっと可愛そうじゃないか？
七面倒臭い奴ばっかだけど、基本的には御仁方に毎日毎日祈りを捧げて生きてる奴ばっかだよ？
御仁方に尽くせれば本望的な奴らがダメとか。
なに？　ここの奴らは役立たずってことっすか？

「まぁ、そういうことかの」

「うわぁ、めっちゃ不憫じゃないっすか」

「勘違いしてはいかんぞ。今回の件に関しては、使えんというだけじゃ」

そんじゃ、普段の用事とかは？
とか聞くのは駄目なんだろうなぁ。
でもさ～

「それじゃ、何で神子さんに降りてきたりしたんです？」

神子さん何かに降りてきたりしなければ、俺が大神官様に睨まれることもなかったのに。

わざわざ俺と相性の悪い団体のトップに降りたのは、もしかして嫌がらせか？

「なんと、失礼な。

お主に吾が嫌がらせなぞ、したことはあるまい」

「え～。

いつもの使いっぱしりは、ちょっと嫌がらせめいてるんですけど……」

「なにを言っとるか。

お主が出来ることしかさせてはおらぬし、褒美も渡しておろうが」

じとっとした目線が、非常に痛い。

でもね～、出来ることってのが問題といいますか……

頭に巡る数々の苦難（お願い事）に、心が沈む。

確かに頼まれたことは達成してきたとは思う。

けど、だ。

それはあくまで、助っ人を付けられたり、アイテムとか渡されてたから出来たことであって、俺だけで出来ることなんてあった例（ため）しがない。

ということは、それは「俺が出来ること」とは違うのではないか、と……

「まったく、お主は……」

そんな風に愚痴愚痴思ってたら、ふぅ～と、いかにも呆れたと言わんばかりの溜息を吐かれた。

「毎回言っておるが、そろそろ観念したらどうじゃ」

「そんな……観念も何も、ないですよ。
俺は“普通”だけが取り柄みたいな、“一般人”ですよ。
そう思うのが当たり前じゃないですか」

「ほんに、往生際が悪い奴よの～。
その頑迷（バカ）なところは嫌いではないが、自覚せぬのは好かぬ」

ぷいっと顔を背（そむ）けられて、ちょっと驚く。
今日の御仁はやけに感情的だ。
普段ならころころと笑って、ここまで俺に付き合うこともなければ、好き嫌いを口にしたりはしない。
一体、どうしたんだろうと首を傾げながら、俺は一つの懸念に思い至る。

「神子さんに降りてるの、苦しいんじゃありませんか？」

降りている容（うつわ）れモノが合わなければ、御仁といえども辛いはずだ。
神妙に聞いてみれば、御仁がついっと視線を合わせてきた。

「ふふっ。吾のことなぞ心配することはない。
ことは急を要するのでな……」

そう言って御仁は笑う。
その笑みは世界への慈しみに満ちていて、思わず何も考えずに頷きそうになる。
だが、先の言葉はつまるところ……

「それって、どれに降りても変わらないし、神子なら何があっても融通が利くからってことですよね」

その訳に御仁は慈愛の笑みを作っていた口角を、くいっと上げた。
どうやら、正解らしい。

まぁ、よく考えれば神子さんほど都合のいい容れ(うつわ)モノはない。
なんと言っても、普段は神殿の権威の象徴として、御座所に日がな一日座っているだけ。
神殿としても特別な日でもなければ、居ても居なくても困ることはないだろうし……
普通のその辺の人に降りてくるよりも、よっぽどいいかも？

そう思っていたら、「如何にも」というように御仁が目を細めて笑った。

まったく。これだから、御仁方は……

下を向いて思わず呻ってしまう。
御仁が抜けたあと、もれなく寝込むことになる神子さんに同情するよ、ほんとに。

「それでは、参るぞ」

俺がそうして神子さんを憐れんでいたら、御仁の軽快な声がすぐ近

くで耳を打った。

何時の間に！

結構離れていたはずなのに、すぐそばにいる御仁にギョッとした。

そんでもって、ぽむっと肩に手が置かれた瞬間

「……！」

声にならない驚きの中、目を焼きつくすような光の奔流に晒され、

ついで身体が何かに吸い込まれていった。

参、俺とご機嫌斜めな砂漠旅？

そんなこんなで、俺は体は神子さん中身は御仁と共に砂漠を旅している？

「って、砂漠かよ！」

「なんじゃ、突然」

心の叫びを思わず声に出した俺に、御仁は振り返った。

「いえ。すいません。何でもないです」

振り返った御仁の顔に浮かぶ呆れた様子に、俺は咄嗟にぺこりと頭を下げた。

言いたいことは色々あるが、言ってどうにかなるわけでもない。

それこそ、いきなり連れてこられた上、碌な装備もしてないのにこんなところに来たこともだ。

……こんなところ。

そう、光の奔流に目が眩み、吸い込まれたと体感した直後。

遮るもののない灼熱の太陽が頭上に燦々と照りつけ、その暑さといったら、もう。

干からびるのも時間の問題か？　と考えざる負えない砂漠。

しかも凶悪極まりない砂蠍（サンドスコルピオン）が待ち構えている砂漠に、何故こんな普段着丸出しの格好でうろつかないといけないのかと文句を言いたくても、言ってはならないのだろう。

ってことは、わかってはいる。
だけど、どうしたって思うのだ。

ああ、やだやだ。
何でこんなとこにいきなり来てんだよ。
ついた途端、不機嫌になっちゃうしさ～。

そんなグチをちらっと思えば、前から舌打ちが聞こえた。

「ったく、ぐちぐちと女々しい。
太陽ぐらいなんぞ困ることもあるまい。
砂蠍（サンドスコルピオン）とて、何ほどのことがあるというのだ」

「舌打ちしなくたっていいじゃないですか。
それに、何言っちゃってんですか？
この全身から滴る汗を見てくださいよ。
ヒトの身にはこの砂漠は辛い場所なんですよ！
その上、砂蠍（サンドスコルピオン）は砂と同化して発見しにくいし、
群れという数の力とその強力な毒で襲いかかってくるんですよ。
一斉に飛びかかられたらすぐ死んじゃいますって」

御仁と俺では力が違いすぎる。
まさしく、天と地。いやいや地中、それとも地底か？
まぁ、とにかく比べることすらおこがましいほどに違い過ぎる。
神子さんの体に一部しか降りていなくても、その溢れる御力はあまりにも違う。

そんな全力否定をする俺に、御仁は非情だ。

「呆けたことを言っとらんで、さくさく歩け。

お主がこんな砂漠如きでへばるわけがあるまいに」

「……その心は？」

「そろそろ自覚せい。
お主は“視えている”のだから、この体よりも余程ここに対処できるわ」

何の対策も講じてくれるでもない上、御小言を頂戴した。

「せめて御慈悲ぐらい施してくださいよ」

情けない顔で言っても、今日の御仁は本当に容赦がない。

「自分でなんとかできる相手に、慈悲も加護もせぬわ。
むしろ、地上酔いをしている吾の気分を治して欲しいぐらいじゃ」

下界に降りてきた代償とも言える地上酔いは本当にさっきよりも酷いようだ。
砂漠を進むにつれて、ますます御仁は機嫌が悪くなっていく。

そんな御仁を相手にすれば、俺は溜息をつきつつ何も言わずに後に続くしかない。
ただ、愚痴を心の中で吐くぐらいは許して欲しい。
そして、これだけは物申したい！

なんで捜索場所が町中とか、街道沿いにないんだよ。
未知の物体め、遭ったら覚えとけよ！

遭ったときにどうするかなんて分かりはしないが、そんな愚痴を心

中で呟いて、俺はつっと目線を上げた。
そこには御仁から溢れる御力に群がる精霊たちが、どっからやってきたんだと言いたくなるぐらいにいる。

その数たるや、いやはや……

土や風、光の精霊から、どこから飛んできたのか少ないながら水や樹に連なる精霊たちすらいる。
こんな砂漠にいることがおかしいほど、数多の精霊たちで溢れている光景は、俺の目が狂っているのではと心配になるほどだ。

御仁が言うには、この“視えている”精霊たちになんとかしてもらえってことなんだが……

うーーん。めちゃくちゃ、気が進まないんだよなー。
でも、この暑さも砂蠍（サンドスコルピオン）も俺では対処できないし。
取りあえず、言うだけ言ってみるか？

「お願いします。助けてください」

口に出しては明瞭簡潔に。
その言葉の中に気持ちをこめて、ぺこぺこと頭を下げてみたところ……

御仁の御力に中てられ、浮かれ気味な精霊たちはニコニコ笑顔でこう言った。

＜任せなさい！＞

その力強い返事はいつもなら嬉しい言葉だ。

しかし、やっぱり今は不安を誘う。

＜そ～～れ～～～＞

「なっ、やめ、加減してってか、もっと冷静になってくれーーー！！！」

そして、その予感は見事に的中した。

浮かれ気味ではなく、浮かれている精霊たちは過剰な力を存分に振るってくれやがった！

どのようにというと、以下の通りだ。

1つ、俺の頭上から一切の光が消えた。

1つ、周囲一帯に寒風が吹き出した。

1つ、大量の水が俺目がけて走ってきた。

それが同時に起こった結果は……

【答】全身が一瞬にして泥だらけになったと思ったら、暗闇の中急速に体温を奪われ凍死寸前。

「俺を助けるんじゃなくて、殺す気だろ！」

砂漠で泥の氷漬けなんて冗談にしても酷過ぎる。

やっぱ頼むんじゃなかった。

浮かれた精霊は酒に酔って正体をなくした奴と同じだ。

全くもって、加減というものを知らない。

今もふらふら揺れながら、怒鳴る俺にきゃらきゃらと笑っている。

「ほんとに勘弁してくれよ」

地上酔いで不機嫌な御仁も、御仁の御力に酔っ払った精霊たちも性質が悪い。

この先の道行が不安で不安で仕方がない。

御仁のお供は始まったばかり。

この先、どうなることやら。

溜息ばかりが零れる俺を、誰か助けてくれないだろうか。

俺の砂漠横断は前途多難だ……

「ああ、早く目的地に着いてください」

今はそれだけを心から祈った。

そして、

「ちょっと、待ってくださいよ～」

スタスタと先を歩く御仁に焦りつつ、いそいそと冷たい泥から這い出て、焼けるように熱い砂漠をイヤイヤながら歩き出すのだった。

四、俺とげんなり砂漠旅（前書き）

随分あけてしまって、すいません！！
みなさまに楽しんでいただけたら幸いです。
それでは、どうぞ～～

四、俺とげんなり砂漠旅

「はぁ～」

精霊たちにノリで殺されかけた俺だが。。。
砂漠横断のあまりの、そう、あまりにも辛く過酷なこの横断に、懲りずに何度か頼んでみた。
この灼熱地獄の中にいるよりは、少しでも……いや、もしかししなくても大幅に改善しうる存在が眼と鼻の先にいるのだ。
頼まないほうがおかしい。

と、何度も思って、何度も頼み、何度も後悔して、それでも懲りずに頼んでみて……

結局頼むのは諦めた。

「あぁー」

暑くて、だるくて、しんどい……

けどね～今のあいつらには頼むのなんか、無理無理。
何回頼んでも、何度試してみても、所詮酔っぱらい。
どんなに言葉を尽くしてもあいつらにまっすぐに届かないんだよ。

凍るは、暗闇に閉じ込められるは、風で飛ばされるは……散々だ

「ふぅー」

御仁がいるだけで、精霊がこんなことになるなんて……

「はぁ～」

きゃらきゃらご機嫌な精霊たちを見る俺は、大きな溜息が後から後から出てきて止まらない。

無駄に多くいるんだから、1体ぐらいまともな奴がいてくれてもいいのに。

「はぁ」

とぼとぼ歩きながら、また一つ。

そんな俺の様子が頭に来たのか、俺より龍一頭分前を歩いていた御仁がじろりと凶悪な視線を向け、間髪いれずに怒鳴ってきた。

「うるさい！」

「いてっ！」

もれなく拳骨らしき衝撃を頭上に入れるという、器用なおまけつきで。

はぁ、がんばって愚痴らず、騒がず、粛々と御仁の後を着いて行くしかないわけですか。

「はぁぁ」

って思ってるのにも限度ってあるよね！

「どこまで歩けばいいんですか～」

すたすたと歩く御仁に、俺は疲れ切った声で問う。

いや、ね。

これが、ちょっとやそっとのことなら、俺だって我慢するよ？

あんまりグチグチ言ってれば、またぞろ御仁の機嫌がまだ下がんの？

ってぐらい下降することなんてわかってるからね。

一度はため息も我慢しようって、小さく心で誓ったりもしたさ。

でも、それにも限度があるってのは当たり前のことだろう？

「ああ、夕日がきれいだ……」

砂漠で見る夕日は、妙に大きく感じる。

それは風にさらさらと流れる砂に、赤々とその色を混ぜるからだろうか？

遥か彼方に沈む太陽は、目を細めても眩しく感じる癖に、ひどく穏やかだ。

あんなに仄白く反射していた砂が、急速に色を変えていく。

白から、黄色へ。黄色から赤へ。そして赤から紫へ。

刻一刻と沈む夕日を追うように、砂漠もまたその色合いをくるくると変える。

それは、ひどくきれいな光景だった。

だったが、だ――――

「うれしくねぇ……」

それが見れて、「まぁ嬉しい！」なんて言えるわけないってーの！
あれからどれだけ歩いてると？
砂漠観光ツアーに来てるわけでもないってのに、砂漠の夕日に感動できるわけない。

「もう、いやだ」

砂漠を渡る格好ではないだけに、長時間灼熱の太陽に曝されたせいで、体中が痛い。
最早日焼けなんてもんじゃなく、火傷だ火傷！
顔も手もジンジンと熱を孕んで痛みだしている。
明日と言わず、今夜にも肌が剥けそうだ。
体中にまとわりつく砂にも辟易する。

こんな状態で景色にうっとり、感動しまくることなんかあるわけがない。
きれいな景色よりも、目的である未知の物体に遭遇したい。
そんでもって、さっさとここから帰って、砂まみれの身体をさっぱりしたい！

ああ、もう！
ほんとにザラザラするのはイヤなんだよ！
髪を払えば砂が落ちてきて目に入りかけるわ、口がガリガリするわ……
服の間に入りこんだ砂も、地味に肌をこすって痛覚を刺激するしで、ほんとに頭にくる！
この不快さを一発で解決できる方法が目の前にあるのに、それが出来ないのもムカつく！

もう、もう、もう、ほんとうに

「いーやーだーーーー！！」

「うーるーさーーーーい！！」

思わず夕日に向かって叫んだ思いのたけに、御仁の思いがこもった鉄槌がゴツンッと降ってきたのはほぼ同時だった。
気力、体力がすり減っていた俺は、夕日が沈む砂漠よりも早く、一人暗闇に吸い込まれていった。

「さむっ」

ひゅるっと身体を撫ぜた風に、ぶるりと震えが走った。

「気付いたか？」

寒さでうっすらと目を開ければ、暗がりにも関わらず神々しく輝く御仁が目に入った。

「ええ」

生返事をしながら、ぐいっと身体を起こす。
立ち上がろうかなとも思ったけど、少し離れたところにいた御仁が側に来てくれているので、座っていることにした。
来てくれるんなら、こっちから行かなくてもいいし。
正直、身体の節々が痛むから助かる。
投げ出している足は、締め付けられるように痺れて……

うん？　痺れる？　何で？

何で締め付けられるように痺れてるんだ？
いくら疲れているといっても、痺れたり、まして締め付けられるような感覚になるなんてことはないはずだ。
なのに、何故？

俺は首を傾げながらそっと目線を下げた。

「はぁ？」

すっとんきょうな声が出る程度に抑えた俺はなんて理性的っ！
……じゃなくって、あまりの事態にただただ硬直してしまった。

これは一体どういうことなんでしょうか？

思わず御仁に目だけで助けを求める俺の態度は、間違っていないと思う。

伍、俺と絡むモノ？

「なんなんだ？」

これはどっから現れた？
ってか、なんで絡みついていやがる？

いや、なんというか……

「これ、なんですかね？」

下半身に絡みついているそれからそっと目を背けて、御仁に縋る。

ええ、縋りますとも！
なんていっても、御仁は天上の存在！
頼れる上のかたですもんね！

「吾にはわからぬ」

そんな期待に満ち満ちた俺を、御仁は素っ気なく、あっさりと言いやがりましたよ。
あんまりあっさり言うもんだから、咄嗟に言葉が浮かばず、どうでもいいことが口から出た。

「そうですか……」

「そうじゃ。
吾らの意志ではなく、この界に迷い込んだモノの正体ではあろうがのう」

「そう、なん、ですか……」

はっきりきっぱり、爽やかな御仁の言に、俺はぽかんと呆けた返事しかできない。

「いやはや、どっから来たのやら」

むむむ、っと腕を組んで呻る様は御仁の仕草としては珍しい。
やっぱり人に入っているから、多少容れもの(うつわ)に影響されているのか？
そんなどうでもいいことを考えてしまうのは……

わかってる。ああ、わかっているとも、現実逃避だ！
必死に現実から目をそらして、現実逃避をしてもいいだろう？

けど俺もただ現実逃避を決め込んでいるわけじゃないぜ！
そう、必死になって砂を引っ掻いているんだ！
せっかく少しばかり復活した体力を使いきるが如く、そりゃもう、必死に！
爪の中に砂が入り込もうが、口に入ろうが構うものか！

えっ、どうしてかって？
そりゃ、決まってんだろ！
いま、この瞬間から逃れられるなら、血管振り切るぐらいの勢いでやってやる！！！！

「こんの～～って、おい、こら、っちょっと？」

って、考えてたときもありました。。。

「えっ、いや…だから、ちょっと、やめ、やひゃひゃひゃっ
ほん、と、やめ、ぐひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃっ」

俺が砂を掴もうとするたびに、ひたすらくすぐられている。
なぜ、こんなことになってる？

「お主が逃げようとしたからではないか？」

そんな解説いらないんですけど？
ついでに、御仁のセリフに“その通り”的な感じで同意の意思を送ってくんなよ。
そんでもって、何で拘束するでもなく、くすぐりになるわけ？
これ、地味にきついんですけど？

「ってか、そんなっ、そんな変な、動きで、身体を、くすぐるんじゃね～～」

ひゃっひゃと苦しい息の下から絞り出した心からの願いは

“それじゃ、構ってくれる？”

そんな交換条件のもと達成された。

◆◇◆◇◆◇

なんせ相手は蔦？　いや、縄？　蔓？

……っと、とにかく勢いよく絡み付いたり、締め付けてくる謎生物だ。

どうしたらいいのかなんてさっぱり。

「ってかんじなんですが？」

「吾に聞くでない。」

俺のささやかな疑問は、ばっさり切られた。

「なんか、今日はほんとに冷たくないですか？」

無理やり連れ回されてるのは俺なのに。

なんか、俺の扱いひどくないですか？

「そんなことは、ない」

「どの口がそれを言うんです？」

うっすら笑いながら言われた否定ほど、信じられないものはない。

俺は胡乱な目つきで御仁を見つめるが、御仁の表情はまったく動かなかった。

――――――なんか、負けた。

意味はないが、何か負けた感じがする。

まぁ、御仁は天上の存在だ。

勝とうなんて思うはずもないから、いいっちゃいいんだけどね！

そんなどうでもいいことで、ちょっと悔しくなりつつ、視線を戻す。
そこには、

“もう、早くあそんでよ～”

くねくねと揺らぎつつ、俺の脚を締めたり緩めたり。
這いずったり、滑ったりしている“何か”がいる。

「……どうすりゃ、いいんだよ。ってか、何がしたいんだよ。」

“あそんでくれたらいいよ?”

いや、だからどうやって蔓みたいな奴と遊べばいいんだよ?
妙に明るく弾ける笑顔を連想させる声で言われたところで、ねぇ。
じゃぁ、楽しく遊びましょ～なんてできるわけないだろ!

お前で縄跳びとかすればいいとか?
って、それじゃ～俺がお前で遊んでいるだけで、お前と遊ぶことにはならんしな～。
う～～～む。

「せめて犬とか猫みたいだったら、遊んでやれるけどな～」

くねくねしながら俺を待っているっぽい、そいつに思わずため息が零れる。
すると、ぴたりとそいつの動きが止まって、

“それって、なに?”

くねっと首を傾げるように先端が傾いた。

六、俺と犬＋猫？

「イヌ」

それは主人に尽くすことに喜びを感じている……かもしれない、四足歩行の哺乳類だ。
決して犬牙族（ワーハング）みたいな、喧嘩上等、文句は俺に勝ってから言え！ってかんじの戦士系種族の代表格みたいな奴らのことじゃない。
主人に褒められたらしっぽをぶんぶん振って、雪が降っても振らなくても走り回る、散歩大好きな動物。
それが、犬ってもんだ。
愛玩（ペット）動物ってだけでなく、番犬とか、狩猟犬とか、牧羊犬とかいろんな場面で活躍できる。それも特徴。

「ネコ」

それは一日の半分以上寝て過ごすと言われいている、四足歩行の哺乳類だ。
決して猫爪族（キャンニール）みたいな、甘いわね、捕まえられるなら捕まえてごらんなさい。ってかんじの隠密行動と俊敏性にやたら特化している、怖ろしい暗殺集団じみた奴らのことじゃない。
日がな一日、日向ぼっこをのほほんと楽しみ、煩わしいことからはするりと逃げる、自由気ままな動物。
それが、猫ってもんだ。
愛玩（ペット）動物って扱いが大半だけど、鼠獲りとか使い魔とかになってたりもするな。

「イヌとネコってのは、こんなんだよ。」

“ふ～ん”

砂の上に絵を描きながら、現在絶賛説明中です。
多少横道にそれたりもしたけど、まぁいいだろう。

イヌとネコについて改めて考えると、どーしても獣人族の中でも割とポピュラーな2種族が頭に浮かぶんだよなぁ。
なんとなく、ついででも言いたくなるのは……

奴らとは、違うんだ！

って分かってもらいたいからだ。
ぐっと拳に力を込めて主張するのだって、その心の表れだ！！

マージナルにも犬牙族（ワーハング）と猫爪族（キャンニール）が、当然ながらいる。
マージナルの奴らが強いってのは分かり切ってるといえば、そうなんだけど。
奴らの存在感は半端ないのだ。
戦闘狂だろお前っていいたくなる奴とか、少しぐらい気配を出せよと言いたくなる奴とかばっかだし。

間違っても、あのもふもふの動物たちとを一緒くたには絶対したくない。
そんなのは、癒しを提供してくれる、あのもふもふの子たちへの冒涜だ！

つまるところ、

「イヌとかネコとかは、わりとかわいい子たちなんだよ」

うむうむと深く頷きながら言う俺。

その俺に、謎生物はこう言った。

“それじゃ、それになったらいいの？”

「はい？」

“それじゃ、こんなかんじ？”

俺の疑問はスルー。

こんなかんじと言った途端、ぼわんと黒い煙みたいなものが上がった。

そして、現れた。

“どう？”

「はぁ？」

そこに新たに現れたものを前にして、俺はぽかんと大口を開けてしまった。

“どう？　どう？”

俺の足元をぴょんぴょん跳ねるのは、四足歩行の哺乳類らしき生物だ。

犬みたいな鼻に、猫の瞳孔。耳はへにゃりと垂れ下り、しっぽは長くふらふらと揺れている。

そんなのが上機嫌に俺へと笑っている。

“いぬってのと、ねこってのになった？”

「……あ～、そうだね」

とりあえず、イヌとネコを足したらどういう風になるのかはよく分かった。

かわいいかも？　とちらっと思う瞬間もあるが、正直かなりビミョーだ。

やっぱ、イヌはイヌ。ネコはネコの姿がしっくりくる。

見慣れていないせいとかじゃなく、異種族を混ぜるのはやっぱダメだ。

そして、犬牙族（ワーハンド）とか猫爪族（キャンニール）とか、異種族間で結婚しても子どもができないか、できてもどっちかの種族になる理由が分かった気がする。

やっぱ、異種族の壁は高くないとな。

新種の珍奇な生物がわらわらいるってのも、面白いとは思うけど……

いやいや。やっぱダメだ。

ちょっと想像しようとしたけど、なんかダメ。

想像しちゃダメ。

“これで、あそんでくれるよね？”

そんな、どうでもいいことに思いを馳せる俺に、こきゅっと首を傾げてのおねだり。

一体どこでそんな技を！

ちょっと、ちょっと。なんか訳もなく可愛く見えちゃったよ？

びみょ～な感じだったのに、なんだよそれ？
小首傾げてのおねだり光線は、イヌとネコが合体しても健在なのか！
異種族の高い壁は、もしかしたら、超えてもいい壁なのかもしれない……
そんな血迷ったことを思ってしまった。

七、俺とさよなら、ありがとう

「うわわっ、やめろって」

じゃれてついてくる犬と猫が合体した珍奇な生物。
そいつの手元やら絡みついてきそうなしっぽを、ぺしぺしと叩く。
それが面白かったのか、なんなのか。
俺の手をよけてみたり、逆にしっぽでくるりと手首を巻いてみたり。

これって、遊んでることになるのか？

「……」

まぁ、きょろきょろと目を動かしながら、手元を追っている様子からみれば、きっとそうなんのか？
……文句はないみたいだから、いいんだろう。たぶん、だけど。

でも、ぶっちゃけ思うんだ。

「俺、何やってんだろう？」

何故に砂漠のど真ん中で、こんなことをしてんだ？
こんな、どうでもいいことに付き合う理由ってあるんだろうか？
そんな疑問？　を抱えつつじゃれてくるのならって感じで相手している。

じゃれてくれれば、結構かわいいんだよな。
なんか、微妙なかんじがするのはそのままだけど、それはそれでイ

イやって感じだ。

にやにやしながら、相手をしていれば奴の耳がぴくりと動き、そのまま動かなくなった。

なんだ？　なにかあったか？

その奇妙なまでの静止に、俺の手も止まる。

それと、同時にちょっとばかし不安にもなった。

“ありがとう”

眉根を寄せて、奴を見ていれば静かな声が零れた。

「うん？」

“まんぞくしたから、もうかえるね”

きらきらっと目を輝かせたかと思えば、目を伏せた。

下を向いた目は、寂しげに陰っていた。

「帰る？」

“うん。もう、かえる。”

しかし、俺に応えた声は強く、こっちを向いた目は嬉しげに細められた。

そして、ぐにゃりと空間が歪む。

“じゃあね”

奴の身体が歪んだ空間に吸い込まれていく。

「ああ、じゃあな」

そして、歪みが収まったと思ったら、そこには何もいなくなっていた。

「帰ったようじゃな」

「そうですね」

呆気なくいなくなった奴に、少しの寂しさを感じつつ振り返る、俺。

「……なんか、空気でしたね」

「何のことじゃ？」

「いえいえ、何でもないです」

やべ～、思わず本音がぽろりと出てしまった。

いかんいかん。

今の今まで御仁の存在感まったく、感じなかったなんて。

まるっきり空気になってたなんて、本当のことを言ってしまった。

って、はっ！！

やばっ、こんなこと考えてたら……

「ふ～～ん。空気とはのう？」

御仁の目つきが、怖ろしく吊り上ってる？
これって、怒ってますか……ね？

「いや……ははは？」

笑って、誤魔化すのはなしですか？
なしなんでしょうか？

「なんです？　その力の塊は、なんなんですか？」

「うん？　少しお灸を据えておかねばならんようだからの～」

「いやいや、ちょっと落ち着いてください。
ここは、冷静に！　そう、冷静さがっ……」

力の塊が迫ってくる。
空気がキュウキュウとあり得ない音をたてている。
そして

「いーーーーやーーーーー！！！」

ばこんっっと砂漠の砂を巻き上げながら、力の塊が真正面からぶつかった。
霞んでいく意識の片隅、今まで酔っ払っていた精霊たちがじっとこっちをみていた。
そして、酔っているとは言えない素早さで、一斉に目をそらした。

それって、ないんじゃないか？

小さな不満を浮かべながら、俺は完全に意識を失ったのだった。

裏話、吾から見た奴は……（前書き）

上の御仁から見た、俺の印象は？　というかんじの話です。。。
楽しんでいただけたら幸いです。

裏話、吾から見た奴は……

まったく、わかっておらん。

吾はきゅ～っと目を回して気絶している男を見て、ため息をつきたくなった。

今回の件は大変な珍事であった。
なぜこのようなことになったのか、吾にも検討がつかぬ。
しかし、起こったことは起こったこと。
事実は覆らぬし、結果もまた然り。

どこからともなく現れた生命体は、誠にけったいじゃった。
吾の眼をして、判然としないというのは怖ろしい事態でもある。
じゃというのに、こやつは先刻まで何でもないことのように扱っておった。

「うわわわっ、やめろって……」

などと笑いながら、ぺしぺしと正体不明のものを叩く様は、そこらの犬猫と扱いが同じ。
困っておるのか、楽しんでおるのか。
微妙な笑みをも浮かべておった。

この世界とは異にするモノをよくもまぁ、相手にできるものじゃ。
吾には出来ぬ。

なんせ吾と同等の格を持ちながら、性質が違い過ぎるのだ。

吾と反発することは明白。
接触をしようものなら、ここら一体がどうなるか分かったものではない。
それが分かるだけに、こ奴に相手をさせるしかなかった。
そして、こ奴は“あれ”を満足させるだけでなく、何事もなく送り返しおった。
善き結果に、さしもの吾も安堵した。
もし、帰りもせず留まり続ければ、世界が崩れるところであったしの……。

「それにしても、こ奴は困ったものよの～」

吾と同格のモノを相手にしておる、その事実を分かっていながら、理解しようとはせぬ。
まったく、頑固者目が！
それがどれだけのことか、少し考えれば分かろうに……

地上種の個体が持つ力なぞ、どうということもない。
内に宿る力、人の言うところの異能もさることながら、我らの“声”を聞けるだけの存在、我らが加護を施した存在。その持てる力の大きさなぞ、単にあるかないか、大きいか小さいかでしかない。
世界にはなんの影響もない、ほんに他愛ないものよ。

しかし、こ奴は違う。

“視る”

この一事がどんなに重要なことか、一刻も早く自覚して欲しいものじゃ。

「まったく、困った奴よの～」

吾は、ふ～と吾らしからぬため息をついた。

ふむ。

どうやら、肉体に引っ張られているという、こ奴の考えはあっているのやもしれぬ。

「まったく、困った奴じゃ」

ふふっと、今度は口角があがった。

楽しいという気分のままで、“自然と笑う”というのも面白いものじゃな。

こ奴の側は、面白い。

ヒトの身でありながら、吾らに近い珍奇なヒト。

この地上でただ一人、吾らを“視る”ことができるその珍奇さ。

早く、自覚してほしいものじゃな。

「さて、帰るか」

ひょいっと気絶しているこ奴を浮かせ、吾は宙空に円を描く。

夜の砂漠に、尚暗い闇がぽかりと開いた。

その事実に、ほっとする。

“あれ”が現れた頃から、すでに空間には異常が出ておったのだ。

そのため、空間を大きく渡るようなことは控えねばならなかった。

肉体を使い、砂漠を渡る。

まったく、難儀なことよ。

早々に“あれ”が元の次元に帰ってくれたことは、ほんに助かった。

暗闇に入っても異常はない。

これで、すぐにでもこ奴を送ってやれるし、この肉体も返却できよう。

「疲れた。疲れた」

やれやれと肩を竦め、吾はそっと砂漠の空間を閉じ、帰路へと着いた。

裏話、吾から見た奴は……（後書き）

伍ノ話はこれにて幕となります。

次話は少し違うところからの依頼にしようかな……

壱、飛翔せよ！　依頼主までひとっ飛び？

「なんだ？」

目の前をひらりと何かが過ぎって、思わず手が出た。
柔らかくって、頼りない感触。
手に掴んだのは、真っ黒い一枚の羽だった。
この辺りの鳥にしては大きい。

「ってか、これ鳥の羽じゃなくない？」

よく見るまでまでもなかったか。

――――風岬の大渓谷にて待つ

そんなメッセージ機能のついた羽なんて、その辺の鳥どころか、どこにもいない。
これはただ単に羽を真似ただけだった。
多分ってか十中八九、このメッセージを送った誰かさんの趣味だ。
そして、その誰かさんの心当たりはというと――――

まぁ、ばっちりあるよ！
すぐに思い浮かぶぐらいには、ばっちりとね！

……って、あるにはあるけど、なんていうか、なんかな～

「会うのとかは、全然いいんだけど。
むしろ久々にお会いできるのは嬉しいけど……
問題は場所なんだよな～」

風岬の大渓谷といえば、草木も生えない不毛地帯。
人も獣も住めない大地に、ぼっかりと口を開けている裂け目の底は果てしない。
どこまで続くかわからない大地の裂け目から、世界の絶望とも言われている。
自殺志願者すら避ける、怖ろしい渓谷なのだ。
そんなところに来いと？
ちょっと、イヤだなと思うぐらいには行きたくない場所だ。

まぁ、呼ばれているからには行くけどね。
それに、ぶっちゃけ別にそこに行くのは、いいっちゃ～いいんだ。
けど、問題は移動手段だ。
そんな怖ろしいところに、連れてってくれる業者さんなんかいないよ？
観光地とかになるわけもない、めちゃくちゃ辺鄙なとこだし。
ここから行くにしても遠過ぎるんだよね。

さて、どうしたものか？

そうメッセージを見ながら考えていれば、「くわっ」と窓の外から鳴き声が聞こえた。
なんだ、なんだと見てみれば、

「さすが、よくわかってらっしゃるようで」

そこには、大きな大きな鳥が滞空。
俺の3倍はゆうにあるだろうほどの大きさに、若干及び腰になったのは、何も俺がビビりなせいじゃない！
普通に、窓の外にこんな大きな鳥がいたら驚くだろう！

しかも、そいつが俺をじっと見つめてくるのだ。

恐いだろう？　恐いって思わないか？
そいつの眼がギロッて睨んでくるんだぜ。
まるで、これから食べてやるぜぐらいの目線で！
恐いって！

「くわっ」

でも、鳥にとっては俺の恐怖心なんか関係ないらしい。
滞空状態のまま、するりと背を向け、振りかえりざまもう一声。

「くわっ」

どうやら、さっさと乗れってことらしい。

「それでは、失礼しま～す」

眼光鋭い鳥に気圧されつつ、そっと背中に乗る。
ふわりとする羽毛は、滑らかで手触りが最高！
なんか、テンションあがって、さわさわしちゃったりとか……

「くわっ」

「すいません！」

どうやら、ダメらしい。
残念だ。

そんなこんなで、気づけば俺は巨大な鳥に一路、風岬の大渓谷へと

運んでもらうことになった。
余計なお触り厳禁！　そんなことしたら落としてしまうぞ！
というちょっぴり切ない気分になりながら、遥か彼方へと向かうのだった。

弐、俺と屋台と怪しい肉？

「困ったことになった。」

いやに真面目な声で言われたが、俺はぽかんと口を開けて呆れるしかない。

「いやいや。何言ってんですか？」

こんな、岩だらけの木も草も生えない荒涼とした大渓谷。
世界の裂け目の前で思わず突っ込んでしまった。
それというのも、

「なんで、こんな場所で屋台なんぞ出してんですか！」

ありえないから。マジで！
何考えてのか、ほんとにさっぱりわからん。

「ここまで来るのに、苦労するだろうと思ってな」

したり顔で言われても、理解できん。
こうして、御自ら屋台を出して、ぱたぱたと肉を焼いているのが、俺のためって？
疲れて空腹な俺のためっていうのか……

それって、なんかずれてませんかね？
そこまで考えてくれるなら、何もこんな辺鄙なところに呼ばなくても。

……でも、イイにおい。

「うまいぞ？」

ほら、と突きだされた肉汁滴る串焼き。
俺は、神妙な顔で頭を下げ、

「頂戴いたします」

ありがたく受け取った。

うん？　断るとでも？
ありがたく頂戴しますとも。
そんなの、当たり前ですよ？

だって、わざわざ手ずから焼いてくださった一品！
それを、受け取らないなんて、屋台を出してることよりも、ありえんだろうがっ！！
ぐ～と盛大になる腹の虫に促されるように、受け取るのなんて、当たり前だ！

「いただきま～す」

がぶりっ。
齧りつけば、じゅわっとしたたる肉汁。
塩と胡椒とピリッと舌を刺激する香辛料が、いい塩梅でうまい！
かぶりかぶり、もぐもぐと一心不乱に食べてしまう。

「うまかったです」

気づけば、大きな肉の串焼きがぺろりと腹に収まってしまった。

う〜む。

そんなに腹へってたのかな？

そこまで空腹ってかんじじゃなかったんだけどなぁ。

それほど、美味かったってことか？

「ふむ。それはよかった。」

うむうむと満足気に頷く様子に、人の良さを感じる。

「ところで、これって何の肉なんです？

食べたことない感じがするんですが？」

「あの辺りを飛んでいる奴らを、適当にとってきたが？」

あの辺りって……どの辺り？　っていや、え〜と……

「えっ？」

「ほら、あの辺にくるくると飛んでいる輩（やから）がおろう？」

「……はっ？」

いや、見えてますけど。

あれ？　えっ、本当に？

ほんとう〜にあの辺を滑空している奴ら？

「えっ、いや……でもあれって……」

「人に害を及ぼすとして討伐されて、打ち捨てられるぐらいならと思ってな。
その命を大切に調理させてもらったのよ。」

いや、そんなすごい真面目に。
慈悲深いのか、躊躇ないのか判断に迷うような潔さを発揮しなくても……

「まじっすか？」

「嘘を言ってもどうしようもあるまい？」

「――――――そうですよねぇ」

遠くの空を支配領域にしている群れ。そこを思わず遠い目線で見てしまった。
そこには、こんなに遠くから見ているとは思えないほどはっきり見える陰が縦横無尽に空を滑空している。

その陰の正体は、魔怪鳥（グリット）。
体長５メートルから３０メートルと、大きさの幅が広く、体長が大きくなるほどに含有魔力が増加し、その体皮の堅さが増していく非常にやっかいな魔物だ。
最小サイズの魔怪鳥（グリット）を討伐するにも、様々な罠を張り巡らし、寝込みを襲うような狡さと、寝首を掻く瞬間にも油断しない慎重さがいる。
唯一の救いは、人が住みやすい地域が苦手で、生物が棲むには適さないような辺鄙なところを縄張りしていることだろう。

そんな辺鄙なところで魔怪鳥（グリット）が何を食べているかは、未だに謎だが
……
俺、そんなの食べて明日大丈夫なのだろうか？
うまいうまいと腹に収めたモノに、大きな不安を抱いてしまう。
ちょっと呆然としつつ、ぐだぐだと腹に収めた串焼きと、明日の腹事情について考察しても、結果は出ない。
これはいっそう、聞かなかったことにしとこうかなと思っていると
「悪魔を送り還して欲しい」
明瞭簡潔にして唐突に言われた。
そして、
「では、頼んだぞ」
それだけしか言わないで忽然と姿が消えた。
そう、姿がぽんっと軽い音をたてて消えた。
って、消え……？
「えっ……ちょっと。はぁ？
いや、なんか訳わかんないんすけど？
悪魔って言われても困るんですが。
どの悪魔？　ってか、何で俺が？」
消えた空間に思わず手を伸ばして、疑問を捲し立ててもどうしようもないことは分かっている。
けど、そう思うことと言うことは別だ。

感情優先だろう？　こういうときは。

飯もらったと思ったら、変なのを食べさせられるし。
食べ終わったら、わけわからん依頼だし。
質問しようにも、あっさり消えるし――――――

「一体、何なんだーーーーー！！！」

大渓谷を前に、思わず叫ぶ俺は、どこもおかしくはないだろう？

参、俺と残された黒羽

呆然としていると、ひらりと羽が落ちてきた。
家で拾った黒い羽と同じものみたいだ。
その羽にはまたメッセージがついていた。

“この者を頼む。場所については羽に聴いて欲しい”

「はぁ？」

いや、なんていうか、

「えっ、なにそれ？」

黒い羽から立体映像が飛び出し、人物の特定はできたが、何だそれ？
羽に聴けってなんだよ。

もしも～しとか、声かければいいんですか？
声かければ、羽が俺をそいつのとこまで導いてくれるのか？
おいおい、そんなわけないだろう。

……ない、よな？

ってか、ない――――ってのが、ないのか？

天の御仁方の対となるような彼の方は結構、誠実だ。
彼の方がおられるのは、天の御仁方がいる世界と対となる世界。
いわゆる魔界と言われるところに坐している。

地上種の妄想の中では、悪の総統。混沌の象徴として見られているが、見られているだけ。
実際に遭ってしまえば、むしろ天の御仁方よりも優しいし、温かみがある。
頻繁に会うことはないけど、わりと彼の方の在り方は俺が好むところだ。
それでも、やっぱり厄介事を押し付けるところはどうかと思うし、
そんなとこは天の御仁方と同じじゃなくていいと思ってはいるけど。

そんな、彼の方が渡してくれたものだけに、完全に否定ができない。

いや～。
天の御仁方のくれるアイテムとかだって、本物しかないんだけどね。
気分的なもんだよ、それは。
やっぱり、日ごろの行いって大事だろ？
いつもイジメかと思うような厄介事を押し付ける方より、信頼性は増すって。
その辺りは仕方ないと思うんだよね。

ってことで、まぁ、とりあえず……
ダメでもともと。

「もしも～し」

めちゃくちゃ小さい声で、ぼそりと羽に声をかけてみたわけなんですが……

……

無反応。さて、もう一回？　それとも？　いや、まずはもう一回か。
さっきよりも少し大きく。

「もしもし？」

……

――――やっぱ、

「……なに？」

やっぱ無理だよね～とか思っていればぼそりと微かな声がした。

――――微かな、声が、した？

「えっ？」

「なに？」

あっ、やっぱ羽が話してる。
ってかまじで、羽が話してんのか？
どっか、他のところから声が……

「なに？」

「えっと……」

咄嗟に、出てこない。
羽から声がするとか、ありなのか？

「なに？」

俺が混乱する中、不機嫌そうに同じ言葉がかけられるが、俺はしばらく「えー」とか「あー」しか言えない。
それを受ける羽は「なに？」しか言わないし……。

かなり不毛な会話とも言えない会話が続く。
ってか、もしかして「なに？」しか言わないってわけじゃないよな？

なんて、思っていたあのときのことを思い出しながら、俺は今、目の前の光景に圧倒されている。

「うわっ、すげ～」

真っ青な空と、白い雲。そして、太陽の輝き。
あるのはそれだけだが、青い空に浮かぶ雲の切れ目から覗く光の柱や、バリバリと呻る雷雲は壮観だ。
それは普段、見ることが叶わない幻想的なまでの美しさを感じさせる。
感じさせる、が……

「こえ～～～」

ひゅんひゅんと風を切る音に、身体に当たる豪風。
半端ない寒さにがたがた震えながら、ひたすら腹ばいになって何とか凌いでいれば、その感動もすぐに吹っ飛んじまうって！

そう、いま、俺は、なぜか、遥か、上空を、飛んで、い、る～～～～。

ってか、さーむーいーーーー！！！

寒さを何とかしようと身体を丸めれば、かえって身体に風が当たって寒い。

かといって、ペタンと腹ばいになっても変わらなかった。

「なぜこうなる？」

風岬の大峡谷に来た時なんか目じゃないほどの上空。

鳥どころか、魔鳥ですら飛ばないような超上空に。

しかも、巨大化しただけの黒い羽に、どうして乗ってんだ、俺！

「なぁ、ほんとに、大丈夫なんだよな？」

「……平気」

俺の生死に直結する疑問にちょっとの間の後に響く声が、非常に不安になる。

俺の安全はこんな荒れ狂った風の中、保障されてるのか？

この寒さで凍らないのは、奇蹟なんじゃぁ――――

『離れていい？』

瞬間、さっきとは比べ物にならないほどの寒さに襲われる。

「って、悪い。お前のおかげだから、俺から離れていかないで。

この寒さからだけでも守ってください。お願いします。この通り！！！」

『ふんっ。まったく。』

不機嫌そうな声をだしつつ、俺の側にぴたりと張り付いてくれたのは、風岬の大峡谷で勝手気ままに過ごしていた風の精霊だ。
羽にしがみつく前に交渉しておいて、本当によかった。
こいつのおかげで、凍死しそうな寒さから身体が震えるぐらいの寒さに戻る。

「ありがとう」

礼を言えば、『ふんっ』と顔をそらして照れる姿は、この羽にしがみついている過酷な状況下では癒しだ。
しかも、さっきよりも寒さも和らいでいる。

こんなに助けてくれるとは。
まじで、ありがたい！

そんな風に、俺が感激しているところに、恐怖の声がかかる。

「スピードをあげます」

「いや、ありえないだろ！
ってか、今の段階で早すぎだろうーが！！」

「いえ、まだいけます」

「って、おい、俺は――――」

「あげます」

反論する間もなく、更にスピードがあがる。
おかげ様で和らいだ寒さは元通り。
風の勢いは更に増した。

ほんとに、ありえねぇ～～～～

ってか、どっから声出してんだろう、こいつ？
声って思ってるだけで、思念なのか？
まぁ、そんなことはどうでもいいか、取りあえず今思うのはこれだけ。

「マジ、怖いって」

いや、ほんとに。
不毛な問答のあとに突如、御仁がくれた黒羽が巨大化して今に至るわけだが、何故こんな超上空を飛んでいるのかはさっぱり分からない。
行きと同じように、あの巨鳥とかが運んでくれればいいのに。
よりにもよって、なんでこんな薄っぺらい羽に乗らねばならないんだ？
しかも、スピード狂かよって言いたくなるぐらいに飛びやがって。
俺を、殺す気なんじゃないか、この羽め！！

もう、本当に勘弁してもらいたい。
なんで何もできない俺が、こんな過酷なことをせにゃならんのだ！
御仁の御力なら、ぱぱっと瞬間移動とかできるだろうに。
わざわざ、こんな危なっかしい乗り心地ので飛ばなくたっていいじ

ゃないか。
なにか、俺に恨みでもあるっていうのかよ！
そんな恨みごとをグチグチと唱えながら、俺はひたすらぶるぶると寒さと恐怖で震えていた。
俺に張り付いている風の精霊も、何気に震えているのは、もしや――
――――――
『ボクよりはやいなんて、悔しい！！』
ああ、悔しがって震えてたのか。
ってか、風の精霊もスピード狂なのか……
がくりと俺は、羽に突っ伏してしまった。
もう早くこの状況から抜け出したくてたまんないよ、俺は。

四、俺と空飛ぶ島

そしてたどり着いた場所に、性懲りもなくぽかんと開いた口が塞げない。

「マジっすか……」

「この先、目的地」

「そう……」

もうため息しかでない。

「なんで、こんなとこにいるんだよ。」

そして、恨みごとの一つも言いたくなる。
同時に、今回の危険な超上空飛行の理由に気がついて、またため息が出た。

そんな俺が今いるのは、雲の上の楽園。
天に最も近いとされる、天空の島にして聖獣の島。
地上で言うところの、幻の楽園を見渡せる場所。
つまり、超上空にぷかぷかと何で浮かんでんだよ！
と言いたくなるような、異様な雰囲気がある島を見下ろす場所にいる。

「ってか、マジでこんなとこに島なんてあったんだな」

幻と言われるだけに、空想上の島なんだと思っていたんだが……
そんなばかな、天空の島なんて、ないない。
島が浮いてるだけじゃなく、聖獣の島なんて夢物語、嘘っぽいだろう？
――と思ってたのに、本当だっだとわ。
新たな事実を目の当たりにして、ちょっぴり感動してしまう。
けど、俺に感傷に浸る暇はなかったらしい。

「……危険域間近。降ります」

ひどく淡々と告げられた声に、俺はただ了解と呟くしかなかった。

「本当に、何でこんなとこに悪魔がいるんだよ……」

あとに続けた呟きは、急降下で発生した風に巻かれてどこにも響きゃしない。
まぁ、正直どうでもいいことではある。
誰に言うことでもないし、返事なんか期待もしちゃいない――

「詳細不明」

「……そうですか」

俺の呟きに律儀に応えながら、黒い羽はますます勢いをつけて降りていく。
遠かったはずの島は、だんだんと近づきその様相を現していく。
そして、俺は

「はぁ、まじで？　ありえなくね？」

近づく島に思わず突っ込んだ。

緩やかな風が頬をなで、青々とした葉がさわさわと揺れる。
草木の生命力はたくましく、美しい。
その中で、獣たちが穏やかに歩いている。

「ありえねぇーーー」

その光景に目眩がして、思わず手で顔を覆ってしまう俺は、決しておかしくないと思う。

「何なんだよ、これは」

幻とまで言われた聖獣の楽園なんだからっていっても、だ。
目をこすって確認してしまうぐらいのことはしたくはなる。

いや、さ。
普通に考えてくれよ。

ここは、遥か彼方の超上空なわけでさ～。
そんなとこに浮かんでいるのだけでも、何なんだよって感じなんだが……

そんな場所で吹く風が、微風。
緩やかな風っておかしいだろう？
強風希望ってわけじゃないから、俺的には大歓迎だけどさ～。
それとこれとは別だろう？

しかも、適温とかになっちゃってるし、訳分からん。

あれか？
島になってる時点で風は微風に変わんのか？
寒さが地上並みになんのか？

んな、わけねぇーだろうが！
それに、この島の植物とかもおかしいだろう！！

なんでこんな雲を突き抜けて雨も降らず、強烈な陽の光を浴びている場所で健全に植物が育つんだよ。
ここで育つぐらいなら、風岬の大峡谷だって不毛の土地に何かなってない！！

「まったく、どんな力技だよ……」

幻の楽園だからで納得したくない状況の中、俺は投げやりな気分になってしまった。

「天の力」

「まぁ、そうだろうとは思うけどさ」

『ボクらの力』

「まぁ、それもそうだろうけどさ」

ここは地に属する場所であって、地の場所ではなく、天の属する場所であって、天の場所ではない。
曖昧な場所ではあるが、天の御仁方が降り立つには最適なんじゃな

いかとは思う。
地に属していても、地上には影響しない場所だから地上に降りてくるほど配慮することもないしね。
自然、ここは天の御仁方の気配が濃くなり、余計な力が溜まっちゃたんだろうな～。
そのせいっていうのも変だけど、力が溢れてる所で精霊が生まれるのは必然。
精霊が増えれば、環境も整ってくるだろうし、精霊たちも住みやすいようにするだろうし。
けど、

「それにしても、力技すぎだろう」

緑豊かな楽園に、俺は関心すればいいのか、呆れればいいのか。
まったく、この世はまだまだ知らないことばかりだ。

「この秘密を解き明かしたいと思うだろう？」

「……はぁ？」

俺が島の不思議に頭を振っている横で、声がした。
というか、第三者が急接近して嬉々として近づき、肩を思いっきり掴まれた。

「この不思議な現象を解き明かし、これを応用できれば面白いことになると思わないか？」

「……」

「力が力を呼び、こんな現象を創ることはすでにここが証明してい

る。
　しかし、まだはっきりと確証を得ていないのは、どういった土地ならそうなりえるかなのだよ。」

「……あの」

「地上から離れているのならよいのか。
それとももっと他の条件があるのか？
それがわかれば、吾は偉大なあの方をその地へ誘おう！」

「……すいません」

「そしたら、どうなると思うかね、君？
君にも、わかるだろう？」

「……えーと」

「そう、吾らの偉大なるあの方の祝福に満ちた世界が広がるのだよ！
　ああ、吾らの偉大なるあの方が降り立たれる地は、いかに素晴らしい土地になることか。」

「……その～」

「君もそう思うだろう？
ああ、素晴らしい！
想像するだけでもこの身が震えて仕方がないよ」

「……それは、あなたの身体が蒸発しかけてるからでは？」

『きっと、そうだろうね』

「悪魔だから、それが必然」

自己陶酔に浸る第三者、もとい依頼された悪魔から、どす黒い煙がしゅわしゅわと立ち昇る。

煙が空に消える度に、悪魔の存在感も小さくなっていく。

そんな尋常じゃない現象に見舞われているというのに、悪魔は御仁への賛美を深めるだけで、自分のことを省みようとはしない。

いったい、この悪魔はなんなんだと言いたい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3777k/

神様のお使い

2011年11月10日04時18分発行